

取り立てることが出来なくなつた。  
 金を持つてゐる事業が經營困難に陥るといふのは、あり得ぬ不合理な話であるが、理窟と實際とは必らずしも一致しない。住友家は他に融通した金の回收が全部不能となつた爲に、非常な窮乏に陥り、銅山に働く坑夫の賃銀にさへ不安を感じたのだから、本店に勤める番頭や手代の給金も、満足には渡す事が出来なかつた。

かういふと、現在の住友と比較して、全く嘘のやうな話である。東京の三井、岩崎と併稱される大阪の鴻池と住友は、わが國では富豪中の大富豪として、東西財界の覇を握つてゐるのであるから、いくら世間の騒がしい幕末時代にも、それ程までに困窮を感じる筈はないと、誰だつてさう考へるのは當然である。

しかし今日それ程の搖ぎなき大磐石の基礎を、わが國財界に築き上げた大巨商住友家にも、實にさうした御難時代のあつたのは嘘ではない。人の一生の運が波の如くに高低等しからぬと同様に、またその事業も同一である。

大きな成功者には、それだけ大きな失敗のあるのは免れがたい。大成功を見るまでには、必度幾多の失敗を續けた結果を、見のがすわけには行かぬ。住友家だつて現在の富豪となるまでには、事業の盛衰や興亡は絶無とは斷言出来ない事だ。

その最も烈しい打撃を蒙つた維新の際には別子銅山も遂に閉鎖に瀕する悲境に陥つたのであつた。この經營困難を切り抜けるには、主従がどれだけ苦勞を續けたか知れないが、就中主家興亡の危急の秋に、一身を賭して傾きかけた事業を挽回した一個の人物があつた。

別子銅山の支配人に、非常な手腕家として信任の厚い故廣瀬幸平といふ大番頭がゐた。彼れは今から四代前に、丁稚として年期奉公に住み込んだのであつたが、惻愍な丁稚として主人から特に目をかけられたので、其の恩義は年と共に深く感激するところとなり、この主の爲なら命も投げ出さうといふ、堅い覺悟を抱いたのであつた。

主従三世のたとへを、單なる諺としなかつたこの廣瀬幸平氏は、實に住友家に取つては、偉大なる功勞者として、今なほその徳を追憶してゐるのは、有名な美談である。

維新の際に於ける住友の窮乏を、抛身救つた廣瀬が無かつたなら、果して今日の住友はこれ程までに隆盛を見たであらうか。

### 借用證文を焚く

主家中興の元勳、別子銅山の支配人廣瀬幸平は、たしかに手腕も識見も備はつた人物であつたに違ひない。



窮迫せる主家の大事を、どうして腕を拱き思案の吐息をついて見てゐられよう、日頃の恩義に酬いはこの秋と、血腥い世と變つて至るところで物騒な噂ばかりを聞く幕末の明治に移らうとする時代ともすれば無頼不逞の浪士達が亂暴狼藉の限りを盡してゐる間を、一身を賭して東西に奔走し、辛くも銅山の開坑を續けた事だけでも、並大抵の苦勞ではなかつたであらう。

事業經營の上に金力と共に必要なのは膽力である。宰平の變に處して動じなかつた度胸が、よく萬難を一身に引受けて、成し遂げ、主家を泰山の搖ぎなきに置いたといふ事が出来る。

東奔西走の甲斐があつて、別子銅山の經營はやつと、そのまゝ繼續出来るやうになつたが、さうなるまでの整理は、随分思ひ切つたことをしたと言ひ傳へられてゐる。その一例としては、こんな事がある。

貸金の回収が全く不能となつた際、本店や出店の番頭や手代達から、一時の融通まで受けたものだつた。無論それは借用證文を渡しての上であつた。

それをある日、支配人の廣瀬が一同を本店に集め、借金を返すといつて、證文を残らず提出せしめた。

『私の手で、この借金は片付けるが、それで皆の衆は不承はあるまいな』  
かういつて一座を見廻した。

『それは一向に差支はござりませぬ。結構に存じます』  
と異口同音に返事をした。

『承知をして呉れ、ば、萬事を私の思ふやうに片付ける』

宰平は自分の手許に集まつた借錢證文を、炭火のカン／＼におこつた大火鉢の中に入れた。

アツと驚いて總立ちになつた時には、證文はメラ／＼と燃えて忽ち灰になつてしまつたのである。

餘りといへば言語道斷の暴舉だ。たとへ支配人といへども、これをそのまゝに泣寝入りには濟まされぬと、イキリ立つた連中が、

『飛んでもない、何をなさいます』

と血相を變へて詰め寄りながら、支配人宰平の返答如何によつては、この場合無事には納まりさうもない光景を現出した。

『皆の衆静まつて下され、そして私の言ふ事を兎に角、一通り聞いて貰ひたい』

殺氣立つた間にあつて、顔色一つ變へず落着き拂つて膝を進めた。

流石に手出しもならず、憤懣の色をなして何を言ひ出すかと、廣瀬の顔を昵と眺めてゐる番頭手代に向つて、

『お家の此頃の様子は、皆の衆にもよくお解りの事だと思ふ。世間の騒がしさにつれて、各所に御用



立てをした金は、全く貸倒れも同様となつて、それが爲に店は非常に行き詰まつてゐる。この危急を切抜けるには、どうしても皆が力を一つにして貰はねば、主家は滅んでしまふ。家を潰す事は何んでもないが、一旦潰してしまへば再興は容易な業ではない。それでもよい、潰してしまつても、貸しになつてゐる金は取らうと言ふ事なら、證文は焼いたが、金は何うにでも才覺して返す。遠慮はいらぬからめい／＼の望みを聞かせて貰ひたい』

宰平は熱誠を面に現はし乍ら、一座を靜かに見廻した。その眼には涙が一ぱいであつた。

主家の興亡を憂ふる赤誠は、自からその一言にも一句にも溢れてゐた。この悲壯を極めた支配人の態度に、動かされぬ者があらうか。

一座は肅然として聲を飲んだ、誰一人言ひ出す者もなく、感激に打たれて自然と頭が下つた。

『今こゝで主家が滅びては、お互ひの身も共に、不幸な目を見なければなるまい。一人となつて苦しむのなら、今まで縁あつて主従となつた者ばかりが集まつてゐる店で、一緒に苦勞をしてこの難關を切抜きたい。皆が一身一家の爲に、働いてくれれば、必らずどうにでもなる。そこで甚だ無法な事と承知の上で、借錢の證文はこの際反古と諦めて貰ふために焼き棄てた次第である。もとよりこの事は、御主人は全く知らぬことで、私が獨斷でやつた仕事だ。その代り店が繁昌にさへなれば、私が誓つて償ふやうにする』

宰平の言葉に、誰あつて不服を唱へる者はない。その忠節に動かされて、番頭も手代もむしろ喜んで證文を反古にする事を誓ひ、たとひ身を粉に碎いても、協力一致して主家の爲に盡す覺悟の臍を固めたのである。

廣瀬は至誠をもつて、店の多くの者を納得せしめた爲に、危急に迫つてゐた住友家は辛くも局面を展開する事が出来た。

かういふ間に在つて、宰平は自己所有の田畑を一切抵當に入れて金を工面し、全力を注ぐべき主家の別子銅山に、搬出運送を便ならしめる牛車道を開鑿して、從來の如く人足の背をのみ用ひてゐたのを、大八車で鑛石を運ぶやうにしたり、彼れの一身は全く主家の爲に捧け盡してゐた。

住友家今日の富を築いたのは、實に支配人廣瀬宰平といふ人傑が、萬難に身を賭して引受けた盡忠の功によるのである。

### 右大臣家から養子

今日の巨富を爲した男爵住友家にもかうした、想像にも及ばぬ時代があつた。

その累卵の危きを脱した後の、別子銅山は益々隆盛に赴き、すべての經營事業は實に旭日昇天の目ざましさをもつて發展して行くのであつた。



そして明治二十五年には、故右大臣徳大寺公の第六子、西園寺公望公の實弟である友純を迎へて養子とした事は、當時にあつて驚異に價する噂の種として、話題を賑はしたのである。

徳大寺公といへば公卿殿上人として、重きをなした家柄であつた。その權門から一町人の許に養子縁組をしたのだから、これは非常な名譽な事であり、羨むべき事實であつた。

流石は由緒正しい名門の出だけあつて、謹直をもつて名望高く、氣品も自然に備はつてゐたのは争はれぬ。財界の波瀾に乗じて成り上つた商人などは、對座をするさへ何んとなく氣おくれがしたのであらう。友純氏は特に親しく交際を求めざる者もなく、餘り會合などにも出席せず、代理をもつて用を辨じてゐたのであつた。

さういふ社交的に進んで顔を出さず、大方は内にあつて、經營事業の統轄に心を注いでゐたが、人材を見るの明は實に勝れてゐた。手腕を認めれば拔擢登用するに吝かでなく、その技能によつて適所へ配し、思ふがまゝに才幹を發揮せしめた。

この英斷に感奮した連中は、一層主家のために至能力を傾け盡したので、事業の成績は益々擧がる一方である。これが各方面の事業に現はれるのだから、住友家の富は年々に豊かになつて行くのは怪しむに足らぬ。

男爵を授けられたのは明治四十四年で、多年の財界に於ける功勞を嘉せられての恩命であることは

いふまでもない。

一體住友家は、時世に超越して、祖先からの慣例を各種の企業が株式會社と組織を改められるまでずつと踏襲してゐたものだつた。それにはかういふ一例がある。

毎年の恒例として、夏冬に定紋を染めた羽織を一枚づつ贈つたものだ。無論これを貰ふ者は一定の資格はあつた。冬は下級が七子、上級は羽二重と區別してあり、夏は縞であつた。これが毎年二期に繰り返されるので、羽織は殖えるばかり、時宜によつては辭退差支なしといふ事であつた。もし辭退すれば羽織に相當した代として金一封が渡されるのが家風である。

かういふ例は老舗を誇る大きな商店に、行はれて來たものだが、今時そんな慣はしは小さな店はいざ知らず、大きなところでは殆ど全廢されてゐる。住友家でも時世と共に、この制は廢絶となつてしまつた。

が、住友の主従關係は、この定紋のお仕着羽織のあるなしで、親疎が生じるわけでは勿論ない。

### 別子銅山の暴動事件

明治四十年の春、別子銅山に働く全坑夫五千が、飯場頭の指揮の下に俄然暴動を起した。

この大暴動の原因は、多年の弊習であつた、飯場頭請負制度なるものを全廢し、全坑夫を會社直



轄の下に置く事を計畫し、併せてそれと同時に飯場頭の専横を抑壓しようとした。元來この飯場頭一人に隷屬する坑夫の数は、最も少ないものでも五六十人あり、勢力あるものに至つては、實に四百五百の大勢を支配し、侮りがたき一致團結の力を有してをり、命令には水火をものゝかすとも思はぬ精悍なる凄い連中を、自由自在に動かしてゐるので、この飯場頭の請負制度は、會社でも手古摺る事が多かつた。

何とかしてこれを廢止しようと、機會を待つ事久しかつた處へ、たまく、東京控訴院判事の職に在つた中田錦吉氏が、明治三十九年の秋、別子銅山鑛業所長として赴任し、多年司法官を勤めてゐた見地から、飯場頭請負制度を不合理なもの認め、大英斷をもつて廢止すべく、探鑛部の技師八代工學士をして、直接命令を傳達せしめたのである。

飯場頭達はこの命令に憤慨して、容易に服従する者はなく、ひそかに集合して、協力一致八代技師排斥の聲を擧げた。彼等は運動を開始して、中田所長に迫つたけれど、もとよりそれは受け容れるべき筈はなかつた。

鑛業所で斷然として要求を拒絶された坑夫側は、最後の手段によつて貫徹を期すべく、恐るべき暴動の陰謀は企てられたのである。彼れ等の手には、一擲岩石を粉碎すべき爆藥が、多數備へられてゐるのだから、一朝この連中が蜂

起すれば、容易ならぬ事態の起るのは當然である。到底要求の容れられざるを知るや、四十年の春に至つて、數十の大小飯場頭は、一せいに各配下の坑夫を使喚煽動して、突風の如く喊聲を合圖に、各所同時に蜂起し、爆藥をもつて焼打ちを始めるに至つたのである。

爆音は全山を震はし、炎々たる焔は至るところから凄まじく擧がり、叫喚と怒號の包まれた別子の天地は、形容しがたき、光景と變つた。

別子銅山大暴動の飛報は、縣下へまた、く間に傳はり、大阪の本店にも凶報が通ぜられたのは數時間の後であつた。

所轄署の警官は全部總動員で、鎮撫に向つたが、既に殺氣に満ちた死物狂ひの五千の坑夫は、僅かな巡查の手では、制禦の術がなく、縣警察部からは警察部長自から、應援隊を率ゐ、全縣下から召集した數百の警官隊は、續々繰り込んで來た。

しかしその多數の警官隊を近づけず、疾風の如き勢をもつて、將に新居濱の鑛業所を襲撃せんと、山を下つて迫つた時、本據を暴動の煙としてほと、勇敢な社員は萬死一生の途なきを守つて、悲壯な覺悟をもつて踏止まつた。

鑛業所附近一帯に防禦の鐵條網を張り繞らし、精鍊部の電氣工を説き、強烈なる電流を通じて立て籠つて、鎮靜を待つたのである。



愛媛縣知事は事態の重大を憂慮し、善通寺師團長に對して、暴徒鎮壓の爲に出兵の要求を電請するに至つた。

歩兵一個中隊は命令一下、強行軍によつて直ちに營門を隊伍堂々繰り出した、しかし出兵の形式ではなく、發火演習といふ名であつたといふが、演習地は新居濱であつた事は言ふまでもない。

軍隊來る、この聲は絶對の威力である。猛り狂つた五千の暴徒は、強行軍の武步堂々として、駈足で進んで來る一個中隊の兵を眺めた時、如何に兇暴の限りを盡した坑夫も、軍隊に對して抵抗はしなかつた。

かうして暴動は忽ち鎮定し、新居濱の鑛業所は、爆彈にも見舞はれずに濟んだのである。

法は暴動者を片つ端から裁いて、さしもの大事件も一段落を告げた。この機會にかねての計畫は、悉く實現し得ることが出來、別子の隆盛は今日に及んでゐる。

## 元氣なセメント王



## セメントの製造

浅野の事業で代表的なものはセメント會社と東洋汽船會社の二つであつた。  
その一つの東洋汽船は日本郵船と合併されてから、今ではセメントが唯一の代表事業である。何しろ浅野總一郎の經營する會社は、大小取りまぜて三十五を算し、重役として名を連ねるものが五十に達してゐる程だから、財界の大立者として一方の覇を握つてゐる奮闘家である事は、今更言ふを要せぬ。  
芝高輪、泉岳寺に近い田町の高臺に、品海を控へ遠く安房上總あたりも、晴れた日には眺め得られる高樓の屋上に、金色燦然として異彩を輝かしてゐる二個の鯨を飾り付けた邸宅は、浅野總一郎が如何にも俗氣の溢れた得意の目じるしであり、自慢の裝飾として、東京見物に來た地方人の土産話の種となつてゐる。金色の鯨は名古屋城頭の模倣かどうか、そのいはれ因縁は知らぬが、彼れは愛知縣下の産ではない。郷國は越中である。八十歳を超えた浅野老が、二十四までは郷里で一生懸命になつて百姓に精を出してゐたのを、草深い北國の片田舎で百姓業に一生涯を終るのは、男と生れた甲斐がない、身を立て名を擧げるには、どうしても八百萬石のお膝下に出なければと、大きな望みを抱いて江



戸に來た。

たしかに其の頃は時代がよかつたと、一口に言つて、誰でもその時分に生れてゐれば成功が出来るやうな事をいひ度がるが、別段昔だつて容易に成功するものぢやない。矢張り今日名を爲し一代に富を築くだけの人物は、普通のボンクラではなく、衆に擡げた働きの者に相違ないのである。

江戸に出たら何か仕事を見つけ、稼いで金持ちにならうといふだけで、これといふ見込みは無く出て來る者は、どれ程澤山あつた事だらう。

浅野總一郎氏もその一人であつた。だから江戸を志して來た時には、夏の日盛りに砂糖水を茶碗に入れて、一杯何がしの價で大道に水桶を置いて賣つてゐた事によつても、商賣のアテがなかつた事は分る。まさかに越中あたりから、江戸の地に出た目的は、砂糖水を賣る爲めでもなかつたらう。

今なら大道のアイスクリーム賣りといふ格であるが、この方が原料を仕入れるに多少の資本も要するけれど、砂糖水にはたゞ砂糖だけを仕入れれば、水は行きあたりばつたり、何處の井戸からでも無料で汲んで來られる。

實に都合のいい商賣だが、一杯賣つたところで、二厘か三厘が關の山で恐らく五厘とは取れなかつたらう。

兎も角もそんな些細な商賣から、苦勞を重ねて腕一本腰一本で叩きあげた今日までの經歷は、立志

美談として傳へるに足る立派な奮闘努力の結晶である。

今、深川區清住町の大川に沿うて建ち並んだ幾棟かのセメント工場は、浅野經營の大事業となつてゐるが、これは最初から浅野總一郎氏が計畫した事業ではなかつた、明治四年に工部省が設置したのであつた。しかし其の當時は、現在とは異つて、それほど需要の途がなかつたため、そこは規則づくめの官業の事として、思はずに成績の工場を、いつまでも繼續してゐるわけには行かず、遂に十三年に至つて、一時工場を閉鎖してしまつたのである。

その閉鎖したセメント工場を、工部省に請願して借受けようとしたのが浅野であつた。官業でやつて駄目なものが、碌に資本もない個人が手を出したところだと、むしろ其の舉をあやぶんだ者が多かつた。しかしそこは浅野のする仕事で、決して成算のない事に手を出す筈がない。充分に見込みがあればこそで、それが今日の浅野の土臺を固めた因であつたのである。

工部省から借受けたセメント工場は、別に修理を加へるところなく、直ぐに使用されるだけでも、非常に好都合であつた。だから一時に多額な資本を投ぜずに、早速セメント製造を繼續することが出來た。

官業のセメント事業が、思はしい成績を挙げられず、無用視されて工場閉鎖の運命にさへ陥つたものを、その不振を承知の上進んで繼續したのだから、まづ誰の考へも成功するとは思つてゐなかつた。



しかし事業運ばかりは、豫測を許さないものであつた。理窟からいつても、資金が豊富で経験と知識とを有する専門家のゐる工部省の經營に比して、微力な一民間の經營の方が、勝れてゐるとは思はれない。

それが不思議な事に、淺野の手に移つてからの方が、成績が擧がつた。もつとも官營當時から見ると、規模も縮少したからでもあらう。ともかく漸次に需要高の増して行つたのは事實である。

かうして將來の見込も、充分だと確信がついたので、十六年に拂下けを受ける事になつた。そして製法の研究、品質改良のために、技師を歐米に派遣視察せしめ、機械も新しいものを購入し、盛んに製造能力を擧げた。

このセメント事業には、同郷の先輩で常に往復してゐた故安田善次郎が、資力の應援を與へて、淺野の事業に盡した事は、どれ程心強い頼みであつたらう。

日清戦争後に於けるわが國は、著しく對外的に進歩した。そして歐米の文物は盛んに輸入され、同時に建築の如きも、洋風が次第に増加して來たものであつた。

洋風建築の多くなつた事は、セメント會社には非常に都合のいゝ事で、製造高の著しく増加して來たのは當然であつた。

なつて、分工場は續々と設立されるの盛運に向つた。今日、殊に大正の大震災に災害を蒙つた東京横濱の二大都市の復興に當つて、新築家屋はいふまでもなく、道路にも橋梁にも鐵道にも、あらゆる地上の工事には、セメントを要さぬものは絶無といひ得る程、使途は多くなかつた。

中天を摩する高層の大建築、大河に架する長鯨の如き橋梁すべてを、文明建築に則つて、耐震不燃の築造物は、鐵を基礎として混凝土をもつて造營したものばかりではないか。

今後百年二百年、現在の建築構造法が更に進むとも、恐らくセメントの需要は、いよくより多くの使途を見る事は疑ふ餘地がないであらう。

淺野のセメント事業に對する先明は、既に五十年前に、今日のあることを知つたとは信じられぬが兎に角工部省の見放したものを、繼續して一代に巨豪の富を成したところに、他の及ばぬ獨特のえらさがある。

### 東洋汽船時代

太平洋航權獲得、この一事は何んといつても、わが海航史上に千古不朽の記録として傳へられる淺野總一郎翁の功績である。

淺野回漕店の開業は明治十九年十一月であつた。無論創業當時は、大規模なものではなく、僅かに



千二百トンの獨逸汽船一隻を譲り受け日の出丸と命名して、海運業に乗り出したのが、後年日本郵船會社と激甚な覇を競ふ、東洋汽船會社の最初の事業であつた。

澁澤さんはその頃、郵船會社の重役であつた關係上、大びらに援助することは出来ない位置にあつたのを、巧みに説きつけて味方になつて貰ひ、その後援を受けたことは事業の上にとつてどれだけ有利であつたらう。

萬事に周到な用意で、抜目のない營業振りが、一般の評判をよくした。日本郵船とは所屬船の數から言つても、到底問題にはならなかつた。先では何の淺野位がと、高を括つてテンデ相手にもしてゐなかつた。

それが淺野には勿怪の幸だつた。泉州堺から北海道小樽まで、屯田兵二千名を輸送する際に、郵船は一萬圓の運賃でなければ、引受けられぬといふので破談になつたのを改めて創業勿々の淺野回漕店に交渉があつた。

淺野は一も二もなく命令を受けて、しかも郵船が一萬圓の請求に對し、五分の一の二千圓で結構だと申出たので、忽ち話は纏まつたといふ話がある。

その時、屯田兵長官は、淺野が格外に運賃を割引したのを、國家に對して誠に奇篤な奉公振りだとあつて、七千圓の輸送賃を與へる事になつたので、五千圓は本當の丸儲けとなつた上、すつかり男

をあけた。それ以來彼はメキ／＼と事業を伸展させたなどは、機を掴むに全く妙を得てゐる。

こんな事を階梯にして、二十九年には澁澤、安田、大倉などの有力者を後援とし、資本金七百五十萬圓の東洋汽船を創立するに至つたのである。

東洋汽船會社の創業と共に、社長となつた淺野は、所屬船の註文のため、英米二國に出張する事になつた。新らしく汽船を註文するのは、第一の要件には違ひなかつたが、それと共に重大な要務を帯びてゐたのであつた。

太平洋航路の桑港線は、當時アメリカの二大汽船會社で、ピー・エム及びオー・オーの兩社の獨占航路で、絶對にこの二社以外の自由航行を許さぬものであつた。

郵船會社では屢々兩社に對して、交渉を試みたものだが、應じてくれぬので、殆ど諦めてしまつた。その難交渉を解決しようといふ願望である。

九分九厘まで絶望で、僅かに一厘に望みをかけた話だから、成功は到底覺束ないと考へねばならぬ仕事だ。まして今までに郵船會社がさん／＼運動をして、話が成立しなかつた問題である。それを承知の上で、當つて碎けるといふ覺悟を定めて交渉しようとするのだから、大膽といへば大膽だし、不敵といへば不敵な振舞である。

桑港に上陸すると早速、ピー・エム會社に社長を訪ねたが不在、桑港線の航路に對して、重役の意



見を聞いて見ると、無論問題にはしてくれない。しかし折角はるくくと遠來の客を、木で鼻を括つたやうな扱ひも出來ず。社長の留守を口實にして、いゝかげんに言葉を濁してゐるので、更に要領を得なかつた。ピー・エムの社長ハンチントンには、紐育にゐると聞いて、到底話は駄目だとは思ひながら、最後の交渉を直接試みようとして、紐育に向つた浅野の意氣は壯とすべきである。

社長のハンチントンに會見して、桑港航路線の割込みの交渉を始めた。浅野の態度は凄じい程一生懸命だつた。その熱誠に動かされたものか、話は案外な結果であつた。

浅野はやゝ力抜けの形であつたのは無理もない。到底駄目だらうと、最初から踏んでかゝつたものの、交渉が纏まればそれに越した事はないので、全力を盡して、非常な意氣組みであつたのが、豫期した程に六ヶ敷しい事もなくスラ／＼と、話が思ふ通りに運んだのは大成功であつた。

かうして萬里の波濤を越え、社長自から交渉に出かけた甲斐あつて、素晴らしい大きな土産を、わが海運界に齎した功績は多とせねばならぬ。

流石の郵船も浅野の手腕には、稱揚してその成功を祝福したのであつた。

新汽船は英國に渡つて注文したのが、日本丸、香港丸、アメリカ丸の三艘で、その新造船が東洋汽船の扇の社旗を、海風に翻へして横濱の廻航するまでの浅野の活動は、實に一世一代晴れの奮闘時代であつたのである。

## 廢物利用の大儲

浅野が壯年の働き盛り、夏商賣の砂糖水も涼風が吹き初めると、いくら人通りの多い町で、聲を喰して怒鳴つても、見向く者もなくなつたので、横濱に出かけて何か儲け仕事を探し廻つてゐる。

恰度ガス事業が始まつて、幾年もたゝぬ頃で、ガスの副産物として出る、コークスとコールターの處分に、持て餘してゐるといふ時代で、値はいくらでもいゝから、引取つて處分をしてくれる者がないかと、買ひ手を求めてゐる話を耳にした。

たまく／＼コークスを焚いて、さまざまな方面に利用の出來ると聞いた浅野は、別に賣込み先のアテはなかつたが、何とか使ひ途があるに違ひないと、早速只同様の値で取引の契約をした。

そして他日自分が社長となる深川のセメントも、まだその頃は、全く關係のない官業であつた。そこへ手蔓を求めて燃料としての使用方を願ひ出た。コークスを試験的に使つて見ると、非常に好成绩であつたので、正式に納入方を命ぜられた。それによつて得た儲けは莫大なものであつた。

王子製紙の方でも、この話を聞いて、コークスを使用したのが、話で期待した程の成績を挙げ得なかつたため一度で中止となつた。けれどその代りに石炭取引の契約が、新らしく成立つた。これがそもそも滋澤榮一翁に見出される縁となつたのである。



それは後の話で、横濱瓦斯局では、廢物に等しいコークスで大儲けをした淺野に對して、瓦斯の副産物であるコールトーの方も、引受けぬかと交渉があつた。この相談には淺野も少し閉口した。といふのはコールトーの捌き方法がその頃では全くなかつたからであるが、しかしコークスで思はぬ利益を得てゐるから、使用方法のアテはなくとも斷つてしまふことは、淺野翁の氣質として出来なかつた。『よろしい、コールトーもお引受けをいたしませう』

と言つて一石を五十錢で契約したが、處分の途がないので、すつかり持て餘してしまつた。そして内心ではこんなものに出した事の無謀を、後悔した位であつた。

しかし待てば海路の日和がある。この始末に困り果てたコールトーが、途方もない金儲けをさせてくれる時が來た。それは明治十四年に於けるコレラの大流行があつた。悪疫の消毒用として石炭酸が無暗に消費され、製造が間に合はぬ程だつたので、その原料に用ゆるコールトーを、淺野に納入するやうに註文が下つた。

一石五十錢といふ安値で買込んだもの、使ひ途がないといつて、すつかり荷厄介としてゐたコールトーに、忽ち大量註文が來たのだから、淺野も思はず眼を瞠つて驚かされた。

この機に儲けなければと、七百石のコールトーを、一樽五圓といふ値で賣付けた。こんなに儲かる商賣が、自然と淺野の許にころけ込んだのは、全く金にめぐまれたことだ。

### 澁澤子に見出さる

王子製紙會社に石炭を納める時、淺野は澤山の入夫の眞先に立つて、まつ黒になつて働いてゐるのを、目をつけたのは澁澤榮一子であつた。そして、その働き振りに感心したのであらう。人を通じて面會を申し入れた。

この時分の澁澤さんは、大藏省を退いて民間に下つたばかりではあつたが、既に實業界一方の重鎮として、盛名を馳せてゐたその人から、呼ばれたのであるから、早速かしまつて罷出るかと思ふと、意外にも、

「晝間は働かなければならぬから、折角のお言葉だが時間の都合がつきませぬ。若し夜仕事が終わつてからで、よろしかつたらお伺ひいたします」

と返事をした。この返事が澁澤さんにすつかり氣に入つて、

「夜でも一向に差支はない。手間暇を缺かせることは甚だお氣の毒だから、そちらの都合のいゝ時で結構」

と快く承知をした。すると或夜更けて澁澤さんの門を叩いて訪ねた時、既に寢てしまつてゐたのをわざわざ起きて面會し、淺野の人に優れた活動を、しきりに稱揚し勵ましたといふ事である。



この初対面(しよたいめん)で澁澤(しぶさき)に知られた事(こと)が、浅野(あさの)の身(み)を起(おこ)すに、どれだけの好都合(かうつがふ)であつたか、無形(むけい)にも有形(けい)にも非常(ひじょう)な後援(こうえん)であつた。

安田善次郎(やすだぜんじろう)に知られたのは、セメント工場(こうぢやう)を經營(けいえい)するやうになつてから後の(のち)ことで、事業好き(じゆふす)の浅野(あさの)が幾つとなく計畫(けいかく)する會社(くわいしや)の資金(しきん)の融通(ゆうつう)や相談(さうだん)は、安田(やすだ)が大磯(おほいそ)の別荘(べつさう)で兎(う)に斃(たふ)れるまで續(つづ)いた。

事業好き(じゆふす)の浅野(あさの)が、現在(げんざい)一千萬圓(まんぜんいじゆう)以上の資本(しほん)をもつて、經營(けいえい)してゐる會社(くわいしや)だけを舉(あ)げて見(み)ると、

浅野同族(あさのどうぞく) (三千五百萬圓)

浅野セメント(あさのせめんと) (五千六百三十萬圓)

浅野造船所(あさのせうせんじよ) (五千萬圓)

小倉製鋼所(こくらせいかうじよ) (千五百萬圓)

東京灣埋立(とうきやうわんうめだて) (千二百五十萬圓)

磐城炭礦(いはきたんくわう) (千七十五萬圓)

關東水力電氣(くわんとうすゐりよくでんき) (千七百萬圓)

庄川水力電氣(しやうかゝはすゐりよくでんき) (一千萬圓)

ザツとこれだけを數(か)へる、この外(ほか)に七百五十萬圓(さんびゃくごじゅうばんげん)の内(ない)外(ぐわい)石油(せきゆ)、京濱運河(けいひんうんが)、沖電氣(おきでんき)、浅野物産(あさのぶつさん)、大日本(だいに)本礦業(ほんくわうげふ)の各(かく)五百萬圓(ごひゃくばんげん)つづがあり、その他(ほか)三百萬圓(さんびゃくばんげん)以下の事業(じゆふ)は枚舉(まいきよ)の煩(わづ)に堪(た)へぬ程(ほど)である。

# 運 取 り 逸 平



煙草屋逸平

甲州系財閥の開祖として、代表する者は我が若尾逸平である。一つの大きな事業を成す人物は、健康も衆に勝れてゐなければならぬのが條件の一つだ。それにしても逸平老は、非常な長壽を保つてゐた。九十四歳の生涯を終るまでに、明治の財界に甲州系といふ財閥を築いて、各種の事業に大きな勢力を張つたのは、彼れも人傑である。

逸平の弟幾造は横濱に出て、さまざまの事業を経営してゐるから、兄弟揃つて働き者であつたといひ得る。

甲州系の財閥を分けると、若尾系、横濱若尾系、小野系、雨宮系、根津系といふ五つに大別するところが出来るのだ。それは各項目を分けて説くが、逸平が産を築き財を成すまでは、並一通りの努力ではない。裸一貫からあれまでに成功した九十四年の生涯中、その壯年時代には全く血のにじむやうな奮闘の歴史が残されてゐる。

天秤棒を肩に、素足に草鞋を穿いて、村から村を桃の行商をして廻つた少年時代、煙草や真綿を背



に貢うて、僅かな口錢を儲けに歩き廻つた男が、後年の若尾逸平であつた。  
 些細な資本で初めた商買だから、いくら稼いだところで、大した利益はないのを、根氣強く勵んだ  
 努力は恐しい。儲けは積り積つて百五十兩といふ、兎も角も纏つた大金となつた。  
 世が世だから百五十兩といへば、一資本である。この汗の結晶で同じ村の某といふ不正直な男と共  
 同で、綿を仕入れたが、もともと逸平の資本を目あてにした仕事であるから、某の爲に元も子も失つ  
 てしまつた。

しかしそれは運が悪いのだと、別段に惜しいと未練の執着を何時までも持たず、更に新規直しと  
 心を決めて、失敗を取り返さうと思ひ立つたのは、流石に雄々しい覺悟であつた。この意氣をもつて  
 すれば、必らず事業に取りつく事が出来る。しかも彼れは稀に見る奮闘家であることは、村一般にも  
 知れ渡つてゐるので、信用をもつてしても資本の後援者はあつた。

五十兩の金を借りるのに、抵當もなくして證文一本で融通の出来たのは、餘程彼れを堅い人物と見込  
 んだからで、其の五十兩を資本にして、手馴れた綿を仕入れた。そして一生懸命になつて稼いだ。人  
 並以上に働いた結果は、當然目に見えて實績が擧つて行き、一戸を構へて妻帯して暮せるまでになつ  
 た。

その頃から世間は、泰平ではなかつた。明治維新にならうとする時で、少しでも志のある者は、安

穩として村に落着いてゐることは出来ない騒然たる天下の形勢であつた。

「山の中にあるよりは、一層の事江戸へ出て、何か商賣を初めた方が」

早くもさう思ひ立つた逸平は、無暗に江戸に出たくなつた。その矢先に浦賀にはアメリカから黒船  
 が来たといふ噂や、横濱が開港場となつて、異人の上陸が許されるやうになつたなぞと、一日一日と  
 變つた話が傳はつて来た。

「商買に取りつくのは今だ。この機會を取り逃しては駄目だ。異人は何んでも金銀を澤山持つて来て  
 るるといふから、異人相手に儲けなければうそだ」

かう決心して、横濱に出たのであつた。

そして生絲と綿の交易を始めたのが、思ひの外に當つて、忽ちの間に大きな儲けを見るに至つた。  
 しかしいくら儲けたとしても、自分一人の身體では、氣ばかり焦慮つたところで、思ふ半分も働い  
 事は出来なかつた。ふと思ひついたのは故郷にゐる弟の幾造であつた。

幾造は兄の逸平とは違つて、たゞ眞面目一方の男で、父と共にその頃百姓に精を出してゐた。横濱  
 が開港場にならうと、異人が上陸しようとして、こんな事には一向に頓着をせず、たゞ自分の仕事だと信  
 じてゐる野良稼ぎに、朝から夕方まで骨を折つてゐた。

その弟を連れて来て、二人で商賣をやつたら、今の儲けは二倍にも三倍にもなる、攔める時に攔め



るだけ儲けて置かなければ、世間の景氣は常に一定のものではない。儲けるのは今だ。逸平は弟を誘ふために、甲州に歸つた。

「お前が今だけの働きをすれば、金はいくらでも儲かる時だ、私と一緒に横濱に出る氣はないか、百姓をしてゐるよりは、どれ程いゝか知れない」

兄の逸平に勧められて、幾造は考へた。そして心を動かされた彼は、兄の言葉に従つて横濱に出た。

二人は甲州と横濱の間を、管子や小佛の難所を越えて、月に幾度となく往復し、生絲の買出しをしては、外人に賣込んで利益を擧げてゐた。

逸平の生絲貿易は年々に發展し、明治二年には兄弟の努力によつて得た現金が、十萬圓といふ額に達した。恰度五十歳になつた逸平は、その資産を自分と幾造とで四萬圓づつ均分し、甲府の實家に一萬圓、店員一同にも一萬圓を分配して、不公平のない處分をした。

その時、自身は隠居でもする氣であつたのか子供の無い逸平は、妻君のおはつ弟長治郎を養子として、民造と改名させた。

### 老年の大事業家

利益金十萬圓を、極めて公平に分配して、自分は四萬圓を持つて、老後を安樂に暮す氣であつたが、元來が活動せずにはゐられぬ性質の逸平は、相變らず生絲の貿易を營んでゐた。そして益々財を増し産を殖して來ると、故郷の交通事業を計畫した。

山また山に圍まれた甲斐一國は、交通機關には極めて恵まれてゐなかつた。富士川や桂川、釜無川の如きはなつても、激流のために舟楫の便はなく、道は險阻なる山坂に阻まれてゐる爲に、僅かに駕籠によつて運ばれるといふ有様であつた。

随つて文明に自然取り殘されて行かなければならなかつた。郷土に愛着を有する逸平が、開發のために意を注がうとするのは至當である。

まづ道中の難所とされてゐる笹子峠の開鑿は、第一の計畫であつた。それから甲武鐵道の建設といふ順序で、今日の中央線の前身甲武鐵道が小佛峠や笹子峠の大難工事に、巨額な工費を注ぎ込んで、鐵道を布設したのは、若尾逸平によつて企てられた力で、これだけでも、國家に盡した功勞は永久不朽のものであつた。

帝都の中央街に出來た交通機關の最初は、鐵道馬車であつた。無論人力車はその前からあつたが、兎に角一輛の車體に乘客二十餘名を満員として、二頭の馬に運ばれた時代、それが最も進歩した東京の乗物であつたのである。



鐵道馬車の創業は明治十五年六月だつたが、甚だ營業は振はなかつた。馬錢以上の交通機關がないのだから、便利重寶なことはこの上もないので、一般からも相應に歡迎を受けたものゝ、經營者その人を得なかつたのであらう會社の收支は常に缺損が續き、五十圓株は段々に下つて行き、遂に二十圓臺にまで暴落した。

この慘落する馬鐵の株を、懷手をして頻りに見てゐた逸平は、『この安いところで、一つ株を買ひ集めて置くかな、こんな時をばづしては、またと儲ける時はない』

と見込みを立てた逸平は、誰も手を控へてゐるのを、しきりに買ひ集めたので、持株は非常な多數を占め、會社に對する權力は彼れの掌中に握られるに至つた。

絶對權力が移ると、同郷の後輩佐竹作太郎をまづ重役に就かしめ、神戸舉一、安藤保太郎、武内繁之助など、選り抜きの人材を會社に推舉し、不振の業務に大刷新を加へしめたのである。逸平の見る目には狂ひはなかつた。さしにも思はしからぬ馬鐵の經營は、その人を得て初めて挽回の緒に就き、明治三十二年には、一躍資本金を百五十萬圓に増加し、新橋から品川に到る線を買収合併し、更に三十四年には馬車線の一部を電車に改め、東京電車鐵道と社名を改稱した。

### 火の出る如き電車競争

同じ甲州の産で、雨宮敬次郎は財界一方の雄であつた。何しろ明治九年に洋行までしたくらの人物で、實業界の先覺者である。

電車事業を早くも東京に計畫したのは、この雨宮敬次郎の方が、若尾よりも先であつた。明治二十三年頃に、米國から來た電氣鐵道の寫真を見て、有利な事業と確信したので、東京市街電鐵及び京濱電氣鐵道の認可を出願した。

それと同時に競争者が續出し、星亨一派と福澤一派とが、最も有力な競争者で、共に幕僚を従へて盛んに猛烈な奔走を開始したのである。しかし結局は三派が協議合同といふ事に決し、雨宮一派からは小野金六、立川勇次郎、岩田佐兵衛、福澤一派から、藤山雷太、手塚猛昌、岡本貞然、星派は利光鶴松、中野萬助、高木正太郎といふ、三人づつの創立委員を選んで、資金三百萬圓で市街鐵道が設立されるに至つた。

それよりやゝ遅れて、近藤廉平、岡田治衛武、川田鷹等によつて創業された外濠電車なるものが出來、東京の重要市街には經營を異にする電車が、縦横に走るやうになつたのである。當然起るのは三社の合併問題で、同じ株主の中でも、合併と非合併の兩派があつて、かなり烈しい



論議が繰り返へされた結果、明治三十九年に機運が熟して、三社は改めて合同といふ事になつた。そして千五百萬圓の資本に増資された。東京市街鐵道と社名も改稱し面目も全く一新した。それが尾崎市長時代になつて、いよく市が買収經營することに決し、現在東京の東西南北を、果てから果までに延長された市電の前身は、甲州系の若尾逸平や兩宮敬次郎等の成し遂げた、大きな事業である。

いよく東京市に買収されるやうになると、甲州出身の頭立つた實業家は、大抵電車會社には關係を持つてゐたので、五十圓拂込みの株は百圓に評價されたのだから、これによつて儲けた額の大きかつたのは、想像以上のものであつたらう。

最初會社の創立時代には、互ひの利害關係から、意見を異にして、さんぐくに唾み合つた事もあり、合併問題では、恐ろしい刺客沙汰にまでも及ぼうとして、株主總會に出席株主百二十五人に對し、一人づつの巡查が身邊を護衛するやうな醜惡な物凄い光景をまで演じた連中も、市から交附を受けた買収金を、仲よく分配して、頗る上機嫌で、

『お互ひに随分烈しい競争をしたものだつた』

握手をし乍ら、心から打解けて、凄愴な過去を物語つたさうだ。

電車は市營になつてから、萬事が改善されたし、新線がドン／＼延長されて、遂に今日の如き、四

通八達となつたのだが、帝都の交通機關を計畫した人々は、地形の關係上、交通には極めて恵まれる事の薄かつた山國を故郷とする、甲州出身の連中によつて、最初に計畫されたのも面白い一つの物語りである。

### 東電を買収

東電の社運が悲況に陥つた、明治二十四五年頃に、早くも目をつけたのは、若尾逸平であつた。

行燈からランプの時代の永かつた東京に、電氣燈が點ぜられたのは、明治十六年で資本金二十萬圓の會社事業で計畫されたのが始めであつた。創立發起人には原六郎、大倉喜八郎、三野村利助、矢野次郎などで、後になつて益田孝や喜谷市郎右衛門といふ人々も加はつてゐるが、甲州出身は一人も加はつてゐなかつた。

それが悲況に陥つてゐる電燈會社を、買収したらどうだらうと、若尾逸平が持ちかけた相談に、小野金六も根津嘉一郎も、忽ち賛成して株を買ひ集めるといふ事になつた。かうして二十九年には、大部分な株を手に入れてしまつた。

こんな工合で東電を手に入れると、権力は甲州系に移つて、佐竹作太郎を社長に据ゑるといふ風に、東電はこれによつてすっかり社運を挽回すると共に、懷を肥やしたことの大きかつたのも勿論で



ある。

そして社の營業狀態が、全く立て直るにつれて、日本の電力を統一併合しようと、大計畫を起しその小手調べとして、まづ關東地方の電力會社を併合し初めたのである。この理想は漸次に實現されて遂に資本金三億四千五百萬圓といふ途方もない、満鐵に次いでの大會社としてしまった。内地に於ける會社として、これだけの大資本金を有するものは、他にはないのである。三井岩崎と雖も經營會社の資本に、三億圓を超過するものはない。

この大きな會社を、勢力圏内に置いてゐるところに、團結力の強い甲州系の堅實味が現はれてゐるが、その他には桂川水力電氣、後に東京瓦斯に合併した千代田瓦斯といった工合に、燈火事業を殆ど獨占的に收めて今日に至つてゐる。

一體若尾逸平は若い時分から、負けず嫌ひは人一倍強かつた男で、横濱と甲府の間を生絲買出しに往復してゐた頃、八王子の宿屋に泊つた時、賭碁をやつてすっかり負けかけたことがあつた。

どうかして負けを取り返さうとして、夢中になればなる程、負けが重なつて流石の逸平もとうとう、兜を抜いで降參した。取られた錢も惜かつたのだらうが、負けたといふ事が如何にも残念で腹の蟲が承知しなかつた。

「今日は仕方がないから、私の負けにして置くが、四五日すると歸つて來るから、その時に改めても

一度勝負をしよう

「是非さういふことに、忘れずに歸りには寄つて貰ひませう待つてゐますよ」

皮肉に聞える言葉を後に、甲府に立つてしまつたが、仕入れの用事を片付けて、碁の師匠に高い教授料を拂つて一生懸命になつて腕を磨いた。僅かに三四日の稽古ではあつたが、一心は恐ろしいもので、今までよりは餘程強くなつて、八王子に約束通り立寄つて再び勝負を争つたが、今度はすっかり逸平の大勝となつて、見事に雪辱をしたといふ話が残つてゐる。

すべてが中途半端な事をしないで、徹底的に究めなければ満足の出來ない氣質であつた。碁は晩年まで好んだ道で、初段の腕前を有してゐたさうだ。

大隈侯の邸を訪ねて、老侯と盤を圍んでゐる時、石を持つたまゝ倒れて、昏睡狀態に陥つた際、電話をもつて急を告げられた、若尾幾造と小池國造などが駆けつけ、枕許に安否を氣遣つてゐると、醫師の手當が效を奏して、意識がやゝ恢復して來ると共に、

「兜町の景氣はどんな工合だ」

といつて周囲の人々を驚かした。假死に近い昏睡數時間をつゞけて、やうやく意識を恢復するや、直ぐに株式市場の景氣を問ふなどは、常人を卓越した利殖觀念の持主であつたことが知られる。

九十四年の長壽を保つまでに、波瀾曲折した經歷を有する彼は、山梨縣會議員に推されたり、甲



府市長にも就任したり、横濱正金銀行の取締役などにもなつてゐるが、貴族員の多額納税者として、  
 山梨縣から最初に選出したのは若尾逸平であつた。

天晴れ金六



養子の口

はつ子夫人との間に子供のなかつた若尾逸平は、年と共に後嗣の事を考へずにはゐられなかつた。する事なす事が、悉く計畫通りに進み、財産は増える一方で、この世に不足はない程の身分となると、實子のない事が一層堪へがたい淋しさを味はせた。粒々辛苦してこれだけに獨力で築き上げた富を、誰に譲つたものだらうと、財産が有り過ぎるための苦勞をしなければならなかつた。折角一代で作り上げたものだ、見ず知らすのどんな貧乏人でもいいから、自分の事業を繼承するだけの働きがある者ならば、養子に迎へて相續させたいと、しきりに養子の候補者を物色してゐた。が逸平が今日の財を作るまでには、並一通りの苦勞ではない。あらゆる苦しい經驗を味つてゐるのだから、容易な人物では氣に入らう筈がない。幾人ともなく話は持ち込まれたが、どれも眼鏡に叶ふ程の人物はなかつた。

「並大抵の者ぢや、若尾さんの氣に入るわけがない」

といつて身を入れて、養子の世話をする者はなかつた。

天潮の金六



逸平はだん／＼に取る年で、自分の達者なうちに、一日も早く後継者を定めて置かうと、ひそかに氣を揉んでゐるが、そんな風でこれならといふ話もなかつた。

『甲州だつて廣いんだから、誰か俺の後を嗣ぐ者がるさうなものだ』

かう思ふと一層もどかしくて堪らなかつた。とある時非常な非凡な青年の噂を耳にしたので、すっかり乗氣になつて、富豪に共通のうぬほれから、話をすれば一も二もなく、必度喜んで養子に来てくれるものだと、獨りで信じてしまつて、早速世間の噂をたしかめると、噂にもました働き者といふ事が判つたので、

『この男なら間違ひはない、俺の養子にして申し分のない男だ』

逸平ほどの男が、見ぬ先の噂ですつかり感心した青年といふのは外でもない、年こそ違ふが後年に至つて、事業の上で若尾逸平と肩を並べた甲州系の巨頭、小野金六その人であつた。

逸平は相當の人に頼んで、再三金六を養子に懇望した。甲州名代の富豪若尾家から、是非養子になつて欲しいと、しきりに望まれたのだから、大抵の青年なら欣喜して迎へられたらうが、流石は將來に名を擧げる人物である。しかも答へは極めて明瞭に、

『私のやうな者を、わざ／＼それ程までに言つて下さる事は、暝加の至りだとは存じますが、私は他家を繼ぐのは御免を蒙ります。どこまでも小野金六は、一本立ちで世の中に出たい考へですから、

どうか悪しからず思つていただきます』

とキツバリと縁談を断つてしまつた。

折角見込んだ青年に、しかも必度承知をしてくれるものだと、すつかり勝手にきめてゐた小野金六から、思ひもかけない不承知だといふ、案外な答へを聞いて、猶更惜しい氣がしたが、しかし断られた以上、思ひ切るより仕方がなく、重ねて養子の話はしなかつた。

逸平に見込まれた小野金六は、子供の頃から群童を擡んでた秀才であつた事は、十二三歳で既に家業としてゐた酒屋の取引などは、一ぱし間違なくやつて退けたとさへ言はれてゐたくらゐだ。其れ程の子供が成長して、平凡な筈はない。

青年時代には、早くも甲州の爲に二つの偉大な功績を残したのは、小野金六翁が一代を通じて特筆すべき事柄で、山梨縣民が今日に至るまで其の恩恵を蒙りつゝあるのである。

それは隣國の信濃から桑苗を移植した事業で、甲州の蠶絲業が今日の如く、素晴らしい發展をしたのは、實に彼れの力に俟つものが多いのと、も一つは明治の初めに、甲州に鹽の飢饉が起つた。元來鹽には昔から苦しめられてゐる國で、甲越互ひに兵を交へて、久しく鎬を削り雌雄を決しつゝあつた信立と謙信の争ひ當時にも、鹽では苦しい經驗をした事が、歴史にまで傳はつてゐる位で、海を持たぬ國の不自由さを、戰國時代から味はつてゐるのだ。明治初年に再び鹽飢饉に見舞はれた時には、二



十歳の一青年小野金六によつて、苦しい目にも逢はずに濟んだ。その時金六は單身遠く鹽の本場である、播州赤穂にまで出掛けて行き、問屋に交渉して、一時急場を救へるだけを、駿河の清水港に回漕して、甲州に運んだ。

これだけの勇氣と英斷とが、二十歳の一青年にあつたのだから、若尾逸平が養子に迎へようと懇望した筈である。

『鹽の事では昔は上杉謙信に世話になつたが、小野金六さんも鹽の恩人だ。えらくなる人は、やつぱり眞似の出来ない事をしてゐる』

桑苗の移植と共に、鹽飢饉を救つた功績は、永く甲州人が徳として忘れられぬ大きな事業である。

この二つの仕事を成し遂げた青年小野金六の名は、甲州一圓に隠れなきまでに高く、到るところで非凡な手腕を稱賛せぬものはなかつた。

『金六さんはまだ二十そこく、ださうだが、天晴れな人だ。今に甲州を背負つて立つ程のえらい人物になるだらう。』

將來の成功疑ひなしと、縣民のすべてから折紙をつけられた事は、金六を一層努力發奮せしめた無形の鞭撻であつたであらう。

間もなく甲府の酒造組合の取締役に推されて、仕事もしたが、名聲も日に／＼高まつて行つた。若尾逸平から養子にと懇望されたのは、その時分のことである。

### 希望を抱いて上京

富豪若尾逸平から養子の口をかけられて、キツバリと斷つた金六が、どうしても狭い甲州にゐたのでは、思ふやうな事業が出来ない。目ざましい仕事をするのは、東京に出るより外にないと、堅い志を抱いて山の中を出たのが、明治六年であつた。

江戸から東京と名稱が變つて間もない頃、幕府の政治は明治政府に移つて、今や首都としての名實共に建設途上にある東京は、非常に多忙な時代であつた。一技一能を有する人材を、各方面から求めてゐた際だつたので、甲州から出て来たばかりの小野金六は、東京府の土木技手になつて、道普請の監督を命ぜられて、神妙に勤めてゐたが、畢竟府の一小吏として過す器ではなかつたので、如何にも仕事に興味がなかつた。

『故郷を出て来たのは、役人にならうといふ志願ではなかつた。こんな仕事をしてゐたつて、容易な事ぢや出世は出来ない、一層腕一つで自由に金を儲け、名を挙げられる實業の方で働いた方がよささうだ』さういふ考へが起ると、間もなく土木技手を辭職して、小野組に入つた。

小野組は金六と姓は同じであるが、別に親戚の關係があるわけではなく、三井組と並稱された程の



當時財界屈指の富豪小野善助、小野善右衛門などが經營する貿易や爲替などを取扱つてゐた一つの商店で、古河市兵衛はこの貿易の支配人をしてゐた。その小野組に入つた翌年、即ち明治七年十一月には、不幸にも破綻してしまつたのは、小野金六には間の悪いことであつた。

この小野組の没落は、經濟界にも打撃を與へたことはいふまでもなく、殊に一番驚いたのは、創立後間のない第一國立銀行である。元來小野組は恐ろしく進取的で、華々しく營業を續けてゐる關係上、かなり無理な仕事をしてゐたので、自然資金も不足する事が多く、第一國立銀行には百二十萬圓の融通を受けてゐた。

貸金の回收が不能になつては、折角創業した銀行の土臺が氣遣はれるといふ非常な不安な立場にあつた。頭取の澁澤榮一氏は、どうかしてこの危急存亡の難關を切抜けようと、小野組の爲替部を司つてゐた小野善右衛門、貿易部の總支配人古河市兵衛と、善後策を折衝した。この時の古河市兵衛の態度は、流石に男らしい見上げたものであつた。

『決して銀行の方にまで、御迷惑はかけないやうにします』

といつて在庫品の全部を潔く提供した上、銀行創立當時の百萬圓の出資をもつて、解決をしたのである。これが爲に第一國立銀行の缺損は漸く二三萬の小額で決済されたが、かうした誠意を披露して飽迄も責任を果した古河の處置は、耻を耻とも思はぬやうな現今の、或る一部の富豪の心事に比べて

實に格段の相違がある。

そんな工合で小野組は、解散の運命となつて、金六は浪人となつた。郷里にゐれば酒造組合の取締でゐられる身が、呉服物の行商までして生活をしなければならなかつた。しかしそれは僅かの間で、程なく深川の廻米問屋に入つて、米倉主任になつた。こゝにゐる間に起つた十年の西南戦争には、世人を驚かす程、大きく米の買占めをやつた度胸には、當時日の出の如き勢をもつて財界に乘出し、盛名を馳せてゐた岩崎彌太郎をして舌を捲かせ、

『將來立派な者になる男だ』と驚嘆せしめたのは有名な話である。

その買占めではかなりな儲けを得た上に、小野金六の名は漸く世に認められるに至り、甲府に本店を有する第十銀行の東京支店長に迎へられた。やがて支配人になるに及んで、經營上の手腕は益々冴え、半期毎に營業の成績が擧がつて行くやうになつたので、頭取の佐竹作太郎や株主總代の若尾民造等が發起人となつて、記念品などを贈つて表彰をした程の功勞があつた。

小野金六はかうして、一本立ちの實業家たるべく、一步一步世の中に踏み出して行つたのである。

### 石油事業の開拓者

越後の石油探掘事業は、小野金六が発見したのではないが、會社を組織したのは彼れの創設になる



ものである。

越後七不思議の一つに數へられてゐる臭水、火を消すべき水が燃える奇蹟に驚嘆して、これを不思議とするに何んの躊躇があらう、物の理を究めることの至らなかつた時代に、痛くにまかせて氣味悪がつて、誰も手をつけようとする者のなかつたのを、明治初年になつて山岡鐵舟なぞが、これを有利な事業と見て汲み出しに着手したもの、最初から技師に外人を招聘して、極めて大仕掛けな、經費をかけたので、費用倒れとなつて失敗に終つた。しかし事業は誰の眼にも有望に映つたので、小島謙三といふ人が更らにその事業を繼承して、汲み上げて燈火用として精製を試みた。

たしかに見込みのあることだと見て、小野金六が小島の仕事に應援をし、日本石油會社を創立したのであつた。この利益は決して少ないものではなく、株主配當も一割五分ぐらゐるから次第に増額されて行き、四割五割にまでも及んだのだから、會社の得た儲は推して知る事が出来よう。

こんな有利な事業を、小野金六一人のみの占有にさせて置く筈がなく、後年石油王とまで言はれた内藤久寛等によつて、別に石油會社が起され、大に兩社が商戰の鎗を削つたが、不幸な事には小野經營の會社は、二回も火事に遭つて、復興資金難に陥り、直に解散を餘義なくさせられたけれど、彼れの石油に對する開拓の功は、決して没する事は出来ない。

彼れは古くからあるものに手を着けるよりは、むしろ新しい事業に意を注いだ。これが小野金六の特長といひ得るだらう。現在の新聞社や大印刷工場で、使用してゐる輪轉機の製造會社を起したのも彼れである。

無論輪轉機は、早くから歐米各國には、それ／＼研究を異にしたものが、製造されてゐたけれども日本内地ではこれを製造する會社は無かつた。つまり日本の輪轉機製造は、小野金六によつて先鞭をつけられたわけである。この會社は相當の利益を擧げて後に、他に讓渡してゐるが、かうした新しい事業に着眼する先見は、實業界でも異數に屬してゐる。

輪轉機に最も縁の深いのは印刷紙で、當時の印刷用紙といへば大部分が、外國の輸入であつた。それを防壓する目的の下に、同志の間を奔走して、安田善次郎、山本達雄、森村市左衛門といふ大頭の後援を得て、明治二十一年に富士製紙會社を設立した。王子製紙は古くからの歴史を持つて、市井に其の名を廣く知られてゐるのと相對して、業務の擴張を計り資本金を増加して行き、遂に今日ではわが國製紙界の二大會社とまで認められ、新聞の巻取紙の如きは、多く富士製紙の製造に成つた物を用ひられてゐる程だ。それだけでも大きな一つの國家的の事業である。

### 其の他の諸事業

小野金六一代のうちで、失敗に屬すべきものが一つある。それは明治二十二年南米ペリユーの銀山



發掘事業だつた。まだ誰も手をつけてゐない銀礦だといふので、すつかり乘氣になつてしまひ、富士製紙を創立した餘勢をもつて、直ぐにも發掘權を獲得すべく、その頃はまだ餘り用ひられてゐなかつた高橋是清氏に、わざ／＼南米まで實地踏査を託したが、實際は豫期に反したものであつた爲、調査費のかけ損となつた事があつた。一杯喰はされた形で、虻蜂取らずになつたが、その費用は問題とする程の高ではないから、そのまゝになつてしまつた。

越後で石油を汲み出したやうな、うまい儲けは見られなかつたのは、定めて彼れの氣質として遺憾な事であらう。

それ以外には日清戰役後に、新領土の臺灣に縱貫鐵道を計畫したり、朝鮮の釜山新義州間に京釜鐵道を布設したのも、彼れの力は與つて大きなものであつた。

桂川水電を經營し、若尾逸平、兩宮敬次郎等と協力して、日本電燈を起した事なども、各地に於ける水力發電事業の刺戟となり、その開拓上に非常な功績を擧げたものであつた。後にこの日本電燈も東京電燈と合併したが、創業當時は兩社が對抗して、激甚な電燈戰で需用者の爭奪も續けたものである。

甲州出身の實業家として、彼れの遺した事業の大なるものは、十指に餘る程あつたが、合併或は解散したものもあるけれど、若尾系に對する小野系は、押しも押されもせず、郷黨を代表する二つの勢力として、互ひに重きをなしてゐる。

## 鏢 競 出 世 二 人 男



同伴二人

わが紡績界に於ける二巨人、それは鐘ヶ淵紡績會社の武藤山治と、富士瓦斯紡績會社の和田豊治をもつて、二代表に擧げること、何人も否定せぬであらう。

武藤氏は兵庫縣選出代議士で、實業同志會々長の位置にあつて、盛んに活動を續けてゐるが、和田氏は大正十三年陽春四月、六十四歳を一期として、幾多の功績を残して貴族院議員、帝都復興審議會委員の現職のまゝ病をもつて逝去したのは、實業界のためには惜しみても餘りある事であつた。

この二人は慶應義塾の出身で、明治十八年卒業と共に相携へて米國に渡り、桑港で互ひに苦學をした莫逆刎頸の親身も及ばぬ友達である。滯米三年武藤は二十一年に一足先に歸朝し、和田は遅れて二十三年に歸つて來た。

そして歸國と共に、同じく鐘ヶ淵紡績會社の社員となつたが、互ひにアメリカ歸りの新知識で、負けず劣らずの明敏な頭腦と、鮮かな手腕を縦横に振ふに至つたといふ同じ運命を踏んだのも、奇しき身の上であつた。



さう言ふと如何にも、無雑作にスラ／＼と置位を得たやうに思はれるが、決してさうではない。武藤氏は三年間のアメリカ仕込みの新知識を修めて、歸朝はしたものの、さて直ぐに就職する適當なところがなかつたため銚子の醤油王濱口吉兵衛（吉右衛門氏の先代）のために働いたり、新聞廣告取次業を開業した。現在とは違つて、明治二十年頃には日刊新聞の数は甚だ少なかつた。その上今日のやうに廣告利用の宣傳は、競争的ではなかつたから、かういふ仲介業は全く無かつたのであつた。それをアメリカ歸りの彼れは、早くもこの新事業に着眼し、廣告社を創立したのは流石に武藤である。しかし何分にも新聞の数は至つて少ないので、思つた程の利益は擧げられなかつたのは、時代で仕方がないが、今日の新聞廣告取次の元祖は、武藤山治氏であつたのである。

その後は英字新聞ジャパン・ガゼットの翻譯を擔任し、イリス商會の翻譯係りを勤めたりして、別段に芳しい事もなく日を暮してゐたのを、故人になつた中上川彦次郎が武藤の才を認め、その推薦で初めて三井銀行に入るやうになつたのが、武藤山治の成功の第一歩であつた。そして更に鐘ヶ淵紡績の神戸支店長に一躍出世をしたのは二十六年のことであつた。

和田豊治は武藤より遅れて歸朝したのが、明治二十三年であるから、滯米年限も倍以上で、それだけさま／＼な研究を餘計究めたことは言ふまでもない。歸朝と共に日本郵船の神戸支店に月給三十圓の社員で入社した。

三十圓の初任級は當時では、かなりな高給で、六年間滯米の洋行歸りを迎へる待遇として、相當なものであつた。しかし支店長と意見が合はず、僅かに一年ばかりで、借し氣もなく辭表を出して退社してしまつた。

秀才を廣く求めてゐた中上川彦次郎は、この話を聞くと直ぐに和田を三井銀行に招いたが、銀行事業に力を注がせるより、武藤と同じく紡績に腕を振はせるのが適任と見たのであらう。鐘紡に轉勤せしめた。

其の頃の鐘紡は、事業も甚だ不振で、經營も思はしくなかつたのである。株は暴落する一方で、このまゝに放置してゐては、どういふ結果を見るかは、甚だ不安なものであつた。當時の社長北岡文平を朝吹英二に替へた上、銳意社務の刷新を計り、武藤山治、和田豊治の新知識の二俊才をして、朝吹社長の下に實務を執らせることにした。

同窓に學び、同じく相携へて渡米し、異郷に苦學を共にしたこの二人が、やがて幾年振りかの後に、等しく鐘紡に卓を並べておの／＼その才を競ふことは、全く同一軌道を相並んで進むのだから、互ひに全力を盡して、成績を擧げる事に努めた。

中上川といふ人の、人材登用にはかうした抜かりのないものがあつた。



二秀才の暗闘

一方に才智が劣つてゐる場合には、暗闘とか軋轢とかは大抵起らずに済むものだが、實力も知識も伯仲にある時、それが同じ仕事で同じ権力を附與されれば、一種の競争的の功名に驅られることは、餘儀ない次第である。

武藤氏と和田氏とは、同一の道を相携へて踏んで来た間ではあつたが、其の性格は必らずしも同じではなかつた。和田は奔放で細事には餘りコダはらぬ方だつたが、武藤はそれとは全く反對で、何事も眞面目を一方とする確實性を多く持つてゐた。

この性格の現はれば、互ひに實業界の大立物となつてからも和田氏は極めて派手に、さまざまな會社に名を連ねて、關係をしてゐるに對し、武藤氏は終始一貫して鐘ヶ淵紡績會社の經營に努力を續け、決して他を顧みずに經て来た事によつても、明瞭に證據立られる。

中上川が性格の相反する新進を、鐘紡に送り込んだのは、たしかに不振萎靡の會社を挽回するに、大なる力となつた。果して見込みの如く、實績は豫期した以上に、メキ／＼として擧げられて、その功勞による二人は、共に支配人となつた。そして和田は本社に、武藤は兵庫支店長兼務と榮進して、神戸に赴任したのであつた。

委託された重任を帯び、兵庫支店長となつて、抱負と計畫とを胸中に收めて乗り込んだ武藤は、自己の最善と信ずる經營方針をもつて、自由に切つて廻した。

まづ工場設備を新らしくし、機械の如きも新式な優秀なものを輸入して、盛んに生産能率を擧げたので、従前の成績に比して格段の相違を示すに至つた點は、むしろ和田の統制する本社を凌駕する感があつたくらゐだつた。

『武藤もなか／＼、一生懸命にやつてゐる。まるで營業の工合が一變した』

和田も武藤の働きの目ざましさに驚き嘆稱してゐるが、それだけ支店に比べて、本社の方は俄かに成績が見えなかつた。

武藤の赴任した年の半期決算期に、和田との間に報告の互送から、議論が戦はされたことがあつた。

それは支店から本社に、決算報告書を送達するのは、何處でも當然な仕事で、武藤もそれを拒むのではなかつたが、本店の決算書も見度いから送つてくれと、和田支配人に申送つた。別に正式に言つたわけではなかつたから、本來友人同志の懇意な間柄で、こんな事は何んでもない筈だが、

『本社から先に支店の方に、決算書を送るなんて、馬鹿氣た話が聞けるものか、そんなことは御免蒙る』



和田は眞面目になつて、一議に及ばず要求を拒絶した。性格の相反してゐる結果、こんな事が互ひの感情を傷けたのであらう。それ以來は兎角に何彼につけて、意見の衝突が繰り返されるに至つたのである。

これには重役連中も、非常に困つたらうが、取り分けて二人を推薦した中上川彦次郎は、しきりに心配をして、仲裁にも立つたけれど、遂に兩者の性質は氷炭の如く、永久に相容れざるものあるを悟つたものゝ、鐘紡には共に無くてはならぬ功勞者で、何れを退けることの出来ない二人である。

そこで一策として、綿業視察といふ用務を命じ、和田を歐米各國に出張せしめるに至つた。和田も會社の苦肉の魂膽を察し、命ぜられるまゝに暢氣な氣分で、海外旅行の途に上つて、悠々と名勝や古蹟を巡歴して歸朝したが、視察報告書を提出すると、間もなく、鐘紡を辭職してしまつたのであつた。

無論中上川あたりが、和田の實力を惜しんで、極力辭意を翻へさせようと、熱心に勸告はしたけれど、恩人の厚意を感謝しながら、遂に辭職の意志は固く、そのまゝ縁を絶つに至つた胸中の悶々たる情は察するに難くない。

出世の競争

恩人の中上川次彦郎に反いて、鐘紡本社支配人の要職を抛つたのだから、和田の不平不満は大きなものだつたに相違ない。しかし浪人となつて見ると、急に身邊の淋しさは心細いまでに沁みて來る。向島の邸宅に閉ぢ籠つて、徐ろに今後の事業を考へてゐるところに、和田の前に投げ出されたのは、富士瓦斯紡績會社の挽回であつた。

森村市左衛門、濱口吉兵衛、日比谷平右衛門等の大實業家を始め、知名の富豪によつて創業された富士紡績は、營業が甚だ不振で持て餘されてゐた。誰かこれを整理振興する適任者をと、重役や大株主の間に焦眉の問題として、議せられてゐた際に、鐘紡の和田豊治が同社と手を切つたといふことは、富士紡關係者に取つては、聞きのがす事の出来ない吉報であつた。

鐘紡で振つた明快な和田の手腕を傳へ聞いてゐる、富士瓦斯紡の重役連は、早速和田を引出す事に決議一決し、交渉を試みたのである。

和田にして見れば、紡績事業には充分に自信があることだし、この折角の好機を逸してはといふ考へもあつたばかりではなく、自分の去つた後の武藤の評判は、いよゝゝ鐘紡に於ける上下の信望を、一身に擔つてゐる有様であつたので、それに對抗すべく、一種の抗争的の興味にそゝられて奮起の決心を固めたのである。

和田は不振續きの經營を建て直すべく、まづ會社の調査にかゝつて見ると、實に意に滿たぬ點が多



かつたので、自身が率先して範を示さなければ、到底衆を和することの不可能であることを知つた彼等は、明治三十四年一月、大改革を執行すべく悲壯な覺悟を抱いて、駿河小山の工場に赴任したのであつた。

重役といふ特権階級は大抵一室にドツカリと納まりかへつて、遅く出て来て早く歸り、下役の調べた書類に官判を捺して、莫大な俸給を貪り多額な配當を懐に入れるのだが、和田は機械油にまみれた職工の間に立入つては手足や着衣を汚損しながら手入れをした事もあり、仕入部の倉庫内ではこりにまみれるのを厭はず、原綿の選擇や混綿の吟味をするといった風で、技術方面の直接監督と共に、多數の事務員を一室に卓子を並べさせて、執務振りを注意し、帳簿の査閲も一々嚴密に検査したのだから、社員や職工達は堪らなかつた。

今までは規律通りに仕事をしなくても、大して眼につかなかつたのが、新任の重役和田豊治が直接に工場の方まで、経験の豊かな知識をもつて監督するのだから、定められた規律は守らねばならぬ。急激なこの改革に對する不平と不満の聲が、職工と社員との間に唱へられ、やがては和田排斥の猛烈な運動となつて現はれたのである。

當時の社長富田鐵之助でさへ、和田の前では一目を置くといふ有様だつたから、その直屬派は、非常な反感をもつて、機會があればと待つてゐた。

そんな風で彼が着任と共に斷行した疾風の改革は、全く何等私慾のない、たゞ托された責任を果すべく努力したにも拘らず、身邊は四面ことごとく怨嗟の聲をもつて包まれ、或時は凄い字句を連ねた脅迫狀が手許に届けられ、或時は直接行動の擧に出て、詰問に押しかけた者もあつた。

『一時を忍べば、君達も忍び甲斐のあることが解るのだ。私の改革は會社を今よりも一層發展させたいからで、會社の利益が多ければ、結局こゝに働いてゐる者でも、それだけの事はある。一年間辛抱して私の方針に従つて、仕事をして貰ひたい。必らずそれだけの効果を擧げる事が出来る』  
勢込んで面談した連中も、隔意のない應接振り、理否を明らかにした懇談的態度を示されて、力抜けがすると共に、段々に會社に盡す誠心誠意の心持ちが、諒解されて來た。

職工も社員も漸く和田に心服するやうになり、命ぜられるまゝ與へられた仕事に、全能力を發揮して働くやうになつたので、頽廢弛緩してゐた社運は、忽ち挽回し、最初の口約束の如く、一年後の成績は前期までの損失を償つた上、六朱の配當をなし得るに至つたのであつた。

『成程、流石に和田さんだ、嘘は言はない。ちやんと見積り通りになつたぜ』  
と全員が感心した。それ以來和田の名聲は、富士瓦斯紡を風靡するの觀があつた。  
心から服してゐる職工や社員を、自己の手足を動かす如く、意のままに働かせるやうになつたのだから、事業は益々順調に發展して行くばかりで、一時は株主の間に持て餘されてゐる程、不振續きの



富士紡が、和田が整理に當つて幾ばくもなく、關東に覇を唱へた鐘紡に對して、肩を並べる程の大會社となつたのである。

武藤山治と和田豊治、兩雄はこゝに各大紡績會社を擁して、互ひに同じ事業の上に於て、激甚な競争を續けつゝ、常に伯仲の成績を擧げて、紡績界の覇を争つた事は、斯業の發展上どれ程の効果があつたか知れない。

武藤は功成り名遂げ、實業界に確固たる地位を占むるに至つても、飽迄鐘紡に本據を構へてゐたが、和田は富士紡に成功した後は、世間的に華々しい活動を續け、大正二年桂内閣の時、興業銀行總裁に擬せられたり、大正六年には大橋新太郎氏その他と共に、日本工業俱樂部を設立したり、絶え間なく社會の表面に現はれて活動場裡に奔走した。そして或は臨時財務經濟調査會委員に任命され、官私兩方面に盡した功勞により、政府は大正十一年勅選上院議員に推薦したのである。そして關東震災の後、親任待遇の帝都復興審議會委員を仰付られたが、武藤氏はその間に在つて、一人一會社主義の實業家としての本分を、堅く守り續けてゐたのであつた。

彼れを主腦として戴く鐘紡は、いよゝ／＼目ざましい發展を見、財界の好況に伴つて、實に最高七割の配當を行つたのは、如何にその利益の素晴しいものであつたかを物語るものである。大正十三年の總選舉に、立候補の名乗りをあげ代議士に選出されたのは、和田が親任待遇の復興審

議會委員を仰付られた年であつた。そして少數ながら、同じ意見を抱く議員と共に、實業同志會を組織して、政界の革新を力説して健闘してゐる意氣は壯とすべきである。

武藤が好敵手として常に目標としてゐた和田豊治が、六十四歳の春、大正十三年病歿してしまつたのは、わが實業界の損失は頗る大なるものであると共に、當の武藤に取つても、限りなき哀惜を覺えると共に、寂寞の情に堪へなかつたであらう。

### 兩者を引立つた中上川

武藤和田を實業界に推薦して、今日の大になさしめたのは三井の中上川彦次郎其の人であつた。中上川は慶應を出て倫敦に留學中、井上薫侯に知られ、歸朝の後には外務省に入り、公信局長を勤めたが、明治十四年に外務卿の大隈重信が官を辭すると共に官を罷めて野に下り、實業界に入つたのである。そして明治二十四年に、井上侯の推薦で三井合名會社の理事に就任し、銀行部の擔當をする事になつた。

巨富の隨一として岩崎と並び稱される三井も、その當時の銀行は資本金も僅か二百萬圓で、餘り成績も擧がらなかつたものである。それを中上川が理事として任に就くや、銳意整理に努める一方、和田豊治、武藤山治、藤原銀次郎、波多野承五郎、藤山雷太、池田成彬、平賀敏などの、慶應義塾出身の秀才を引き入れた。これ等の人々は、何れも後年わが實業界に重きをなしたのであるから、青年時



代の其の當時に在つても、既にその頭腦と手腕とは、衆を擡んでゐるには相違なかつたが、かなりに重用したものであつた。

年少氣鋭の敏腕家をして、適材適所に置いて銀行の成績を擧げる一方、工業部を新しく設置した。それは、名古屋、富岡（群馬）前橋、三重の各地にある製絲場と、鐘紡の經營をするのが目的であつた。工業部創設と共に、和田、武藤の兩氏は、その方に轉勤となつて、前述の如く和田は東京に、武藤は神戸と東西に別れて互ひに、競争的に事業の成績に努め、遂には兩雄並び立たず、和田は決然鐘紡を退くに至つたのである。

そして米國外遊中に、日比谷平左衛門とめぐり合つたのが縁となり、鐘紡を退くと共に富士瓦斯紡績に入つて、弛緩した業務を振興し、堅固な基礎を築き上げ、兩者は互ひにその本據に在つて、事業の發展を競ひ乍ら目覺しい活動を續けて來たのである。

だから中上川彦次郎の引立てによつて、今日實業界に名を成した人々は、數へれば非常に多い。勿論その人々は、他に寄らずとも立派に成功をなし得らるゝ人材揃ひには相違ないが、明晰なる頭腦の持主も用ひられずして、その才を發揮することは難い。適材を適所に用ひて、その各々の技能を働かせるべくその人を選んで用ひた中上川氏も、たしかに人を見る明を誤らなかつたのである。三井銀行が今日の如き基礎を築いた裏面に、故中上川彦次郎氏の盡した努力の大きい事を見逃す事は出来ない。

# 天下の雨敬



## 雨宮敬次郎

雨宮敬次郎は若尾逸平、小野金六と共に、甲州系財閥の三代表である事は、世間が一致して認めてゐる名物男の一人。

大きな仕事をする男で、人の意表に出る事をやりたがる男である。彼れの晩年、麴町の本邸の庭園内に、往來から仰ぎ得られるやうな富士山の模型を築造して、一時は非常な評判を高からしめた事は有名な話である。

二十五の時に志を立て、甲府から横濱に出て来たのは、先輩の若尾逸平が、横濱で芽を吹き土臺を築いた話に刺戟されたのであつた。開港場の横濱を目ざして、何か一商賣を試み、大きい儲けありつかうと考へて、各地から集まつて来た連中は澤山あつた。そして立派に成功した者があり、殊に雨宮には同郷の若尾が生きた手本を示してゐるので、何んでも商賣をするなら横濱に限ると思つたのだらう。蠶卵紙の賣買に目をつけたが、これは忽ちの間に見事に失敗をしてしまつた。

餘りに呆氣ない失敗に、自分ながら馬鹿々々しい感に打たれたらうが、もともと無けなしの資本を



投じて始めたので、再舉を計ることが出来なかつた。しかし後には天下の雨敬といはれる人物だ。最初の失敗を當然の事とでも思つたのだらう。人事のやうに平氣でゐた。

だがこの蠶卵紙は餘程、望みをかけてゐたものと見えて、遙々外國にまで賣り込みに出かけたものだが、やはり見込みは全く外れて、這々の體で歸國した話がある。

横濱に出て来てまづ失敗をした彼は、その當座は資金の關係で再舉の望みもなく、腕を撫でて脾肉の嘆を啣つてゐるうちに、多少の金を調達する事が出来て、一攫千金の手取り早い相場に手を出した。まだるい商賣の取引によつて、僅かづつの利益を樂しんでゐる餘裕のなかつた彼は、運賦天賦の度胸を定めてやつた相場が、大當りに當つて、忽ち數千圓の現金が懐に入つて來た。

「成程こんな金儲けは、他にや見當らない。運さへよけりや、何萬兩だつて他愛もなく擱めるんだ」すつかり得意になつたが、思ひがけない大金が手に入ると、その當時は、外國へ行かうなどといふやうな考へは、多くの人が持つてゐなかつたに拘らず、洋行をして商賣がてらに知らぬ異國を見物して來ようと考へを起したのは、流石に凡人ではない。

兎も角も明治九年といへば、横濱に住つてゐればこそ、日常外人の姿を見る事が出来るが、それでさへ物珍らし氣に眺める時代であつた。そんな時世だといふのに、外國に乗り出さうと思ひ立つた勇氣に對して、周圍の者は奇異の眼を瞠つた。

無論語學は知らないのに、目的とするのは、蠶卵紙の賣込みといふのだから、かなり無茶な計畫に違ひなかつた。行けばどうにかなると、極めて暢氣な考へで、まづ最初に米國に上陸した後、伊太利や佛蘭西まで經めぐつたが、何處へ行つたつて、言葉の通じない不自由さを忍びながら、啞同様に手眞似で蠶卵紙の賣り込みを交渉したけれども、もとより見込み通りにうまい汁の吸へよう筈はなく、所持金は日に日に乏しくなるばかりであつた。

流石に度胸のいゝ雨敬も、異國の空で何より頼みとする金が減じて行くのだから、これ以上の心細い事はなかつた。それが爲に據なく、歸朝を急ぐ事となつてしまつたのは、折角はるゝ海を越えて出て行つた彼に取つては遺憾やる瀬ないことであつたらう。横濱に戻つて來た時などは、姿こそ見ちがへる如くに、ハイカラになつてはゐるが、懐には殆ど一文もなかつたのである。

「雨宮さんは何しろ洋行歸りだから、大したものさ」

洋行歸りといふ肩書が、恐ろしく箔をつけて、非常に評判を高からしめたのであつた。

しかし留守をしてゐた細君は、下宿屋をして辛くも生活を支へてゐるが、その苦勞は一通りのものではなく、雨宮夫人であればこそ、一年に近い良人の洋行中を、どうにかして繰り廻してゐたのであつた。

良人が横濱に歸る時は、必らず大儲けをして、意氣揚々として上陸する事を信じ切つて苦しい世帯



を營んでゐたのに、全く豫期に反した結果となつたのだから、定めし内心は失望したであらうが、一向氣色にも見せず。

「知らない外國のいろ／＼の事を、見たり聞いたりしたと思へば、それだけでも安いものですよ、今直ぐにどうにもならなくつても、必度役に立つ時があるでせう」

失意の良人を勵まし慰めてゐた位だ。

「それには違ひないが、さう氣を長くしてもゐられないから、何か商賣に有りつかなくつちや仕様が

ない」

としきりに考へたが、空手で取り付けるといふ重寶な商賣は見當らなかつた。

洋行歸りを信用にして、銀行を説きつけ四百圓の金を借出したのを資本に、いよ／＼何かの事業を營むべく、最も適したことをしきりに考へ初めた。今まで失敗を重ねた結果、自然と貧乏を苦にせず、に過して來たが、折角借り出した四百圓の資本を、こゝで失敗して玉なしにしたのではと思ふと、いくら太つ腹の男でも多少臆病になつた。何か確實で有利な事業をと、あれこれと計畫してゐるうちに、恰も同郷の小野金六が、越後中蒲原郡金澤村で、石油の採取を企て、その事業が好成績を擧げてゐる時だつた。

抜目のない雨宮敬次郎は、何條これを見遣して人の儲ける話に、指を咬へて見てゐられよう。そこ

で思ひついたのは、石油の仲買であつた。四百圓の資本を投げ出して、乾坤一擲の運試しをやつたのが、芽を吹く最初であつた。

この事業はすつかり運に叶つて、忽ちの間に非常な利益を見る事が出來たのである。雨敬の實業界に乗り出した第一歩は、決して最初から、大仕事によつて一足飛びに名を成し産を作つたのではない。一つの事業に取り付くまでには、七轉び八起きの境涯を繰返して、一通りならぬ苦勞を味つてゐるので、なかく容易なものではないのである。

### 未決監中の大計畫

運が向つて來れば、何をやつても必らずうまく行くものだが、誰にも一度は運のいゝ時代があるのを、しつかりその機會を掴まないから、畢竟幸運を取り逃がしてしまふのだ。

雨宮敬次郎の如きは、その運をしつかり握つて、仕事を始めたから、トン／＼拍子に、する事なす事が好結果を見たのであつた。石油仲買で豫期以上の利益を擧げた彼は、時機を逸せず東京府下の小名木川に製粉工場を創立した。これがまた頗る都合よく成績を収めた爲に、すつかり事業熱に浮かされて、それからそれへと種々の計畫に手を擴げて行つた。

そして彼れは歐米の各地を視察して來たゞけあつて、まだ餘り世間の人の注目してゐない仕事に手



をつけた。北海道や甲州地方の砂金採取などは、其の當時としては見る人によつて、如何にもアテにならぬ事業だつたのである。

製鐵會社を起した際、鐵管事件と稱する疑獄の渦中人物として、幾人かの連中と共に、裁判所の取調を受け、贈賄の嫌疑で未決監に拘禁された事があつた。豫審に廻つてから證據不充分のために、免訴となつて青天白日の身となつて出て來たが、嫌疑の晴れるまで陰慘な未決の獨房に置かれながら、心靜かに平素からの主張であり持論である鐵道の統一、即ち國有經營の計畫を樹て、疑ひの晴れる日を待つてゐた。

いよ／＼豫審免訴で、長い拘禁から許されて出て來ると共に、獄中で案を樹てた運動は、板垣退助等の賛成を得て、上野精養軒で演説會を開き、天下に向つて鐵道國有策の急務であることを大に説いて、輿論の喚起を企てたのである。

この主張は賛否兩論に分れて、さう無雜作に決すべき問題ではなかつた。政府が全國主要幹線の各鐵道を買収するには、莫大な費用を要する。この資源を捻出する方法を、まづ第一に講ぜねばならぬし、國有官營としての曉、營業に對する研究も必要であつた。その上、三井や岩崎の如き大富豪の投資としては、鐵道が唯一といつていゝくらゐの事業だつたので、これを國有にしては、適當な放資事業が無いといふ反對論が、かなり有力なものであつた。しかし議會の問題として提案されたけれど、

中野武營が眞向から時期尚早の反對演説を唱へ、それに附隨する幾多の連中が結束して、通過は覺束なかつたので、提案はそのまゝ引つ込められてしまつた。

けれども雨宮は極力、國有を主張して奔走してゐると、陸軍の巨頭川上操六や桂太郎といふ人々が、軍事上からも鐵道は國有でなければ、一朝國家有事の秋に支障を來すと、雨宮の説を支援して起つたので、世論はやうやく官業の是を唱へるに至つた。そして調査委員を官民中から擧げて、研究を重ねた結果、まづ日本鐵道とか、山陽鐵道とか大會社の經營になる主要線を買収し、今日の如く全國幹線の全部が國有となつたのであるが、雨宮の主唱は鐵道局から鐵道院となり、更に昇格して鐵道省となつて、主務大臣によつて統轄されるやうになつたのだ。かういふ先見は、早くから歐米各地を旅行したゞけに、新しい考へを持つてゐたもので、たとへ買収によつて、彼れ自身の關係してゐる鐵道が、いゝ値に賣れるといふ利害から出發したにしても、たしかに鐵道國有論の先覺者であつたに違ひないのである。

隨つて彼れは鐵道敷設には、非常に骨を折つてゐて、新宿八王子間、中央線、大日本軌道といふやうに、交通機關に力を注いだのであつた。

就中明治二十三年に、米國で運轉してゐる電氣鐵道の寫眞を見て、直ちに東京にこれを實現の計畫を樹て、眞先に許可出願をしたくらゐの男で、電車事業の發達に對しても、彼れの盡した功績は、



著しいもの

北海炭礦株買占

明治二十五年の株式市場は、極めて不振で悲觀時代を繼續してゐて、一向に景氣は出て來なかつた。恰度その時、十五銀行の持株である北海炭礦株七千株が、市場に賣りに出た。一日の賣買高がやうやく二千三千といふ貧弱な時代だつたので、この大きな數を、一遍に處分に出したのだから、場の混亂は大變なものであつた。

容易に解決することが出來ず、遂に立會は夜になつて、ランプを點じて繼續されてゐた程の騒ぎで全く血眼であつた。その大玉の賣りに出ることを早くも聞いて大膽不敵にも買ひに向つた男がゐるた。

『無茶な事をする男だ、七千なんて纏つた株が、受け切れるだらうか。一體誰だらう』  
とひそかに其の買ひに廻る男の意氣を壯とし、一種の興味を惹いた。

それは別人ではない雨宮敬次郎である。勿論彼れが一手で、七千株を引受けるのではなく、田中平八や百三十三銀行の頭取であつた加東徳三などを味方にして、すつかり相談を定め、

『七千株つていふが、それは掛聲だけだらう。精々二千ぐらゐるが關の山だと思ふ。度胸でやつゝけるんだ』

かう高を括つて、混亂してゐる場内に飛込んで、買ひ方に向つたのであつた。

渦巻くやうな騒然たる市場は、一しきり言ひ知られぬ動搖に、一段と凄い光景を呈した。

『買ひに廻つたのは雨敬だ。こいつは見ものだぜ、とても買ひ切れまい』

『玉を知らずに買つて出たな、今に驚くだらう。だがあの男の事だから、眞逆におじぎも出來まい。』

どう切り抜けるか本當に面白い見ものだらうぜ』

場に居合はせた者は、買ひ占め派が雨敬だと分ると、異様な感に打たれるのであつた。

果してこの買占めは、非常な危険なもので、いよく受渡日になつた時、雨宮は三井銀行に駆け込んで、百五十萬圓の金を引出さうとしたが、話が九分通りまとまつて、大丈夫だと思つてゐる矢先に

融通を斷られたので、すつかり計畫が齟齬してしまひ、極度の狼狽に八方金策に狂奔し、血眼になつて前川太兵衛や平沼專藏を口説き、平沼專藏からは溢々ながら二十萬圓を借出すことを承知させ、急場を切抜け得るものと、吻と息をつく間もなく、雨宮派の形勢が危しと見るや、忽ち約束を破棄してしまつた。

それが爲に受渡日になつて、取引所へは一錢の金も入れる事が出來ず、大混亂を惹起するに至り、遂に市場は臨時休會を續けること二十五日に及んだ。その間にはさまざまの流言蜚語が傳はり、米穀も綿絲も非常な不安に襲はれ、果ては取引所に對する非難攻撃の叫びが高まつて來たが、結局賣方と



買方とが、調停に立つてくれた人々の顔を立て、解合ふことに話がついたが、仲買人はこの事件で七人違約處分に附せられるやうな、犠牲者をまで出して解決がついたが、雨宮はこれですつかり、財界から一時信用を落してしまひ、天下の雨敬として、昔日の權勢は甚だ振はなくなつたが、それも月日のたつうちには、自然とまた舊の如く京濱實業界に擡頭して、盛んに活動を續けた。

これが雨敬の一生中では、一番大きな失敗の記録であつた。

明治の九年に早くも外國に渡つて、新知識を詰め込んで歸朝した男だから、外債募集については、その當時から進んだ意見を持つてゐた。

そしてよく政府の高官連に、進言した事もあつたけれど、外國を理解しない時代で、

『外國から借金をするなぞとは、もつての外の事だ。そんな眞似をすれば國辱だぞ』

と言下に一喝を喰はされたなぞといふ、をかしな話もある。

今から考へて見ると、實際外國から借金をする事は、國辱だと信じてゐた時代である。その鎖國氣分の抜けきらない頃に、雨宮は外債といふことを考へてゐた。

二頭立ての馬車で威儀を正して乗り廻してゐた大官達に比べて、一町民の雨宮の考へてゐる事の方が、遙かに進歩してゐたのではなからうか。

## 洋紙の平三郎



楮を原料として、和紙を製造することは、かなり古い時代から、各地で盛んに行はれてきたが、西洋紙の製法は、殆ど知られてはゐなかつた。

すべての事業が、王政復古の新機運に眼ざめて、新しい方面に進歩し、開拓されて行く時である。僅かの生産能力しかない和紙の手漉きぐらゐで、事足りりと悠長に構へてはゐられる筈はない。

明治五年、今の澁澤老子爵が、當時の富豪であり、事業の創立に力を盡してゐた三井組、小野組、島田組等に相談をして、十萬圓の合資で王子に抄紙會社を創業せしめた。これがわが國で洋紙製造の濫觴である。

米國から高い月給の製紙技師を、遙々と招聘して事業を開始したものゝ、その技師がどうしたことか、いろ／＼と得意になつて講釋はするが、教へられる通りの方法で製造に當ると、少しも完全な紙は出來ず、これには會社側も、すつかりアテが外れて、とてもこんな事では、會社の成立するわけがないので、氣の早い出資者中には、一層、損の少ないうちに、工場を閉鎖してしまつた方が、得策だと主張する者も出て來た。

だが折角、會社を創立して、漸く製造に着手したばかりで、閉鎖などとは短氣過ぎる、何んとか一



段と工夫をして見たらば、兎も角も研究時代の事でもあり、多少の犠牲は忍ばなければならぬ、といふ穩和説も唱へられ、結局このまゝ繼續するといふ事になつた。しかし社員も工場員も、一生懸命であつた。どうしても満足な製品を作り出さなければ、單に自分たちの生活問題だけではない、わが國の工業界としても耻辱である。そこで協力一致して、苦心研究を重ねた揚句に、それでもどうやら、市場に賣出せるだけの製品は、作り得られるまでにはなつたが、まだ改良すべき餘地は、澤山にあつたのである。

恰度會社がその難關時代、月給五圓の下級社員で働いてゐた一人に、大川平三郎といふ青年がゐた。武州川越藩の士族の家に生れたが、明治維新の方、家運がすつかり衰へてしまつたので、姻戚關係に當る澁澤榮一氏を頼つて上京し、就職の世話をしたのんだ。別にこれといつて技能があるわけでもなし、性質もハツキリと分らなかつたので直ぐに何處へ向けるといふわけにもいかず、兎も角も立關番として、その人物を見てゐた。

彼れは極めて忠實であつた。功名心と覇氣に富んだ、有爲の青年であることを見抜いた澁澤老は、最も近い王子製紙に入社せしめて、月額五圓を支給したのである。その時分の五圓といふ月給は、獨身者が下宿をして普通に生活をして行くには充分の金であつたから、澁澤邸に寄食してゐる身には、使ふまいと思へば、月給は全廢りになつた。

人に勝れた勤勉と奮闘とは、忽ち模範社員と言はれるやうになつた程、彼れの努力は非常なものであつた。一日會社の仕事をして歸ると、機械の研究に志したけれど、何分にも和文に譯された書籍は至つて少なく、どうしても原書によつて學ぶより完全な方法がなかつた。

しかし語學の素養のない彼れは、不自由を忍び乍ら、英和の字引を手に入れて、一心不亂に語學の獨學を始めたのである。全くの初歩から會得して、六ヶ敷い物理や化學の原書を讀破しようといふ意氣は、悲壯な覺悟がなければならぬ。この點だけでも非凡な精力がなくては出來得ぬ仕事だ。決心は中途で挫ける事なく、あらゆる困苦に堪へて、どうにか辭書を片手に、六ヶ敷い機械に關する原書の意味を解し得るに至つたので『製紙工業論』といふ一篇を綴つて、これを澁澤老に閲讀を請うた。流石の澁澤老も大川青年の根氣ある努力に、驚嘆を禁じ得なかつたであらう。心ひそかにその將來を一層矚目すると共に、これ程の男をして、何時まで下級の仕事を與へて置くのは、會社としても不利益な事であると、すつかり信用した。

『年は若い、しつかりした男だ。何をやらせても、立派に仕事をするに違ひない』  
澁澤氏の眼鏡に叶つた大川青年は、一躍異數の拔擢で、製紙業研究の爲、米國に留學を命ずといふ、且つて例のない辭令を與へられたのは、不斷の努力が酬いられたに外ならぬ。

この破格な命令を受けた大川青年は、喜び勇んで、早速洋行の仕度をし、非常な抱負を抱いて渡米



する事になつたのであるが、これを聞いた多くの社員達は、羨望であり嫉妬の種で、内心誰も不平を抱かぬ者はなかつた。

『研究のためなら、技師を留學させたらよささうなものだ、何もわざわざ下級社員を外國にやることはなからう』

かうした不平は、誰にもあつたのであらう、横濱を出發する時には、その行を盛んに見送つてくれるべき筈の同僚は、一人も送りに來て呉れる者はなかつた。

何んといふ淋しい鹿島立ちであらう。多くの社員中から、たゞ一人が選ばれた喜びも、この餘りに情ない旅立ちに、しみじみと心細さを感じずにはゐられなかつた。

如何にも友情のない、人々の冷やかな態度を、目のあたりに見せつけられた彼は、畢竟自分が輕蔑されてゐるからこそ、目度い門出にも、誰一人として心から共に喜んで、勵ましてくれる者がな

いのだ。と一時は非常に心細さを覺えたけれど、忽ち發奮の動機となつて、仕事の上の實力で、飽迄も辛く冷やかに仕向けた人々を、見込してやらなければと、奮然として堅い決心を抱いた。

その頃恰度淺野總一郎老が、横濱で石炭屋の店を持ち、盛んに賣り込みの運動を續けてゐた。王子製紙でも濫澤老からの口添へで、淺野商店の手から石炭を買ひ入れてゐた關係で、大川青年は淺野の店を訪ねた。

『今日出帆の船で、米國に出かけますが、まだ時間に間があるから、お訪ねをしました。何しろ誰も送つてくれる者がなくて、少し心細くもあり、氣まわりも悪くつて弱りました』

愚痴を言ふ氣でもなかつたが、淺野の顔を見ると苦笑を浮べて、つひ腹のうちに思つてゐる事を口にした。淺野は如才なくいろいろと、慰めたり勵ましたりした揚句、心づくしの晝飯を馳走した上、

『私が一つ皆さんを代表して、お見送りしませう』

とわざわざ忙しい身の彼れは、大川青年の出發するのを波止場まで見送つた。

大川は淺野の心持ちを、非常に喜んだ。それ以來二人の間は極めて親密になつて、後年互ひに成功するに及んで、實際は一層深くなり、お互の事業を扶け合ひつゝ、親善の度を加へてゐるのである。

米國に渡るや直ちに、ホリヨークの製紙工場で、不自由な語學をあやつり乍ら、實地の研究に没頭したのであつた。元來が獨學で語學を修め、辭書と首つ引きで、物理や化學の原書を、讀んだといふ

くらの努力家で、やりかけた仕事は、たとへ如何なる面倒な六ヶ敷しい事といへども、飽迄も徹底的に飲み込むまでは、究めなければ満足の出來ないといふ性格であるから、すべての全く異つた異郷の空で、何にも彼にも不自由だらけを忍び、血のにじむやうな奮闘も、多くの社員中から選抜されて、

海外に派遣された光榮の前には、物のかすではなかつた。

苦しみに遭ふ毎に、責任の重い使命を一層深く感じつゝ、刻苦精勵したその勇氣と、勝れた心抱強



さには、流石のアメリカの職工達も、つくづく感服した。そして遙々と海を渡つて、研究に來た日本青年のために、愉快な好感をもつて接し、すべての便宜と親しみをもつて、指導してくれた。豫期したよりも早く、一通りの技術を修得して、歸朝した大川氏は、早速學んだ技術を、實際の製品の上に應用したのだから、従來の製品とは全く比較にならぬ程の、質の上等なものが出來、市場の評判は頗る高くなつた。

殊に世を驚かしたのは、薬を原料として、紙を製造すること、これはその當時には、實に製紙界の大改良の一つであつた。渡米前までは一下級社員として、會社の待遇も決してよくはなかつたし、多くの社員達からも、殆ど存在をすら認められてなかつた大川氏が、歸朝後は俄然頭角を現はし、誠心誠意の努力の報酬は、メキメキと置位が昇進して行つたばかりでなく、一般からも畏敬の眼をもつて迎へられるに至つた。

十七年には再び歐米の製紙業を視察すべく派遣された。この時の使命も重大なるもので、歐米各國では木材を盛んに原料とした紙を、生産してゐるといふ事實が傳はつたのを、研究するのが主たる用件であつた。

第二回目の洋行の時は、最初の如き孤影淋しく出發したに比して、非常な盛んな見送りに取圍まれ、萬歳聲裡に横濱埠頭を出發したのである。かうした人々の厚意に感激した彼は、前回にも勝る成功

を心に期して、實に愉快この上もない旅に上つた。

木材を原料とする新發見の製法は、極めて祕密にしてゐるために、容易に製法を知る事が出來ず、これには失望と落膽とを感じたが、遙々と研究に來た甲斐もなく、手を束ねて空しく引揚げるやうな男なら、會社としても責任ある使命を託す筈はない。

祕法を知るためには、一番手取り早い方法として、直接それに従事してゐる職工の買収を試みた事もあつた。しかし最初は、てんで相手にしてくれず、二度三度となると、いゝ加減な事をいつて、胡麻化してしまふか、話を巧みに他に轉じて、肝心な要點を打明けないので、どうにもならないのであつた。まるで調戲はれてゐるやうな始末で、流石に手を焼いた彼は、この上は社長に頼んで、縦覽を謝絶してゐる工場に、出入を許して貰ふことを熱心に請うた。

案ずるよりは生むが安く、話は思ひの外結果がよく、參觀を承諾してくれたので、早速朝から出かけて行つて、職工達の就業を一生懸命になつて、毎日のやうに見てゐた。

社長から特に許された參觀人といふので、工場に働く技師や職工も、いろ／＼な質問には親切丁寧に説明を與へてくれる勞を惜しまなかつた。

木材原料の製紙法を、ことごとく會得した大川氏は、これを土産に歸朝したが、恰度製紙とは最も縁の深い、印刷の方面も著しく發達の機運に向つてゐるので、王子の工場は一時に注文も増加して



来たのであつた。さういふ時に原料の豊富な北海道あたりから、木材を伐り出してこれを紙の材料として盛んに産出するといふやうな計畫を實行したので、會社としての利益は年々増加して行つた。明治二十六年株式会社と組織が改められた時、一躍専務取締の地位に擧げられたのだから、會社の爲めに盡した功勞は、非常に大きなものであつたに違ひない。

月手當五圓の社員を振り出しに、コツ／＼と不斷の努力によつて、築き上げた重役の位置は、當然とはいひ乍ら、彼れも一代の幸運に恵まれた男である。

そして今日まで、前後七回も外國に行つてゐるが、製紙業に關係のない場所は、名所も古蹟も顧みない、自分の携はる事業以外には全く無關心で通つて來たといふくらゐ、仕事のためには忠實である。

だから現在、製紙界の大立物として、實業界に盛名を馳せてゐる大川氏は、富士製紙を筆頭として、九州製紙、中央製紙、八代製紙、鴨綠江製紙、中島製紙、伏木製紙、共同バルブといふやうに、製紙會社との關係が一番深い。以上の諸製紙會社は社長又は副社長大株主となつて、會社の發展に力を注いでゐる。その他の諸會社を擧げる時は、實に五十餘のものに關係し、毎朝定刻に家を出て、一通り顔を出して歩くだけで、日々自動車の走行マイル數は、百マイルを超えといふ程である。

勤勉なる努力は、わが財界一方の巨頭となつても、猶ほ且つかうして、重役として社長として、目の廻る程の忙しさを繰返して、日を暮してゐる。

## 根津式成功法



## 十萬圓の大金

明治二十五年に、現金で十萬圓といへば、莫大な大金だ、その時分の物價に比例して見れば、十萬圓の金かどのくらゐの價値があつて、どれ程に使ひであつたものかは、直ぐ解る問題だ。

その大金を、無雜作に持つて東京に商賣を探しに出た根津嘉一郎氏の實家は餘程の豪家であるに違ひない。

若尾逸平、小野金六、雨宮敬次郎、甲州出身實業家の三巨頭は、何れも既に物故した。それ等先輩の亡き甲州系財閥を、繼承して財界の一方に、勢力を扶植してゐる根津嘉一郎は、近郷といふよりは甲斐一國でも屈指の大身代の豪家に生れてゐるのだから、貧乏の味や不自由だなんて、イヤなものも全く知らない、幸福な境遇に人となつて、病弱な兄に代つて、千萬長者の家督を相續する身分だつたのだから、父祖代々の遺産を守つて、安樂に世を暮してゐればらるゝものを、それは彼には全く生き甲斐のない生活であつた。

金の番人をして、一生を終る如きことは實直なる者ならば誰でも務まる。銀行の金庫と同様な役目



は、希望に燃える彼れには到底忍ぶべからざるものであつた。

大望を抱いた長者の若旦那が、十萬圓の金を懐に入れて、東京に出て何か思ひ立つた事業を興さうといふ事は、物堅い親類縁者たちに、飛んでもない料簡違ひな事だと思はせて、むしろその馬鹿氣た考へを、思ひ止まらせようとする者さへあつた。

「十萬兩つて金を、わざ／＼捨てに、東京に行くも同じだ、何しろ生馬の目を抜くつて土地だから、無駄な事はやめた方がよからう」

かういつた意見は、正直な地方人として、當然、抱く不安だつた。

しかし當の根津嘉一郎氏は、一度決心した上京計畫を、周囲の反對ぐらるには動かされず、頑として聞き入れなかつた。そして斷然東京に出て、株と土地の思惑を試みたのである。

兎に角資金として持つて来た金は十萬圓だ。これを銀行預金にして置けばかなり贅澤な生活をして、利子だけで家族の五六人は豪奢な日が暮せて行けるのだから、株や土地に手を出すにしても、相應に思ひ切つた仕事をする事が出来た。

株式市場の取引は、今とは違つて市場全體が、世間を驚かすやうな損徳は、餘り無かつたけれど、やはり株の勝負は個人としても、かなりの金の受け渡しが行はれてゐた。

そんなわけで、十萬圓の大金も、株式市場の資金にして、損をする場合には、忽ちの間である。國

を出る時に、親類縁者がしきりに心配してくれたのを、空吹く風に聞き流して、遮二無二に東京に踏み出したが計畫はすつかり齟齬してしまひ、十萬圓の金は、元も子も無残に摺つてしまつた。儲けるつもりだつたのを損をしたのだから、馬鹿々々しいとは思つたらうが、失つた金に對して、執着心は起さなかつた。そこが流石に長者の家に生れた鷹揚なところであらう。僅かな金の爲に自殺を企てたり、人を殺したりすることの多い世の中に、十萬圓くらゐの金は、金だと思はずに平氣でゐられる身分は、羨むべき幸福ではないか。

「損をしたまゝにして置いてはつまらない、今に今日の十萬圓を、百倍千倍にして取り返してやらう」  
かう、深く思ひ込んだ彼れは、人の口のうるさい郷里には戻らず、それ以來東京を永住の地に定めて居を構へるに至つたのである。

### ボロ會社の買収

東京電燈の株を甲州系が買収した時、根津は一躍産を成した。それを資本にして、各方面の事業に盛んに手を延ばしたのだが、彼れの目をつけるところは、新らしく資本を投じて、事業を興すことよりも、不振で持て餘してゐる既設會社を買収することであつた。



東武鐵道を一手に収めたのを始めとして、その他幾つとなく、同じ方法によつて、目的を達してゐる。

今日の東武鐵道は、社運隆々として、新線はドシ／＼延長し、始發驛の淺草驛は名實伴はなかつた本所區小梅にあるのを、淺草區花川戸に移し（目下建築中）全線悉く電化となつて、私設としては屈指の鐵道會社である。しかしそれは根津氏の手に移つてから、今日の如き發展を遂げたもので、この以前は甚しい經營難に陥つてゐて、殆ど繼續の見込みが立たない程、悲境に陥つてゐた。

さういふ會社を買収するのだから、無論安い値でなければ譲り受ける筈がない。そんな工合で出来るだけ値切り倒して買ひ取つたのである。

それが經營よろしきを得て、遂に今日の如き大會社を建設するに至つたのだから、事業運もあるに違ひないが見込みをつけるところに、獨特な眼力を備へてゐる。かういふ筆法で買収しては、見込み通りに仕立てた會社ばかりでも、二十に餘りあるといふ豪勢振りだ。

かうして富豪としての第一條件である財を、殖やし積んで來た額は、非常なものだと噂されてゐる。往年十萬圓を株と土地との思惑で一敗地にまみれた時、今日の十萬圓を、百倍千倍にもして取戻すとひそかに豪語した言葉は、實現したのだ。

金儲けは、儲けることに焦慮りさへしなければ、多くの場合は自然が儲けさせてくれる。やつぱり

それには資本が入る、或る程度の資金の用意があつて、無理をせず事業をさへすれば、間違ひはないのである、こんな理窟は誰だつて知つてゐるのに、それが實行されてゐない。

根津氏の儲け方が、この筆法で行つてゐる。三菱の如きもその通りである。根津や三菱の資源の最も大なるもの、一つに、土地のある事を忘れるわけにはゆかない、始末に困つた丸ノ内の原を、半ば無理押しつけに買ふべく餘儀なくされた三菱が、現在の丸ノ内の所有地を評價したら、果してどの位の金額の物にならう、土一升金一升と譬へられてゐる場所は、恐らく何千萬の價格のものであるであらう。

それとはやゝ算盤のケタが違つてはゐるが、根津氏の所有地にも、これに似た話があるのだ。恰度三十年近くも前に、雜司ヶ谷に二萬坪ばかりの土地を、五千圓を投じて買ひ入れた。その頃の雜司ヶ谷といへば、人煙稀薄の地で、誰も進んで買ひ取らうとする者はなかつた。買へば何年かをそのまゝにして置き、時代が土地を發展させてくれるまで、氣を永くして待つてゐなければならぬ。

一坪の値にしたら二十五錢にしか當つてゐないが、二萬坪と纏まれば、五千圓の大金となるので、その一資本を如何に將來は發展の見込みが立つてゐるにもせよ、放資して待つことは、容易に成し難い。もつとそれよりも手取り早く資金を繰り廻して、利益を得た方が利口なやうに考へられる。

假にその資本で安全確實な事業を起し、方法よろしきを得て、儲けを豫期した如くに擧げたところ



で、驚く程の利を見る事は難いことであらう、しかし誰しも利益はそれ程、大きいものでなくとも、目前に走るのは人情だ。五千圓を二萬坪の捨て石にして置くのは、今から三十年近い昔に、三井や岩崎程の大身代なら別に痛くも痒くもなかつたらうが、其の頃の根津氏には、相應に高い金額であつた。

それを思ひ切つて投げ出して、買ひ取つたまゝ、畑や雑木林を手もつけずに、放置して土地に値の出るのを待つてゐた。果せる哉十年十五年と過ぎるに随つて、郡部に開け延びて行く東京の發展は、田畑といはず沼澤といはず、山林といはずに、いやしくも空地といふ空地には悉く家を建て、なほ貸家の拂底を叩かれたのだから、廣莫二萬に餘る土地は、八方から讓渡の希望者が現はれて來た。坪二十五錢で買つた土地が、鰻上りに値が出て來て、たうとう百圓といふ價格にまでなつた、即ち二百萬圓で譲つてくれと、交渉があつたのだ。こんな調子で、自然と金が出来て來るのだから、彼れの資産として評價される額は、決して生やさしいものではなく、一切合切を寄せ集めたら、一億圓にも近からうと世間の評判である。

その青年時代に、十萬圓を懐にして、一旗揚げる意氣組みで、東京に出て來た時、元も子も無くして、二度と再び故郷に引込んでしまひ、生家の業を繼いでゐたら、先祖代々の豪家の當主として、一生は安樂であつたらうが、しかし平凡な男として、今日實業界に盛名を馳せる根津嘉一郎はるなかつたのである。

失敗した十萬圓を十倍百倍にしようとして奮起した。その目標はいつか突破して、彼れは愛玩の書畫骨董ばかりでも、時價に、見積れば二三千萬圓を超えろと言はれてゐる。

今や事業界に望みを達した彼れは、彪大な資産を擁して、若尾逸平、小野金六、雨宮敬次郎等の三巨頭亡き甲州系の財閥に、第一人者をもつて自他共に許してゐる。そして永久の記念事業として、育英に財を投じ、武藏野高等學校を創設したり、社會公共のために盡してゐるのは、結構な事である。

根津が、現在大株主である松屋吳服店の、古屋徳兵衛とは同郷の關係があるので、經濟方面の有力な應援者となつてゐるのだが、松屋先代の主古屋徳兵衛も、立志傳中の一人として、見逃すことの出ない經歷を持つてゐる。

根津との關係もあるから、その一端を紹介することも、あながち意味のない事でもなからう。

甲斐國北巨摩郡鳳來村宇下敦來石、其處は地圖を見ても分るが、中央線小淵澤驛から、三里も離れた八ヶ岳山麓の、文字通りの山間の僻村である。その交通の不便な土地の貧しい百姓に生れた徳兵衛さんは、文久元年九月十三日に生れて、明治四十四年七月二十四日に病歿するまでの一生中、若い頃には人並以上の苦勞を見てゐた。



安政の大地震の後には、手間賃が百姓をしてるより多しと、河川の修築や道普請の人足に出て働いたりしたものであつた。二十二歳の年に、横濱の貿易が盛んになつたといふ噂を傳へ聞いた時に、今まで一向に世間の様子などを氣に止めてゐなかつたのが、急に考へ初めた。昔も今も人の心持ちには變りはない、數年前の好況時代には、東京を始め大都市を目ざして、出稼に農村を奔走する青年が多く、それが爲に耕作に手不足を感じて、年々農家は疲弊してしまふといふ、事實があつたが、昔だつて同じこと、世間の景況を何にも知らずに、殆ど自分の住んでゐる村以外とは、交渉を持たない山間の純朴な農村に育つて來た男が、

『横濱の景氣は、實に素晴らしい、こんな山の中の小さな村にゐたのぢや、まるで世間の様子は一生判りつこはない、儲けるのは今だ。若尾さんや小野さんも、横濱に出て貿易をして、すつかり財産家になつてゐる』

かういふ煽動するやうな話を聞いて、たゞさへ功名心の強い若い者の心は、どうして躍らざるにやう。

『百姓ぢや成程一生頭は上げられない、一つ思ひ切つて横濱に出て働いて見ようか』

と父母を残して單身隊ぎ溜めた小金を懐にして出かけた。そしてさゝやかな小切屋を開業したのが、運に叶つて段々に手廣く商賣を始め、鶴屋といふ呉服店を、どうにかかうにか創業したのであつ

た。

『古屋は感心な男だ』

かう思つて目をかけたのが、同國の小野金六である。そして物質の援助を與へたのが、古屋の爲めには鬼に金棒となつた。

東京神田今川橋に松屋といふ呉服店を開業したのも、小野金六の後援によつて、大正十二年の大震災で、灰燼に歸した後は、銀座に逸早く進出した。その高層七階建ての大店舗は借家で、家賃は一年四十萬圓の契約だと傳へられてゐる。

東京で五大百貨店に擧げられてゐる代表的の百貨店の一つである松屋は、株式會社となつてゐるが、その大株主として代表するものは、根津嘉一郎氏である。

根津、若尾の確執

こんな話がある。同じ甲州系の財閥のうちでも、必らずしも仲のいゝといふわけには行かない。若尾逸平には子供が一人も無かつたので、おはつ人夫の弟、長次郎を養子として民造と改名して、二代目を繼いだ。

二代目は七八人の子福者で、次女きよの子に迎へた婿養子璋八氏は、當主の謹之助氏が、あまり世



間の表面に現はれては活動せぬので、却つて璋八氏が若尾を背景にして、いろくの事業を經營してゐるうちに、三ツ引商事會社といふものを設立した、この會社の事業といふのは、東京電燈で消費する物品全部を取次ぐのであつて、いはゞ東電へ納入すべき品に對する検査機關であつた。

しかも検査税として、價格の一分を徵收する契約だから、濡手に粟である。最初から根津氏は璋八氏と、意見が合はなかつたものと見え、一方の名が世間に高まつて來るに隨つて、いい感じを猶更持たぬ風が見えてゐた。そこへ持つて來て根津の感情を害ねたのは、三ツ引商事會社の事業であつた。

東電の大株主となつてゐる根津氏は、三ツ引商事の事は、東電と株主の利益を減せしめるものと、頭から反對の立場に在つて、非難攻撃をかなり手びとく浴びせた。

璋八氏の方では先輩に逆らふことをせず、内心はどうあらうと表面では、至極神妙な態度であつた。しかし根津氏の論鋒が次第に強く當つて來ると、當の璋八氏は忍んでゐても、恩顧普代の人々が默視してはゐるなかつた。

或る時に根津氏の歸途を待ち受けた壯漢數名が、矢庭に汚物を投げつけて、復讐の凱歌を擧げる如き直接行動に出してしまつた。それが爲に一時は、告訴沙汰にまで及んでゴタ／＼を繰り返してゐたが、同郷の有力者二十餘名が兩者の間に仲裁に入つて、間もなく和解をして、變な感情を水に流した事がある。

電氣の桃介



## プレミアムの最初

彼れ自身もいつてゐる。福澤桃介といへば世間では、非常に誤解して見てゐると、山師で女蕩して手におへない遊蕩兒のやうに思つてゐるが、福澤桃介は決して、そんな甘い不眞面目な男ではない、自分ほど地味で、遊ぶ事の少ない者は、實業家としてはむしろ珍らしい位だらう。

かう自分で語つてゐるのだから、大抵間違ひはない筈だ。

慶應義塾を卒業して、北海道炭礦に月給八十圓を振り出しの、俸給生活を何年か味はつた後、その間に貯へた三千圓の金を持つて、東京に出て來て相場に手を出した。そして運に叶つて十萬圓を擱つたのが、そもく、財界に乗り出す資金だつたのである。

かう筆の運びを早めて行くと、三千圓の元が一足飛びに、十萬圓といふ纏つた大金になつたやうだが、それまでにする苦心は勿論容易な苦勞ではないにきまつてゐる。随分思ひ切つた眞似もやつて來たが、兎に角、十萬圓に纏まつた金を、どう有利な事業に投資しようか、といふ事は大きな問題だつた。



一つ間違へば折角の資金を無くして、もとの裸一貫に戻らなければならぬのだから、浮沈の境の分れ目だった。しかし儲けることにかけては、既に三千圓を十萬圓にまで積み上げた自信があるので親から譲られた財産を、不安にかられて投資するのとは、甚だ相違はあつた。

で、根津嘉一郎、早川鐵冶、平沼延次郎氏等と新しい會社を起し、株式の賣買と新會社のプレミアムと、極めて都合のいい儲け口を見つけた。

その當時新會社の株券に、プレミアムが付くなどといふ事は、まるで山師のする仕事の如くに苦々しい疑惑の目をもつて見てゐたものだつた。實際今とは時代が違ふので、世間では不審がつたのは無理はない。プレミアムを付けた最初は、福澤桃介氏や早川鐵冶、根津嘉一郎氏等の發起で組織された肥料會社の株が、そもそもの濫觴であつたのである。

『山師のする事だ』

と警戒と輕蔑とをもつて評してゐたそのプレミアムがどうだ、最近では新らしく設立される會社の株券には、殆ど無くてならぬものゝ如くになつてゐるのだ。かういふ案を世評に顧慮せず斷行した福澤、早川、根津氏等の先見は、今日になつて見ると、定めて得意なことであらう。

計畫した事業は、順調に目論見の如くに進んだので、根津嘉一郎氏と協同で、その頃尾張の半田に本社を有してゐたカプト麥酒會社を買収した。こんな仲よく事業を共にした福澤と根津とが、この

會社の經營から、遂に意見の衝突を來して、喧嘩別れをするやうになつたのも、不思議な話である。意見の衝突といふのは、つまらぬ感情問題で、我を張り合つた結果、折角の親しい間柄で、共同事業に協力してゐたのが、案外にアツサリと別れたのは、如何にも物足らぬ氣もする。

カプト麥酒の社長を、最初根津氏が固辭して受けなかつたので、福澤氏は適當な人物を物色するといつて、郵船會社の重役の淺田正文氏と相談して、久保扶桑といふ、やはり郵船の重役を社長に推さうといふ事にして、殆ど内諾まで得てこの事を根津氏に通じたのである。

すると根津氏は、頭から反對をしたので、福澤氏の立場として、淺田、久保の兩氏に對して甚だ面目を失墜しなければならなかつた。それが紛擾の動機となつて、福澤氏は麥酒會社と縁を絶つことになつたのであつた。持株二萬株を賣りに出して、さつさと關係を絶つてしまつた後は、株式市場に在つて頻りに活動を續けてゐるうちに、明治三十七八年の日露戰役後に株式界は、頗る好況を來たしてゐた時、盛んに儲けつゞけ、四十年の反動期に入るや、忽ち財界は大恐慌を受けて、破綻者は續出するといふ慘澹たる時、彼れはその來るべき變動を豫知し、一月には炭礦株や取引所株を始め、持つてゐた株を全部賣つて、すつかり手を締めてしまつたので、財界の混亂時代、成金共が枕を並べて倒産の悲運に陥つてゐる時、彼れだけは二百五十萬圓を懐にして、狼狽する財界の人々を、笑止氣に眺めてゐたといふ、幸運兒であつたのである。



## 相場を見限る

財界の變動を察知して、賣つても儲け、買つても儲けたといふ彼れは、きのふの成金が、今日は元の歩に戻る混亂を他所に、二百五十萬圓を大掴みに掴んだのを最後として、相場をさつぱりと思ひ切りよく、見限つてしまつたのである。

元來この投機事業に手を出した者は、勝つて止められず、負けて思ひ諦められぬのが人情だ。勝つてば勝つて慾が出るし、負ければ負けたで取り返さうと、追ひ目にかゝつて焦慮る。どつちに廻つても思ひ切りよく縁を絶つてしまふ事は、容易に出来るものではない。

福澤氏は、もう株式もこの位儲ければ、手を引いてしまつて、後世に残すべき事業にと心機は一轉した。最も彼れとても、日清戦争後の反動では、痛手を蒙つた苦い経験があつたからこそ、今度の儲けをキツカケに、綺麗に足を洗ふ決断がついたのであらう。

新らしく計畫する事業、いろ／＼と考へた揚句に計畫を立てたのが、電氣事業であつたのである。しかし最初から舞臺を東京に求めようとはしないで、地方に開啓すべき場所を選んだのは、流石に考へ深いところであつた。

の、巨頭連中として、三井岩崎を筆頭として、かなり澤山ゐるので、所謂財閥の勢力といふものを、度外視しては事業がつまり成立しないといつて、其の財閥を力にして、仕事をやる氣は毛頭なかつた。何うせやるものなら、たとへ小さくとも、獨立して始めようと、固い決心は動かなかつた。

東京を離れた土地で、經營すべき電氣事業、それは到るところにあつた。現在のやうに電車も電燈も、まだ悉くには行き渡つてゐない時代である。況や水力によつて電氣を起すことの如きは、一笑に附されてゐた頃だ。そこで彼れは、松永安左衛門氏が計畫中であつた福岡市と博多間（現在博多は福岡と合併してゐる）の電軌鐵道に目をつけた。

しかしそれは大事業で、資金も相應に要するため、到底彼れ一人の力では及ばなかつた。どうしても財力の後援者を得なければ、折角の事業も完成が覺えないおそれがあつた。飽迄も一本立ちで思つた事も、財力に制限されて、やはり誰か有力な後援者を頼まなくてはならなかつた。

彼れは且つて、米國留學中に交際した幾人かの友達を思ひ出した。その中から眞先に岩崎久彌男を頭に浮べぬわけには行かなかつた。しかし三菱の後援を得ようと言ふ氣ではなく、一個の舊友である岩崎久彌男の、援助を受けようといふのである。けれども相談を持ち込んだところでは必らず承諾してくれるといふ自惚れは持てなかつた。

岩崎男の財力から見ても、自分の出資して貰はうとする額は、九牛の一毛に過ぎぬ程の、極めて少な



いものだつた。が、その時代世間一般の福澤桃介を見る目と評判とは、決して眞面目な實業家とは思つてゐなかつたのである。既にもうこの時は、相場の足を洗つてゐるに拘らず、やはり依然として、相場師だといふ事が忘れられなかつた。そんな關係があるので、相談に行つても岩崎男は、警戒するだらう。そして結局は、體よく出資を斷られるのではないかと、豫め覺悟をして訪問したのであつた。

明治四十一年の十二月、米國ヒラデルヒヤに留學以來、歸朝してから後は絶えて往來もしなかつた岩崎久彌男を訪問したのである。勿論舊知の友人の訪問を、岩崎男は快く迎へた。

福澤氏は熱心に、電氣事業を計畫した顛末を、明細に縷陳した揚句、

「實はそれについて、あなたの力を借りたために、伺つたやうな次第です」と肝心の要件を切り出した。

「電氣事業は大に有望です、大變結構なことを計畫思ひつかれた」

その計畫には頗る賛成らしく言つたが、出資を承諾するともしないと、言はなかつた。

「たしかにこの事業は、間違ひのないといふ確信があります。たゞ成功不成功は、資金の關係だけです」

桃介氏は一生懸命に、久彌男の腹を讀まうとしてゐる。

「出資といふと、あなたの事業に資金を融通するといふ意味でせうか」

「お願ひといふのは、株を持つて頂きたいのです」

「株を買へといふお話ですな、それはどの位ですか」

話は決して見込みのないことは無いと、腹算當をした福澤氏は、

「つまりかういふ事を、御承諾願はれませんか、あなたが一萬株でも五千株でも、引受けて下

されば、私もそれだけの株を持ちます、つまり同額の御出資が願ひたいと思ふのですが」

「或程、共同出資でやらうと言ふのですか、お話の趣意はよく分りましたから、何れ改めて、何れ

ともにお返事はすることにしませう。」

即答は避けた。無論話をして直ぐ其の場で、否やの返事を聞かうとは、最初から考へてもゐなかつたが、初めから三菱ではなく、個人の岩崎男に相談したのだから、重役達に話をして呉れねばよいと思ひ乍ら、

「よく一つお考へ下さい、で若し福澤桃介の計畫した事業に、あなたのお名前を連ねることが、或は御迷惑かも知れませんが、株式名義は私にして置く事にならうと思ひます」

その日は、要談を終へてから、二三の雑談をして辭した。



希望通りに

久彌男一個の意見だけなら、必度承知をしてくれるだらうが、豊川良平氏や莊田平五郎氏の、三菱の大番頭に相談すれば、この頼みは不調になるかも知れない、別れてからもさういふ不安は去らなかつた。

『駄目なら駄目で仕方がない』

といふやうな、半ば諦めてゐたまま、新年を迎へた。四十二年一月十七日の午後、岩崎男から返事をす

るから来て貰ひたいと、電話があつた。

『話は成功したな』

電話を切つた時、直ぐにかういふ豫感があつた。そして車を走らせて行つた。

直感は誤りがなく、應接室に對座すると共に、

『この間のお話は、お引受けする事にしました。しかし株は必らずしも、あなたと半分づつと、定め

ることは出来ないが、まあ大體さういふきめで、差支はありません』

といふわけで、相談は希望通りに纏つたのである。かう望みの叶つた時に、桃介と雖も、大金持ちの友人を持つた有難味と、幸福なことを泌々感じたであらう。そして恐らく、この快諾してくれた岩崎

男の一言を聞いて、吻としたであらう。

今日の福澤桃介が、實業界の巨頭となり、電氣王國の霸權を掌握するに至つた振り出しの第一歩に

は、背後に岩崎男といふ、力強い援助者があつたからである。福澤その人にも、事業運と非凡な手腕

とは、備はつてゐるには違ひないが、金力の應援ぐらゐるすべての事業が成功上に、力になるものはな

いのだから。

さういふ工合で、資本金六十萬圓、株は一萬二千株で、計畫通りに福博電軌鐵道は創立される運び

になつた。岩崎男は主唱者の福澤氏と同数の二千株を引受けたので、世間の信用はすつかり高まり、

人氣は忽ち集注されて、残りの株は日ならずして満株といふ盛況であつた。

工事は約半年ばかりで完成し、電車は開通の段取りとなつたところへ、見越して工事を急いだ博多

の博覽會が開かれ、電車は満員といふ、豫想以上の成績を挙げたので、創業と共に株は暴騰するとい

ふ幸運は招かずとも、座ながらにして恵まれるのであつた。

福博電軌の經營は、かうした順調をもつて、利益を擧げて行つた、地方に於ける電氣事業の有望を

確信する基礎を作つたところへ、たまく經營困難に陥つてゐた、豊橋電氣會社の株を、殆ど一人で

引受けて、これが建て直しに着手した。後年名古屋を中心にして、電氣事業の統一を企てる、踏み出

しの第一歩は、この豊橋電氣の事實上の買収に始まつたといつてよからう。



續いて名古屋電燈會社の株を、かなり澤山持つことになった。この時にも岩崎久彌男を説いて、同數だけを引受けて貰つたのである。そして後には常務取締役として、會社の經營狀態を改善しつゝあつたところへ、名古屋市長を辭職して社長に就任した加藤重三郎氏が、市長時代に關係してゐた遊廓移轉問題の疑獄事件に連坐してゐたため引退した後を襲つて、社長の椅子に就いた。それが今の一億四千四百萬圓の膨大な資本金をもつて、關西唯一の大電燈會社の前身であつたのである。

福澤桃介氏が社長に就任したのは、明治四十三年であつたが、その當時ですら、五百二十五萬圓の資本金で、決して規模は小さいものではなかつた。

この名古屋電燈の株を買ふについては、しきりに彼れに勧めた人があつた、それは友人關係の間である矢田績（當時三井銀行名古屋支店長）氏と、も一人は名古屋の石炭問屋の下出民義氏とで、この二人がしきりに有利を説いて勧めたのであつた。

最も有利で確實と信じて、福博電軌を創立した程だから、電氣事業に投資した彼れだ、割の安い名古屋電燈株の賣物を、賣はずにゐる筈がなかつた。然かも恰度、四十年十月に、從來百二十五萬圓の資本金であつた會社が、一躍五百二十五萬圓に大増資を決定したため、株数は當然増加し、それと共に配當額の低下を見越して、二百圓臺にあつた株が、俄然六十圓臺に暴落してしまつた時だ。

しかもその暴落は、増資に伴ふ一時的の現象に過ぎぬ、長良川に四二キロの水力發電所を二事申で

あつたから、これが完成の曉には、石炭を費す火力電氣が、天與の水力をもつて發電され、優に二割以上の配當は確實であると矢田績氏の説であつた。

好機逸すべからざるの秋である。これ程有利な濡手で粟の諺を、實際に見る事の出来さうな儲け口を、手を懐にしてゐられるものではなかつた。といつてこの株を買ひ集めて、大株主の位置によつて會社の實權を握るといふ野心はなかつた。たゞ氣長に買ひ集めてゐるうちに、知らず識す一萬五六千の株が手に入つた。

かうして彼れは、何時の間にか一番の大株主となつてゐたのであつた。すると會社から、取締役に就任して貰ひたいと、しきりに交渉が来るやうになつた。最初からさういふ野心があつて、株を手に入れたわけではなかつたが、會社側から頻りに頼んで來るので、與へられた取締役の地位に就く事になると、間もなく常務に推薦された。しかしその頃は東京に居住してゐた關係上、その常務取締役は、せいぐ十日に一度ぐらゐしか社に顔を出さなかつたのである。

熟柿頭上落つ

トン／＼拍子に芽を吹いて行つた、福澤桃介氏の幸運は、實に華々しいそして羨ましいものであつた。こゝまでに金を儲けて、實業界に地歩を占めるには、並々ならぬ努力をしてゐる事は、見のがす



ことは出来ぬ。  
 常務取締に就任して後、名古屋電燈の競争會社が創立された。それは名古屋商業會議所會頭の奥田正香、兼松麿などの、中京に於ける財界有力者が發起人であつた。社名を名古屋電力會社と稱し、木曾川流域筋の八百津に水力發電所を建設し、すべての組織を大規模に計畫して、營業を開始したのである。

ところが時は恰も、日露戦役後の反動で、財界は著しく沈滞期にあつたがため、豫期した如き成績を擧げることが出来なかつた。むしろ缺損續きで、そのまゝでは成立つ見込みさへ覺束ない状態に陥つたのである。これには重役も株主も、實に意外な結果を落膽したであらうが、既に信用と基礎を充分に固めた名古屋電燈に對峙する目的は、よしんば世間の景氣が好況であつても、容易なことでは無いのだ。

それが疲れきつた不況の財界であつて見れば、意の如くにならないのは、止むを得ないことである。一時的の困難を忍べば、競争が出来る見込みの立ないのを、意地を張つて持ち堪へてゐるとすれば、競争までに至らずして、會社が傾く運命に陥るに定まつてゐるのだから、さうならぬうちに、當然起るのは合併問題である。

電力會社は、遂に電燈會社に合併を交渉した。しかし無論、重役にも株主にも、この合併に反對

する者が、かなり多かつた。桃介氏は強硬な反對派の間を奔走して、極力説得に努めた結果、やうやく問題は纏まり、四十三年の十月に、合併調印といふ解決を見るに至つた。

これまでは頗る順調だつた。追風に帆のやうな工合で、營業成績も至極無難であつたが、俄然起つたのは、名古屋遊廓移轉の疑獄事件である。これは電燈會社として、關係はなかつたが、社長の加藤重三郎氏が、名古屋市長在職中のことであり、その上、商業會議所會頭で合併後に名電常務に就任してゐた奥田正香、同じ常務の兼松麿の二氏が、疑獄に連坐してゐたため、事件が擴大すると共に、收容されてしまつたのである。

社長と常務二名までが、検事局に召喚されて、歸宅を許されなかつたので、會社の狼狽は一通りではない、社員は徒らに不安に襲はれて、仕事も碌々手つかぬ状態であつたところに、工事中であつた長良川水力の發電所が完成し、それにつゞいて、合併前の名古屋電力の着工した木曾川筋の八百津の發電所も竣工した。しかも最初の水力發電所の工事であつた爲、工費は計上した豫算の倍額も費してゐる上、いよく竣工すると共に、兩發電所の送電を一時に受けて、電力は供給しきれぬ程豊富となり、剩餘電力の始末に窮する有様であつた。

かて、加へて社長と常務の首脳部が、同時に三名まで收容されてしまつたので、會社の信用は全く失墜し、株は下る一方であり、それに伴つて配當は減つた。



會社の浮沈に關するこの一大受難に直面したのだから、新社長としての福澤桃介氏の立場は、實に内憂と外患とを、一身に引受けたのである。

株主に配當する十五萬圓の出所がない、そして其の金の苦面しようがない。若しこのまゝで押しに行けば、會社の信用は全く零である。株主に配當の出来ない會社は、到底永續する筈がないので、社長就任匆々、直ぐに苦しい金の遣繰をしなければならなかつた彼れは、何うせ算段するのならば、全部の借金をこの場合残らず返せるだけ、一ヶ所で纏めて借りる計畫を立てた。

とさう思ひ立つた彼れは、英國で外債を募らうと企て、發表するまでの段取りとなつて、これは遂に失敗に終つてしまつたが、結局無くてならぬ金なので、丁酉銀行から四百萬圓を金策することが出来て、漸く困窮の内面を暴露せず済んだが、實際この時代の彼れが、會社の挽回に盡した、努力の功績は、永久に没する事が出来ないのである。

### 木曾川水力の大事業

水量豊富な木曾川に、水力電氣發電所を建設して、大量の電力を得ようと着眼したのは、既に長良川の發電所で好結果を挙げたからであるが、その長良川だけでは、到底大量の發電は不可能で、それも單に名古屋を中心だけの供給ならば、それだけで充分だつたが、彼れは工業都市の大阪に豊富な電

力を供給する計畫で、帝室林野局に向つて、水利權の許可の申請をすることになつた。この運動には現在の大同電力社長増田次郎氏が、専らその任に當つて、計畫通りに認可を得たのであつた。と共に大阪送電案を作成し、遞信省に認可申請を提出したのであつた。

しかしこの事業には、財界著名の有力者が、加はつてゐないといふやうな理由で、容易に認可の指令が下らなかつた。

再三再四自身で、時の遞信局長棟居喜久馬氏を訪問して、認可を促したが、依然當局の態度は財界方面の有力者のみに重きを置いて、認可の指令を交附してくれないのであつた。そして年月は過ぎ去つたのである。

すると突發したのが歐洲戦争で、まづ石炭が俄かに暴騰し、ついで諸工業は恐ろしい勢ひで、勃興して來た。大阪は忽ち電力の缺乏を告げるに至つた。かういふ状態になつて、當然起るのは水力電氣である。機到れりとはばかり新らしく水利權を得た木曾川の賤母發電所の建設に着手したのは、この好機に乗じてあつた。

そして工事完成と共に、一萬二千キロの電力を、この賤母から送電することを得た。新しい水力電氣の發電所が竣工すると共に大阪送電の事業を、名古屋電燈から分離したのは、名古屋市との間に、名電が報償契約を結んでゐたため、一切の事が拘束を受け、意のままに活動する事が出来ないといふ



極めて不自由な立場だったからである。

どうしても會社を分離して、獨立したものとしなければ、不都合な場合が多かつた。そこで大正七年九月に、資本金一千八百六十萬圓の、木曾電氣製鐵會社といふ新會社を組織した。これはその名の如く、大阪送電事業の副業として、電氣製鐵を計畫したによつて、あつたが、歐洲戦争が終熄すると鐵の値段は、暴落してしまつたので、實現には至らずにしまつた。そして社名も木曾電氣興業株式會社と改稱するに至つたのであつた。

其の後に至つて、岡崎邦輔氏の社長であつた京阪電鐵と共同で、三千萬圓の資本金を投じて、大阪送電會社を創立したものの、大正九年の恐慌來に、政府保證の救済金を興業銀行から一千万圓借出す窮境に陥つたが、しかしそれによつて巧みに危機を脱したやうな有様であつた。

非常な難場を常に手際よく切り抜けて、會社の内情を世間一般に知られずに、遺練つて來た彼れも大正九年の財界恐慌に受けた痛手が、癒えないでゐるところへ、木曾電氣と大阪送電と日本電力の三社が合併して成立した大同電力は、十萬キロの電力を大阪に送つたが、豫期に反して漸く三四萬キロしか需要がなかつた。これには少なからず、アテが外れたのであつた。

そこで東京電燈に向つて、電力賣込みの交渉を開始し、更に宇治川電氣と十五萬キロの契約が出来るといふわけで、漸次最初の計畫通りに、事業は着々進んで行つた。都合のよくなる時には、すべて

が順よく運ぶもので、大阪市と交渉中であつた十萬キロの供給契約が、新らしく成立するといふ風で木曾川開發の水力電氣の大事業は、こゝに初めて目的通りの緒に就くに至つたのである。

かうしてまづ一安心してゐると、大正十二年に二つの大災厄に遭遇した。その一つは木曾川の大洪水であつた。今古未曾有といはれる程の大洪水で、工事中の讀書發電所の水路が、洪水によつて崩壊されてしまつたのであつた。工半ばにこの大打撃を受けたので、一時は全滅とまで傳へられた程であつたが、洪水が退くと直ちに被害調査に着手した結果、百萬圓ばかりの損害で、崩壊した水路の復舊工事は完成して、事業は開始さるゝ運びに至つた。

續いて起つたのは九月一日の關東の大震災火災である。これは發電所には、何等の損害も打撃もなかつたけれど、折角東京電燈と賣電契約が成つたばかりで、肝心の東京の大半と横濱全市の如き、東京電燈の配電區域が、焦土に歸してしまつた爲、契約は破棄されはせぬかと、重大なる不安が頻りに起つて來た。

震災當時の慘澹たる光景を目撃した者には、果して一目見渡す限りの焦土と化した帝都東京の、昔日の繁榮と殷賑とは、何年後に復舊するであらうかを、疑はしめ懸念せしめた。根柢から破壊されてしまつた。満目一望避ざるものなく、焼野ヶ原となつたところに、電燈の需要がある筈はない。身をもつて避難した人々が、再び家屋を急造して復歸はしても、一度に全部が戻つては來ない、かう思ふ



とたとへ一時にもしろ電力供給の契約は、當然破棄されるものだ、覺悟をしなければならなかつた。

しかしそれは杞憂に過ぎなく、帝都は勿論横濱市の復興は、實に目ざましいばかりに早かつたので不安に驅られた東京電燈との契約は、そのまゝ繼續されたのである。

福澤桃介氏は、既に財界を引退して、直接の事業には携はつてゐない、一代に積んだ巨富は、恐らく莫大な資産となつてゐるであらう。

株式市場に出入して、相場師として世間から見られてゐた彼れが、幸運を掴んで儲けた金を土臺にして、遂に關西電氣界の王國を築くに至つたのは、彼れ自身としても一代の誇りとする如く、斯界に貢献したその功績は、永久にわが國電氣事業史に、不朽の名を傳へるに足るべきである。

彼れは電氣事業の一番苦心するのは、金策と水利權獲得の二條件だと言つてゐる。水利權は最初のうちこそ全く無競争であつたが、世間で漸く水力電氣の有利を確認するやうになると、競願者が續々と現はれた。

木曾川筋の岐阜縣下大井發電所出願の時には、鈴木商店の金子直吉氏があつた。當時の鈴木商店は、あらゆる事業を、世界を舞臺として、手を擴げてゐたのだから隨つて全國に亘つて、水利權認可

の出願をしてゐた。この大井發電所は、鈴木商店が後から出願したので、策士の金子直吉のすることだ、出願の條件には岐阜縣土岐郡の陶器事業に、極めて安く電力を供給するといふ理由だつた。

縣の三大工業の一つである陶器製造業者に、頗る有利な條件が附してあるので、認可權を持つ岐阜縣知事としては、縣民の福利増進といふ立場から、優先權だけを認めて、認可するわけには行かなかつた。

さういふ工合で、先願者を無視するといふわけにも行かず、知事もこれには相應頭を悩ました問題だつたのである。

けれども翻つて考へると、鈴木商店の事業としては、漸く一千キロか二千キロの消費能力しかない陶器業者に供給するのに、何萬キロといふ發電所を、果して建設するかといふ疑ひがある。どうも眞意が解らなかつた。

果して金子氏は大井水電は、開發しないといふ事になつたので、願書提出までの調査費を出して、鈴木店の願書を撤回して貰つたから、利權は豫定の如くに認可されるに至つた。

この外に福井縣九頭龍川流域の西勝原の水利權獲得の時の如きは、永平寺の貫主日置黙仙師や淺野總一郎氏などの一派の競願者が現はれ、猛烈な競争の結果、遂に認可を得たのや、天龍川の時にも横濱の茂木惣兵衛氏と伊那電鐵とが合同した一派と、山本条太郎、岩原謙三兩氏の合同出願がある



外、その他に五つの競願者があつて、非常な猛烈な争奪が行はれたものであつた。

愛知縣矢作川は、中橋徳五郎氏一派と競争して得た水利権であるが、この時の意氣はむしろ悲壯な覺悟を極めてゐたといふのは、競争者は日本窒素肥料の社長野口遵氏一派が、中橋氏を初め愛知銀行頭取渡邊義郎氏などの、實業界屈指の顔觸で、時の知事島田剛太郎氏に對して、認可を促して來た。

しかし福澤一派の出願は、既に三年も前に願書を提出して置いたのだから、若し願書を却下され、有力者だといふ爲の理由で、野口一派に認可されるやうな事があれば、福澤桃介一代の名折れである。屈辱は忍ぶ事が出来ぬ、その場合には相手を刺して、潔く死なうとまで決心の臍を固めたさうである。

島田知事は公正な官吏だつた。優先権を認めてこれを決裁した爲に、何事も起らずに、矢作川二萬キロの發電所は竣工したのであつた。

水利権の獲得といふ事が、如何に困難であるかは、改めて言ふまでもない。その困難な場面に乗り出して、今日の基礎を築いた彼れも明治大正を通じて、傑出した一個の快人物である。

## 武營の功績



### 誠意の人中野武營

#### 馬鐵救濟の挿話

「働く人間を一番の頭に置いとくことは、非常に危険千萬だ。切れ味が鈍くならねば、人が却つて安心をしないのだから、世の中は妙なものだ」

既に故人となつた中野武營氏が生前中の、一種異つた持論で、かなり永い間をこの持論を押し通して、官界に在る間でも、民間の事業に携はつた時でも、社長や頭取の地位には就かず、副頭取とか副社長の役目を引受けて、活動するといつた人で、主腦者となつて安閑と納まつてはゐられぬ氣象がさういふ持論を主唱するに至つたのであらう。

兎に角非常に謹厳な手堅い性格の持主で、随つてすべてが地味であつた。多くの實業家に見る如き世間に迎合して、賣名の仕事をしようといふやうな、野心は更に無く、たゞ自分の事業を、忠實に育てるために努力をして、生涯を終つた人物である。



だから決して、その生涯は派手ではなかつた。その代り浮薄輕佻な一面がない、晩年東京市長の選舉毎に、屢々候補に擧げられたのも、要するに實力のある眞面目な實業家といふ深い信頼を得た結果に外ならない。

しかし餘りに眞面目が過ぎて、親しみ憎いと、彼れの郷黨讃岐高松あたりでも、一部の人からはれてゐた。が、故郷に於ける人望は、これといつて別に人氣取りをしない彼れの一身に、集まつてゐたことは非常なものであつた。

官尊民卑意識の甚しかつた、明治新政府が出来上つた頃、彼れの太藏省書記官といふ肩書が、どれ程郷黨の青年達の心に、尊まれた羨望であると同時に、えらいものであつたか知れない。それといふのが高松藩は、維新前後のいろ／＼の事情で、明治政府になつてから、疎んぜらるゝ傾きがあつて同じ四國でも、土佐藩の如く官界に地位を得る者がなく、文官としてはたゞ一人、中野武營が奏任書記官となつて、大藏省に出仕してゐたからである。

郷黨に於ける人望は、一身に集まつてゐるのだから、人心を收攬する事に心がけ、中野閥を作つてゐたら、その一生はどんなに華かなものであつたかを、想像するに難くはない。

けれどもたゞ一個の力をもつて、群雄割據する實業界の一方に、重鎮として其の名聲を保つてゐたところに、彼の眞價は光つてゐるのだ。

勘定奉行の家に生れた彼れは、先天的に貨殖の術に通じてゐたとは、世間一般に中野武營を評する言葉である。明治二十三年に第一期衆議院議員選舉には、香川縣第一區から推されて、大多數の得票を得て當選した後は、改選毎に選出されてゐたが、その頃伊勢四日市に本社を有する關西鐵道の社長であつたのを、白石直治に譲つて改進黨のために盡す一方、東京株式取引所の副頭取に選ばれたり、馬車鐵道の業務の整理を頼まれたりして、非常に多忙な生活であつた。

馬車鐵道は事業が甚しく不振で、營業困難に陥つてゐた時代であつたのを、社長の谷元道之、副社長種田誠一の二人から、挽回を懇請されて一肌脱く氣になつたのだが、資本金五十萬圓のうち、二人が五萬圓の株を買潰してゐたので、事實は四十五萬の資本金であつた。それに十萬圓以上の負債があり、横濱の高利貸平沼專藏は、この馬車鐵道の取締役をしてゐながら、會社を抵當に金を貸し付けてゐる關係上、毎月末にはその月の収入を、番頭を本社に寄越して掻き集めて、持つて行つてしまふのだから、これでは如何にしても、會社は立ちゆく筈がない。

後に谷元道之が辭職してから、馬車鐵道の社長となつた牟田口元學と協力して、この内容を挽回するためには、一方ならぬ苦心をした事は、晩年までも回顧談の一つのうちに加へられた程である。

二十四年には、いよく會社の財産差押へといふ騒ぎが起つて、うちちやつて置けば、馬車の運轉が出来なくなるといふ急迫した場合に立到つたので、業務の挽回を懇請されて、引受けた以上、むざ



むざ差押へ處分なぞといふ不面目な醜態は、男の意地としてもさせたくない、まして眞面目な中野武營の氣象として、このドタン場に手を引く筈はなかつた。

八方金策に奔走した揚句、漸く差押へだけは免れ得たけれど、それまでに行詰つてゐる會社で、使用人も切詰めるだけは切詰めて、経費の節減をしてゐたので、時には馭者の仕事までをやつた事があつたといふから、その眞劍は想像がつくであらう。

そんな風だから、報酬といふものは一文も貰はず、誠心誠意友達の事業の爲に、努力を盡して、難關を救つてやつた。馬車鐵經營の蔭には、中野武營の人知れぬ苦心が拂はれてゐるのである。

大藏省書記官から、野に下つて關西鐵道の社長、株式取引所の副頭取、そして衆議院議員といふ經歷を有してゐる彼れが、友達の會社の破綻を救済するためとはいひ乍ら、時には馭者の眞似までしたことは、彼れの厚い友情の一端として、語るべき美談である。

事業屋ではない

半官半民の特別銀行が設立される時に、總裁に就任の内交渉をよく受けたことがある。

「今度何々銀行が出来るのだが、君が最初の總裁となつてはどうだ」

と随分政府要路の大官から、口がかゝつて來たものだ。政府筋から白羽の矢が立つくらゐに手腕と人物とに信用があるのだから、普通の銀行や保險會社でも、頭取とか社長とかに推舉を受けたものである。

しかし彼れは、銀行や保險會社の重役に就任することを、最初から望んでゐなかつたし、また其の二つの事業に携はる事を欲しなかつた。理由は、極めて簡單明瞭であつて、およそ物をするには、柄に合つた事をすべきだといふにある。誰でもこれはよく知つてゐる事だが、多くの人は己惚れのために、兎角にいろ／＼の仕事に手を出すのが常である。

殊に實業家には、それが殆ど一般の共通性で、擔がれると得手不得手に拘らず、何んの事業にでも携はることが通例になつてゐる、調子に乗つたが爲めに、思はぬ失敗を招いた例は、實業界にあつては、決して珍らしい事ではない。

中野武營は常に自己を省ることを忘れない人であつた。極めて細心の注意を物事に拂ふ人であつた。これが中野氏の事業の上に、如何なる効果を齎らしてゐるかは、改めて説くまでもない事だ。

銀行の頭取に推薦された時、自分は器でないと斷る言葉が振つてゐる。

「私は銀行經營は不向な人間だと、自分が堅く信じてゐる。やれば人並には仕事は出来るだらうが、柄にない仕事だと考へるから引受けない、私が銀行を經營するのは、恰度芝居で演ずる「義經千本櫻」の鮎屋の幕で、いがみの權太が不粹な堅縞か何かの着物を着て現はれるやうなもので、權太と



は思はれないぢやないか、私が金を貸すとか回収すると言ふ事業は、恰度堅縞の着付けでいがみの權太が幕に出るやうで、少しも柄に合つてゐない。柄に似合はぬ見當の違つた事は、最初から斷ることが、相互の爲に安全なことだと思ふ」といつて如何に勧められても、決して意志を挫けたことがなかつた。それとも一つは、有利な事業であると確信してゐながら遂に自分の力の及ばぬことを悟つて關係をしなかつたのは工業であつた。

取引所理事長時代

任期一ヶ年の約束で、金子堅太郎氏が株式取引所理事長を、満期になるのを待ちかねて、最初の約束通りに辭職した後を承けて、理事長に推されたのが中野武營であつた。

理事長としての任期は、かなり長い年月を續けて、その在職中幾多の波瀾の渦中に處して、たゞの一度も失敗をした事がなく、名理事長として盛名をほしいままにしたものであつた。

この當時に於ける取引所に、一大勢力を持つてゐたのは、今年の一月二日に、寺院の離れ座敷の佗しい住居で、六十六歳を一期に病死をした、千萬長者の成れの果、渡邊治右衛門であつた。當時の渡邊は既に天下の富豪として、且つ事業家として、實業界の一方に重きをなしてゐたばかりか、日の出の勢で、いろ／＼な事業を經營してゐた、調子に乗つて、渡邊銀行、あかち銀行を創立し、無暗に

手を擴げた事業が、思はしくなく、遂には銀行の破綻から多數の預金者の怨嗟の聲をよそに、永久に復活の途のなくなつたと共に、一代の富豪渡邊治右衛門は、邸宅を始め一切の私財を投げ出し、東京淺草の一寺院に、人目を避けてきのふに變るみぢめな日を暮してゐた。渡邊の晩年の境遇は、餘りに悲惨な歴史であるが、中野武營が東株理事長時代には、取引所の全株の三分の一以上を、渡邊一個人で所有するといふ豪勢振りを示してゐたものである。

だから取引所に對する勢力は、大株主として何人も、一步を譲らなければならなかつた。一割に過ぎなかつた株主配當だつたのが、中野武營が理事長に就任すると、俄かに一躍五割に増配したのは、かねて渡邊の希望してゐたのを、中野が實現したので、信用はその一事だけでも、絶大なものであつた。大株主の渡邊治右衛門から信用された事が、どんなに理事長としての地位を保つ上に、好都合であつたか知れないのであつた。

その大勢力の渡邊治右衛門が、榮華の夢も哀れに、佗しい末路を辿る時、中野武營氏は既にその數年前に物故してゐたが、氏が生きてゐたならば、天下の富豪渡邊氏も、これ程痛ましい運命には陥らなかつたであらう。

中野氏はよく人の言葉を容れる美德があつた。取引所の重役に伊藤幹一といふ人がゐた。この人は文部省の一小吏を勤めてゐたのが、畑ちがひの取引所に就職したので、初めは極く低い地位で雇はれ



てゐたのだつたが、精勵恪勤極めて眞面目に、どのやうな仕事も決して忽緒にしない、責任の強い男であつた爲、漸次に地位を作り取引所の活字引と稱され重寶がられてゐた。

中野氏はその伊藤といふ人の言葉を容れて、事務を處理してゐたことが、失敗のなかつた理由であり、成功したのは、自から相場に手を出さなかつたことで、累代の理事長中では珍らしい方であらう。

彼れの美しい點は、人に意見を吐かせてよく聞き、他の聰明をもつて己の聰明とする包容力に富む事で、取引所では何事も自分が進んで發言するのを控へ、所員自身の所論を腹藏なく發表せしめることに努めたのであつた。

人の頭に立つ者の常に注意しなければならぬのは、自分の意見ばかりを主張して、部下の言を容れぬことで、この位愚なことはないと言つてゐる。

中野武營は、明治二十三年第一期の衆議院議員に當選して以來、明治四十年の總選舉に、東京市から選出されたが、事業家として成功した彼れも、政治家としては大した目ざましい功績はなかつた。

## 嘉兵衛と文七



對外貿易の恩人

對外貿易の發展に努めて、一生を終つた横濱財界の巨頭に大谷嘉兵衛氏がある。彼れは金港に於ける紳商國の代表的地位に在つて、横濱の發展に盡した功績は、かなり大きなもので、生前功勞を嘉みせられて、勳三等を授けられた事によつても、その事績は顯著である。

その多くの事績を語るうちに、最も特筆すべきことは、米國と横濱との間に、太平洋海底直通電信を敷設した事業は、大谷嘉兵衛氏の努力に俟つものが多い。横濱が開港場として、やうやく繁華の緒に就かうとする時、其處を目ざして何か儲け口をと集まつた者は、非常なものであつた。そして横濱を舞臺にして、巨富の財を築き、後年實業界に飛躍した人物もまた少くはないのであつた。

曰く雨宮敬次郎、平沼專藏、淺野總一郎、若尾逸平兄弟、かうやつてその名を擧げて行くことは、繁に堪へぬばかりに多い。

大谷嘉兵衛氏もその一人である。故郷の和歌山を出て横濱に志したのは、彼れが漸く十九歳の青年期であつた。



嚴格にして極めて慈悲心に富む兩親に育てられた彼れは、商才よりはむしろ高德に富む人物として一般の財界から崇敬され、長者の風貌を備へてゐた。随つてすべての事業に當つても、充分に周到な注意を拂つてかゝるから、決して失敗をした例がない。これが彼れの人物を最も有力に物語つてゐる。

對外貿易のために、歐米各國や支那の商工業界を視察したり、横濱商業會議所を代表して、米國ヒラデルヒヤに開催された萬國商業家大會に出席して、わが國の商工業の爲に氣を吐き、特種の事業を紹介した功は、没すべからざるものがあつた。

大谷氏が如何に、温厚の長者であつたかは、少年時代に享けた父母の訓育によつて、天性となつて培はれてゐた。その兩親が貧しい者に向つて慈悲善根を施した徳は、實に廣大無邊なもので、さういつた親の感化は、年を取つての後といへども、少しも變るところなく、遺訓を堅く遵守してゐたのである。かういふ人徳が自然と其の人格となつて現はれ、すべての人々から好感をもつて迎へられて、敵といふものがなかつたのである。

少年時代の逸話に、こんな事がある。それは彼れが十一歳の時、自宅の裏庭で弓の稽古をしてゐるうち、雀を誤つて傷つけた。日頃から兩親に戒められてゐる無益な殺生を、たとへ過失ではあつたが犯したので、非常に申譯のないことをしたと、正直一途に思ひ込んだ彼れは、誰も見えてゐたわけでもないのに、傷ついた雀を唐辛水で洗つて、手厚い糸摺を加へ傷の癒えるまで、餌を與へて癒はつた上飛べるやうになつて後に、放つてやつた事があると、晩年に至つて少年時代を顧みる毎に、必らず思ひ出す話だと人にも語つた事である。

で、横濱に出て來て以來、毎年一度は故郷に父母を訪ねるのが常であつた。その頃は東海道を往復共に徒歩で、決して樂な旅行ではなかつた。随つて長い道中には、いろいろと難儀な事があつたけれど、兩親の在世中は、どんなに多忙であつても、必らず歸省することを怠つた事がない。そして歿した後にも、生前の通りに墓參を缺かさない程、親に仕へる孝心が深かつた人である。

彼れが若い者を戒めるに「短氣は損氣」といふ言葉を繰り返すのが常だ。古い諺をそのままに引用して、人に説く訓戒には、彼れ自身が壯年の時、郷里に歸省の途中、箱根山中で悪い駕籠舁に着き纏はれた時に、しみじみと體驗した事を、事ある毎に思ひ浮べるのであつた。

その話といふのは、二十二歳の血氣盛りの秋、故郷の和歌山に兩親を訪ねて横濱に歸る途中、二人の下男を供に連れて、箱根の中心にかゝつた時、番所を越えて暫らく行くと、道端に駕籠を置いて煙草を吸つてゐた人相の悪い二人の轎舁が、旅人の通るのを待ち受けてゐた。そして駕籠の悪勸めを始めた。

明治初年廢刀令の出ない頃だつたので、道中は帶刀をして嚴めしい姿をしてゐた。無論劍術は優れ



た腕を持つてゐた彼れは、悪く勸めて止まない雲助を、軽く斷つて行き過ぎようとする、行手に立塞つて歩かせなかつた。

血氣の彼れは流石に憤りを感じた。思はず大喝、無禮を叱咤した。駕籠昇は、相手の怒るのを待つてゐたらしく、矢庭に息杖を振つて、理不盡に打ち込んで来た。右に左に杖を避けてゐたが、急迫したこの場合、帯刀はしてゐる腕は出来るのだから、抜いて二人を斬ることは、何んでもない事だ。しかし殺生禁の觀念は忘れることは出来ないであつた。

斬つてはならぬ。と堅く心に誓つた彼れは、振り込んで来る息杖を搔いくつて、當身を喰はして二人が倒れた際に、其のまま先を急いで行くと、暫らくたつて後から、しきりに呼ぶ者がある。振り返るとさつきの駕籠昇が、追ひかけて来たのである。

今の復讐に來たに相違ない、性懲のない雲助共を、この上許しては彼れ等の爲に往來の者がどんなに難儀をするか知れない。と覺悟を定めて雲助の近づくのを待つた。

「年は若い、お前さんの腕と度胸には、全く驚きました。どうか勘辨して下さい」

復讐と思ひきや、打つて變つた神妙な態度に、聊か力抜けの體であつたが、さう素直に出られて事を好まぬ彼は、自分の爲にも駕籠昇のためにも、無事であつたのを心から満足に感じたのである。この時、血氣に任せて、駕籠屋の無禮を憤り、斬つてしまつたら、自分は果して今日、この境遇に

ゐられたかは疑問である。短氣を堪へた爲めに、二人の尊い命を、奪ふやうな無殘な兇行を犯さずに済んだのだ。

### 蠶絲界の功勞者

蠶絲界の功勞者として、一世に盛名を高からしめた横濱實業界の巨頭、渡邊文七氏は昭和五年の元旦の朝、蠶絲俱樂部に於ける名刺交換會の席上で、蠶絲貿易商同業組合長として來會者に對し、新年の挨拶を終つて後、壇上を靜かに退く時、突然腦溢血を起して卒倒し、そのまゝ人事不省に陥つてしまつた。

あらゆる手當を加へた效なく、遂に九日、六十歳を一期にして、永久に覺めぬ眠りについたので、わが國蠶絲界のためには、惜しむべき事であると共に、偉大な損失である。

明治四年八月、甲州谷村在の寶村に生れた彼れは、やはり物事に根強い甲州人として、立派に成功する素性を備へてゐたのであつた。

叔父に當る先代の渡邊文七が、彼の將來を見抜いて、養子としたのは、流石に誤りのないことだつた。明治二十九年に、先代の死後に二代目文七を襲名すると共に、遺業の生絲問屋と横濱取引所仲買をそのまゝ繼承したが、渡邊の店は彼れが經營するに及んで、次第にその業務を擴張し、斯界の有力と



して認められるやうになつた。

非凡な手腕を持つ彼れは、間もなく生絲仲買委員長、蠶絲貿易商同業組合長などの、責任ある重職に推され、續いて三十二年には市會議員に選出されてゐる。非常に繁忙な彼が、蠶絲に市政に盡した功績は、没すべからざるものがあるが、殆ど身命を賭したのは、絲價維持の爲に活躍したことである。

明治三十四年以來、三十年の長い間、横濱商業會議所議員として、蠶絲問題に對しては常に第一線に立つて、寢食を忘れるまでに奔走し努力した熱誠は、渡邊文七氏が斯界の大人として、崇敬せらるゝ點である。彼れによつて、わが國の蠶絲貿易は改良され、醫價を擧げたことは、言をまたない。そして横濱の實業界の爲に、常に意を注ぎ貢献した功も甚大なるものがあつた。

横濱土地、横濱火災、太平運輸、江東貿易等の諸會社に、重役として名を連ねてゐる外、横濱取引所相談役、横濱實業組合聯合會長といふやうに、功績を語る事業は、六十年の生涯を通じて非常に多かつた。

御大典に際して、蠶絲界に盡した多年の功績により、綠綬褒章を賜はるの光榮に浴したが、更に死後に至つて、生前の功勞に對し正六位に叙せられてゐるのである。

一生を蠶絲界に盡した渡邊文七氏は、其の最後の日が、蠶絲俱樂部の一室であつたことは、むしろ奇蹟を物語ると共に、氏もそれを満身に感じながら、靜かに瞑目したことであらう。

# 超人新兵衛



丁稚の前田鹿藏

つひ先頃、政友會には不利益ないろ／＼な、疑獄事件が、後から／＼と續けざまに摘發されてゐる眞最中、持病の心臟狹窄症で急死を遂げた前内閣總理大臣の田中義一男が、現役陸軍大將軍事參議官の顯職を、豫備役編人の請願をし、政友會總裁になるについて、三百萬圓とか五百萬圓とかの持參金を、右から左へ無雜作に融通したといふ神戸の巨商乾新兵衛は、金儲けにかけては實に特種の手腕と技能とを持つてゐる男である。

やがては一億に達すると言はれてゐる富を築き上げた彼れも、五十年前は兵庫湊町の酒と味淋の醸造業、乾新兵衛家の一丁稚に過ぎなかつたのだと言つたら、誰だつて驚くだらう。

と共にその酒屋の丁稚小僧がどうして、それ程の貯財をしたかと、必らず不思議に思はずにはゐられまい。

乾家の醸造する酒は、別に一般には名の響いたといふ程のものはなかつたが、それでも兵庫は無論のこと、關西から中國あたりまで荷を出し、相當に醸造の石高もあり、問屋仲間の評判も受けのい



方であつた。

其の家に前田鹿藏といふ十三になる丁稚が年期奉公に住み込んだ。鹿藏の父親の甚兵衛は、乾の主人新兵衛とはかねて知り合ひの仲だつたので、丁稚といつても幾分か他の朋輩たちよりは、待遇もいくらか違つてゐたものゝ、それにしてもやつぱり奉公は奉公だから、樽を洗つたり米を運んだり、それ相應に力強い仕事に追ひ使はれてゐたものだ。

もつともこの鹿藏は、年に似合はず力が強かつたので、力業は少しも苦にはしてゐなかつた。それだけに亂暴も烈しく、酒倉に働く男たちと、相撲をよく取つたが、子供と侮つてかゝる力量自慢の仲仕連も、鹿藏のために不覺を取る事があつた。

その強力が酒屋の丁稚には、頗る重寶がられ、なか／＼役に立つ者と認められたので、目をかけられるやうになると自然と増長して來た。それがために朋輩達の氣受けは悪くなつたが、主人には喜ばれて、

『鹿藏は中々役に立つ奴だから、末の見込みはあれが一番だ』

と主人一家ではかういつて、その將來を囑目してゐた。その丁稚がやがては乾家に入夫となつて、三代目の新兵衛を相續する男だとは思はなかつたであらう、縁といふものは不可思議なものである。鹿藏は役に立つので目をかけられて、大切にされてゐた乾家には二年ばかり奉公してゐたが、何を

不足に思つたものか、暇を取つて出る事になつた。

『商賣に迷つては駄目だぞ、折角今まで心抱して來たのに、これからまた他の商賣に身を入れては、また新らしく覺え込みにやならん。それはつまらんことだらう、我慢して今まで通り、私の店にゐた方がお前のためだと思ふ』

と言つてその不心得を、懇々と説き聞かせたが、何を一途に思ひ込んだものか、折角主人の情深い言葉も、親切な番頭の忠言も聞かずに、とう／＼店を出てしまつた。

そしていろいろな店に一年二年と住み込んだが、その當時に巨商として天下に名を馳せてゐた小野組や、四國中國筋の大問屋島田組などにも雇はれた事があつた。

こんな風に少しも尻の落着かない奉公を、其處に一年こゝに半年と轉々と渡り歩いて、十年の月日を過して一人前の男となつた鹿藏が、何を思つたかひよつこりと、舊主人の乾の店に戻つて來た。

乾家は十年前の丁稚の頃から見ると、身上も數倍大きくなり隨つて稼業も益々繁昌してゐた上、商賣は二代目の若主人の新兵衛が店を切り廻して、先代は樂隠居で孫を相手に、何の苦勞のない生活を續けてゐたのであつた。

一體乾新兵衛には一人の實子もなかつた。そこで明治五年に同じ兵庫の磯出の資産家鹽津庄右衛門の長女およそ、といふのを養女に貰ひ、これに新太郎といふ婿を迎へ、店の事は一切を譲つて隠居を



したのである。

夫婦養子は養父母によく仕へた。店の方も至極繁昌するので、乾家には何一つ不足に思ふところがなかつた。この調子が永久に續けば人生これ程幸運な事はない。大吉は凶にかへる、養子新太郎の二代目新兵衛が、不圖したかりそめの病氣が因で、この世を去つたのであつた。

二十を幾つも越えぬ若い身が、夫に先立たれた悲しみは思ひやるだに痛ましいことだ。妻のおよそは、生れて間もないお榮といふ娘を抱いて、餘りに薄い夫婦の縁を泣き悲しんだ。

夫に死なれて生活に事缺ぬかの、不幸中のせめてもの慰めであつた。しかし亡き人の面影を、そのまゝに生寫しの幼いお榮を見るにつけ、夫戀しさに腸を断たれる思ひで、涙のかわく暇はなかつた。

乾家のさうした大きな不幸を知つて知らずにか、悲しみも漸く薄らいだ頃飄然として舊主人の許へ尋ねて來たのが、十年前に丁稚として奉公してゐた鹿藏である。

彼は見ちがへる程の男となつてゐた。如何にも如才ない氣の利いたところは、流石に通じ世間を渡つて苦勞をしたゞけの事が見えて頼母しい氣がした。

鹿藏は番頭格で、店のために忠勤をぬきんで、全く一生懸命に働いた。その誠心誠意を見込まれて、およその入夫となつて乾三代目の新兵衛を名乗るに至つた。

そのおよそは、大正十年頃に、病死を遂げて現在の夫人すゞ子は後添ひである。

築き上げた一億圓

先代の新兵衛が作り上げた財産は、どう少なく見積つても四五十萬圓はたしかだといはれてゐた。其の財産を二代目新兵衛の若い未亡人およその入夫となつて、そつくりと相續した鹿藏は、世の中にこんな幸運兒が二人とあらうか。

話を聞く者は、何れも其の果報を羨んだくらゐである。

「全く運のいゝ男だ、何んといふ働きたらう。あれだけの財産を、そつくりと譲られたんだから、運がよすぎて果報負けがするぜ」

嫉妬まじりであらうが、いろいろの噂が立てられたものであつた。

しかし鹿藏の三代目新兵衛は、世間の思惑や噂なぞを氣にかけるやうな男ではなかつた。そして果報負けどころか、金運を身につけて生れて來た彼れは、相續した四五十萬圓の財産を資金に、酒釀造業の傍ら新らしく初めた金融業で、忽ちの間にメキメキと資産を殖やしていつた。

利殖は天性備はつてゐたと見えて、金貸しを喰ふ程の連中でも、彼れにだけは齒が立たなかつた程である。だから決して損をした事がない。



『他の事業だつたら、見込が外れて欠損する事はあつても、金融業では貸しを踏み倒されるなんて、そんな馬鹿らしいことは、たゞの一度もない』  
 と空うそぶいてゐる程、彼れには卵の毛で突いた際もなかつたのである。  
 この調子で高い利子で金を貸してゐるのだから、財産は殖える一方だ。その貸しぶりがいゝ代りに取り立ても待て暫しがなく、期限が来れば契約通りを履行して行くことも、實に鮮かなものであつた。

金融業でしこたま儲けた金は、何んでも素的もない額だつた。實は始末に困る程であつたらう。時計のセコンドと共に、何がしかづつ資産が殖えて行く彼れは、日露の風雲が漸次急を告げて来た明治三十五年頃、英國で建造した四千トンの汽船を買つた。

『乾は汽船なぞを買つて、何をやる氣だらう、しかも大變なボロ船だ。あんなものが何の役に立つだらう。流石の男もあの船ぢや、金をうつちやつたな』  
 人々は眼を瞠つて呆れ返つた。

全く乾新兵衛ともあらう者が、何を見込んで汽船を買ひ込んだのだらう。それが既に世間の人の意表に出る事であつたのに、しかもその汽船が廢朽に等しいものだつたから尙更驚く。  
 『つまり欺されたも同然で、必度損をする』

ひそかに乾の無謀を笑つてゐた。さうした噂が新兵衛の耳に入らぬ事はない。  
 人に言はれるまでもなく、ボロ船は承知の上で買ひ取つたのだから、直ぐに造船所に頼んで、すっかり修理した。そして乾坤丸と命名したが、もともと古い汽船だ。修理をしても遠洋に乗り出す事は覺束ないので、近海航行の貨物船として就役してゐた。

餘り大した利益もなく、世間の人の言つた通り、この乾坤丸は失敗かと思はれたところへ、突然この船のために意外の大儲をする機會が来た。

それは日露戦争であつた。イザ開戦となると、船腹は不足を生じて、汽船は何れも引つ張り合ひの好況である。彼れはこの機を何うして逸しよう。早速乾坤丸を香港航路に向ける計畫をすつかり立て積荷契約をしてしまつた。

しかし何分にもボロ船で、船長以下の乗組はこんな汽船で香港まで、無事に航海は覺束ない、船と運命を共にして海中に葬られるのは眞つ平とあつて、月給も思ひ切つて高級を支給しよう、航海手當も充分に給與するから是非共と、たつての懇請を拒けて、何んといつても下船を主張して應じなかつた。

荷主との契約はすつかり整つてゐるし、愚圖々々してゐれば違約金を出さなければならぬので、流石の新兵衛さんも、大まごつきであつた。そして一生懸命になつて、乾坤丸の船長を探した。



冒險を好んで殊更に危ない綱を渡りたがる人間は、何處にもあるものだ。一生懸命になつて尋ねた甲斐あつて、漸く船長を見つけ出し、それらの乗組も定まつて、いよく貨物を満載した乾坤丸は日本の領海を離れて、香港に乗り出したのである。

この廢船に荷を積み込んで、領海の外まで航海した船長の腕も優れたものには相違ないが、最初に計畫をたてた船の持主の新兵衛さんの度胸も素晴らしいものだつた。

しかもその乾坤丸で、豫想したよりも以上の大金を儲けたのだから、實に驚くべきではないか。

「船は儲かる」

とすつかり味を占めた。これがそも／＼乾新兵衛が、汽船會社を創立する發端であつた。

日露戦争から明治四十年頃までに船で儲けた金は、ざつと内輪につもつて見ても、一千萬圓だらうと言はれ、本人もそれを認めてゐる。彼が今日の一億に近い財産を築くには、船舶業が大變な力となつてゐる事は、

「船では全くかなりに儲けた」

と言つてゐるくらゐだから、これには間違ひはないと見ていゝだらう。

その持ち船といふ持ち船が、殆ど古いものばかりで、決して新造船のないのが乾汽船の特長になつてゐる。それといふのが古いものを出来るだけ安く買ひ取る方針であるから、金儲けにかけては何處

までも隙がない。

それ以來乾汽船會社の所有船は、年々に多くなつて行つた。そして相當の利を擧げてゐるうちに、例の歐洲の戦亂である。

從來からの船舶會社は、どれもこれも黄金時代であつた。その間に飛出した山下、山本、内田、勝田、成瀬などの船成金の簇出、世間の好況も馬鹿氣な程だつたが、殊に海運界に惠まれた景氣は特別だつた。

この時代に乾は七隻、總噸數三萬五千噸、しかも餘りに立派でない中古船で、稼ぎも稼いだもの五千萬圓といふ巨額の黄金が、懐に入つたのは、實にすさまじいではないか。

『もう船で儲かるのも大抵こんなものだらう』

早くも見切りをつけたのは、大正七年のことであつたが、まだその頃は多くの船成金共が、儲かる儲かるで有頂天になつて、榮華に誇つてゐる最中であつた。

そして新兵衛は、自分は手を引いてしまつて、もとの金融業に立戻り、利息稼ぎを専門にやり初めた。しかも彼れは一萬や二萬の小額の融通をするのではないから、利息といつても、それこそ普通世間でいはれる金持ちが、後生大切に銀行に定期預金をしてゐる財産程度が、一つの貸金の利息である。資産はドン／＼肥つて行く筈だ。



『一流の大銀行でも、澤山の人から預つた金で金融をするので、貸金の回収や貸出の引締めは、どうしたつて世間の金融事情や事業界の状況につれるため、個人の意志や感情を挟むわけには行かぬから、借りる人の方からいふと、貸りた金をもう一年待つて貰ふ事が出来れば、その金を借りてる人の事業は、充分に見込みが立つ、しかし銀行ではそれを待つてやることは出来ない、それが個人が融通してゐる貸金なら、人情をかけてやることは自由だ。借手が正直な人でその事業が確實であれば、融通額をふやすことも期限を延ばす事も出来るのだから、銀行よりも利息は高いが、さういふ特典がある』

だからつまり金の融通は個人の方が、都合がよいと言ふ事になる。何故高歩の利息を取るかに就いての説明はかうだ。

調査の不行届きや見込ちがひの爲に、思はぬ目にあふことは、高利貸も神でない以上、必らず味はふ事である。滅多にない貸倒れを警戒するために、利子を高くしておいて、損失の場合に補ふのだといふから、成程どつちに轉んでも金貸しは損をしないやうに出来てゐる。

そして高利の方が貸倒れが少ないとは、永い經驗を持つ新兵衛老の説で、これは高い利息の金だと利子に追はれる苦痛と、如何にも割が悪いから、勢ひ利子の安い借金を後廻しにして置いて、高い方を先に済ませて、苦を脱れようと努める、かういふ心理を巧く利用してゐるのだから、まづどうして

も間違ひつこはないのである。

日本の三大高利貸として、横濱の平沼専藏、大阪の木村權右衛門、それに乾新兵衛が代表者と云はれてゐるが、平沼も木村も既に亡くなつた今日、乾新兵衛一人が、古稀に近い老齡をもつて、壯者を凌ぐ元氣で、金儲けに餘念なく、年々歳々その産を肥やして、自身の財がどの位あるのやら、多過ぎ

て判然としないといふ程、兎も角も兵庫縣下では、男爵住友吉左衛門に次いで富豪である。昭和三年度の所得年額百二十七萬圓、所得税額三十萬二千圓で、兵庫縣多額納税者の乾新兵衛も、年十三で造り酒屋に丁稚奉公に出された男である。壯年五六十萬圓の巨商二代目乾新兵衛の未亡人およその入夫となつた事が、金の蔓を掴み當てた幸運には相違ないが、現在の新兵衛老の築き上げた富に比べては、たとへ明治二十年頃で今とは金の値打ちが違つたにせよ、五六十萬圓の財はものゝ數ではないのである。

彼れの擁する財産は、正に一億圓に達してゐるといふ噂は、決して嘘ではないらしい。

親譲りの財産は、えて失ひ易いものだが、わが乾家三代の新兵衛老は、五六十萬を土臺にして、五十年足らずの間に、一億萬圓とした、これから先き、壽命の續く限り貨殖の爲にいそしみ勵む結果は何處まで殖えて行くか、實際計り知ることが出来なからう。

蓄財の天稟は死んだ安田善次郎翁と伯仲の間にあると言ひ得る。



働  
け  
甚  
與  
茂



寺田甚與茂

社長さんで通る寺田

泉州岸和田が市制を布いて六年になる。市の人口三萬人のうち五千人が、寺田甚與茂といふ人の事業によつて、生活をしてゐると言はれてゐるのだから、寺田は封建時代の領主よりも遙に優れてゐる。岸和田に於ける勢力は素晴らしいものである事は、其のたゞ社長さんで通つてゐる程でも明瞭である。

人口三萬餘だから、小さな都會には相違ないが、兎も角も市である。そこで社長さんと言へば、寺田とも甚與茂とも呼ばずして、直ぐに解るのは、大した名望家でなければならぬ。

一體寺田甚與茂といふ人は、何をしてゐるのか、岸和田市内の附近では有名過ぎる程、有名だけでも、東京では一向に名さへ知らずにゐる者が多いやうだ。

まづ寺田の岸和田と言はれる彼が、明治十年第五十一國立銀行創立事業に努力をした二十四歳を振り出しに、七十五歳の今日まで岸和田を中心にして關係した會社や銀行の数は、殆ど枚擧するにさへ繁に堪へぬくらゐる澤山ある。



現在でも和泉銀行や和泉貯蓄銀行の頭取、岸和田紡績會社社長、岸和田煉瓦綿業會社社長、大日本除蟲粉會社社長といふのを始めとして、一家一門の經營會社を一々擧げたら、それこそたいしたもので、成程五千人ぐらゐの使用人はあると信ぜられる。

彼の家柄は、代々岸和田の郷士として、勢力を保つて來たが、明治維新の際には家運がすつかり傾いてゐた上、三歳の時には生みの父親に死別したので、實の父の顔は全く知らぬといふ不幸な身の上であつた。

母親のお徳は、三つになる甚與茂を残されて、亭主に先立たれたので、豊かでない生活は忽ち母子の身の上を苦しめるやうになつた、そんな風で十一二歳になると、早くも叔父の秦野久兵衛の營む質屋に丁稚にやられた、衰へ切つた家運を挽回したい希望に燃えた少年は、商賣の道を學ぶのに、少しの油断もなく、全く一心不乱であつた。

後年産を興し岸和田市を代表する富の第一人者となる彼は、丁稚のうちから心の持ちやうが異つてゐた。十五歳の時に繼父の甚右衛門が病死したので、叔父の家から暇を取り生家に歸つて家督を相續し、家業の酒屋に身を入れ、樽拾ひなどまでして働いてゐたが、その一生懸命が報ひられて、二十三歳の頃には、玉の井といふ酒を醸造して賣りひろめるやうになつた。

これが寺田の家名を挽回する第一歩の踏出しであつた。

死ぬまで働け

明治四十四年の春、八十歳の高齡をもつて、永遠の眠りについた母親のお徳は餘程のえらい婦人であつた。今日甚與茂老が七十五歳の高齡を以て、紡績會社社長を初めとして、幾多の會社銀行の業務を見てゐるのは、年少の時代に母親から訓戒された言葉が、今なほ腦裏に深く刻み込まれてゐるからである。

『人は身體の續く限り働かさへすれば、金も出来るし食ふに困るやうなことはない』

かういふ事を、口ぐせのやうに言ひ聞かせてゐた。

しかしこの言葉は、餘りに平凡過ぎて、しかもその言葉通りに實行さへすれば、成程金も出来るに定まつてゐる。金が出来れば食ふのは問題ぢやない。

言葉は誰もがいふ平凡なことではあるが、そのあたりまへな事を、わが子に立派に實行させたところがある。

誰だつて知つてゐる事を、さて行はうとすると、これが決して勵行し得られるものでない。それを烙印の如く額に刻み込まれた甚與茂老は、大抵の者なら樂隱居で閑日月を暮らしてゐるべき年であり乍ら、日曜だらうが祭日だらうが、工場や會社は休みでも、金儲けに休みはないとばかり、社長だけ



が出勤してゐるといふのだから、精勵もこゝに至つては人間業とは思はれない。  
資本金九百七十五萬圓、不況にあへぐ經濟界を尻目にかけて、年二割八分の株主配當をする程の堂  
堂たる業務を誇る紡績會社の社長である甚與茂老の俸給は、驚く勿れたつた七十圓といふに至つては  
聊か奇異の思ひがする。

このたゞの七十圓の月給は、明治二十六年の創業以來今日まで、ずつと同一で増額になつた事がな  
い、もつとも給料の外に、特殊の配當があるから月給は七十圓でも結局収入は莫大な額になるわけ  
ある。

が、これを他の會社の社長に比べて見ると、其處に雲泥の差がある、世間のどんなへツポコ會社  
でも社長と名のつく者の月給で、七十圓なんぞといふ少額な所は、恐らく絶無であらう。

出来るだけ高額を食つて、立派な室を占領して納まつてゐなければ、社長の値打ちが無いものとさ  
れてゐる。

しかるにこの寺田老は、資本金九百七十五萬圓の大會社の社長であるが、その事務室の如きは、多  
くの社員と机を並べた共同室の一隅を占めるだけで、椅子もテーブルも古く粗末なもので、コツク  
と仕事をしてゐるのだから、まづ他に類はなからう。

貯財にかけては七十五歳の今日でも、なほ一生懸命に精を出して、着る物も食ふものも何千萬圓の  
資産家とは思はれぬ勤儉振りで、日々會社に出勤するにも、雨が降らうが風が吹かうが、寒からうが  
暑からうが、決して乗物などを用ひず、何時でも徒歩で歩く程の徹底振りである。

いくら小さな市で、市中を全部廻つたつて、高が知れた道だとは言ふものゝ、銀行から會社、それ  
に二ヶ所の紡績工場を、ぐるりと一巡すれば三里の道程はあるさうだが、その殆ど日課になつてゐる  
見廻りに、自動車は勿論のこと、俵をさへ用ひないのだから、身體も壯健でなければ、續かない仕事  
だし、壯健でも身分の上から、普通の富豪には一日は寺田老の眞似は出来ても、必らず二日とは續か  
ぬ事は受合ひである。

### 母の訓戒と忠僕の努力

彼れが鋸酒「玉の井」を醸造して、賣擴めて忽ちの間に、千五百石も醸造するやうになつたのは、  
忠僕の卯之助が身を粉に碎いて働いた功を忘れる事は出来ぬ。今日寺田家隆盛の基礎を築いたのは、  
この卯之助といふ忠僕の力に依るところが多かつた。

それとも一人は、母親のお徳で病の床についた明治四十四年頃の寺田は、長者番附に名を連ねる程  
の富豪となつてゐたのに、わざく病床を立關と勝手の間にある一室に敷かせて、内外の家事を督  
勵してゐたといふ程の女丈夫である。



この二人は寺田家のためには、永久に忘れる事の出来ない恩人で、甚與茂老が今日なほ外見を飾らず、貯蓄にのみいそしんでゐるのは、母親が口癖のやうに言ひ聞かしてゐた教訓の賜である。それに就いてこんな話がある。恰度第五十一国立銀行を、岸和田の士族山岡尹方、田代環、宮崎八郎、町人の佐納権六、佐納権一などと協力設立の際、寄り合ひだの訪問だったので、自然外出の機会が多かつた。随つていろ／＼な人に逢ふので、禮儀の上から羽織を引掛けて外出するのを、母親のお徳が見て、非常に不機嫌だつた。

『今から羽織なんぞを着るやうな料簡では、末が案じられる』

と羽織一枚が贅澤の極の如くに考へたのだから、普通の母親とは違つてゐる。そしてその不心得を寺の和尚に頼んで、意見をして貰つたのだから、實に恐れ入らざるを得ない。

しかし甚與茂老は非常な親孝行であつた。決して母の言葉を反く事はしなかつた。それ以來羽織は着ないばかりか、たとひ一錢半錢と雖も、働いて得た金だ、決して僅かだといつて無駄に費す事はしなかつた。それが深く骨髓に滲み入つて、今でも出來得る限りの節約に努める事を忘れないのである。

だから彼の目には、世間が贅澤過ぎて苦々しく思はれるのは、決して無理ではない。甚與茂老ならずとも、たしかに一般に贅澤になつたのは事實である。

しかし人はそれ／＼自分に應じて、それだけの事をするのが普通だ。金を儲けたいのは、半ばはそれを遣ひたいからである。樂な生活をした希望は、多くの社會人が抱いてゐる共通性であるが、一億圓に近い富を有する日本の大富豪寺田老は、そんな望みはさら／＼無いのであらう。金で爲し得る事なら、この世に望んで叶はぬことのない身分に於て、日常生活の質素さは、驚くに餘りあるばかりである。

まづ夏冬ともに、朝は五時に起きるのが日課の第一で、起きると直ぐに湯殿で冷水摩擦、天氣がよければ広い庭の掃除から水撒きを朝飯前に終り、粗末な食事を終ると八時には必らず降つても照つても、洋傘を手に徒歩で、和泉銀行をまづ第一に、それから岸和田紡績本社、午後は分工場の巡視といふのが、判で押したやうな一日の仕事である。

この道が約三里あるが、車や自動車は贅澤の限りとあつて、歩くのだがこれも日課になつてゐる。寺田老が質素儉約の範を示してゐるために、他の富豪達も自然と遠慮をするのであらう、自家用の自動車ぐらゐる當然所有すべき富豪も、

『寺田さんでさへ、自動車を持たぬから、われ／＼がそんな物を買つて、乗り廻すのは氣がさす』

といつて、せい／＼俵に乗るくらゐで済ましてゐる。例の通り甚與茂老が、紡績分工場巡視の歸り途、この乗物について、かうした話が傳はつてゐる。



日に限つて洋傘を持つて出なかつたのに、意地悪く途中で雨が降り出した、しかし洋傘を失念したので、今更慌てゝも始まらない、濡れぬうちこそ露をも厭ふが、頭からぐしよ濡れになつてから、車に乗つたつて仕方がないので、降る雨の中をせかす急がず、平氣で歩いてゐたのであつた。これも矢張り俄雨にあつて傘の無いある商家の女房が、乗合自動車に乗らうと、停留場の前の家の軒下に、車の通るのを待つてゐた。ところへ例の市内第一の富豪の主人が、びしよ濡れの姿でピシヤピシヤ歩いて來たその姿は外聞の悪いことなどを全く氣に留めてゐない落着き拂つたもので、雨に困つてゐる軒下の商家の女房に、

『悪い雨でお困りぢやろ。私もこの通り頭からずぶ濡れでな』

と言葉をかけて、行き過ぎてしまつた。

「年寄りの社長さんも濡れ乍ら歩いてゐるなざるのに、私達の身分の者が、乗物に乗つては申譯かない。濡れた着物は干せば乾くのだから、私も歩いて歸ろ」

と今まで乗合自動車の遅いのを、やきもきとして待つてゐた商家の女房は、寺田老社長の濡れ乍ら歩姿に發奮し、忽ち心機一轉して、十錢の乗合自動車賃を儉約して、歩いて歸つたといふ事である。すべてがこの式だから、イヤでも財産は肥る一方だ。

### 紡績創業時代の苦心

いくら働く氣はあつても、仕事が無ければどうすることも出来ない。まして幾分でも金を懐にし、働く仕事が無ければ、どうしたつて徒食して所持金を費ひ果すのは當然である。

明治政府になつて、舊士族には祿高によつて、それ／＼秩祿公債を與へられてゐるが、永年の生活が俄に一變したのだから、世間の勝手が非常に違つて來た。

所謂士族の商法で、秩祿公債を金に替へて何かしら商賣を開業して見るが、馴れぬことで失敗してしまふのが多い、舊幕時代にはかなり食祿を食んでゐた大身の侍が、見る影もなく零落したみじめな成れの果てを、甚與茂老は話に聞き、實際に見た事は幾度あつたか知れないのである。

「これは何んとか、澤山の人を働かせる仕事を考へなければ、國は衰微するばかりだ」

と思ひついたので、酒屋から銀行經營者になつた寺田甚與茂をして、更に事業家として社會に功獻する振り出しであつた。

さう考へてゐるところへ、明治十六年に岸和田地方一帯に甚しい旱魃があつて、米の收穫は平年の半作にも足りぬ凶年、續いて十八年の梅雨期に大洪水が起り、折角の稻は悉く流失するといふ、實に慘澹言語に絶する有様で、これがために農村は勿論、一般の受ける生活上の脅威は、非常なもの



であつた。

「岸和田近郊は、今年は一粒の米も出来ないだらう」

かうした凄惨な聲に、極度の不安を感じてゐるのを、甚與茂老は心なしに聞き捨てはしなかつた。これはどうしても、事業を起して職を與へる事が焦眉の急である。なまじ救済をしたところで、要するにホンの一時的のものだ、永久に町に往む多くの、人々を救ふことは、到底續くものではない。それにはめいゝに働いて貰つて、勞力によつて報酬を受けることを考へてやらねばと、活動本位の計畫を策してゐた時、思ひついたのが煉瓦工場であつた。

その頃はまだ煉瓦の使用が、決して盛んではなかつたが、ポツ／＼と需要があつたのに、早くも目をつけた。そしてまづ土質の検査をして貰ふと、適當してゐるといふ證明を得たので、早速煉瓦工場を起したのが、明治二十年であつた。

工場開業の當初は、無論今日の如き大規模なものではなかつた。職工の數も少なかつたし、工場の設備も僅かに間に合はせといつた形であつたが、事業は漸次に盛大になり、職工の數も増加して行き多數の土地の者が働くためには、唯一の工場であつた。

しかしさうやつて男が、外に出て働いてゐても、女たちは家にゐて仕事もなく、たゞ留守をしてゐるだけでは、一家の生計が満足に立つては行かない。それには女の働くべき職を與へてやらなければ

ならない。

岸和田紡績會社の創立の最初は、實に寺田甚與茂が、土地の婦女子に仕事を與へる目的から、成り立つたものであつたのである。

が、この紡績會社の設立は、開業までにどのくらゐの苦勞をしたものか知れない。會社の設立の計畫を初めたのが、煉瓦工場の目鼻がついて間もなくで、創立したのが明治二十七年一月資本金二十五萬圓であるから、計畫から成立するまでに六七年の月日を経てゐる。

何をいふにも時代が時代だから、紡績業の如きは極めて微々たるもので、關西方面では僅かに官業の浪花紡績と天満紡績と、現在の東洋紡績の前身大阪紡績と平野紡績の二つの私設會社があつたから、綿絲は殆ど外國の供給を仰いでゐる始末であつた。

隨つて土地の人々は、絲は家で紡けば澤山だ、その絲で白木綿を織つてゐれば、いくらでも手間賃が取れる。それで満足をしてゐた。寺田老は外國から供給を受ける綿絲を、内地で製品したならば、國家經濟上にも、益するところが甚大であり、土地の發展策としても、利するところが多い、そして會社の儲かる事も疑ひなしだと、一舉三得の目論見を策して、土地の有力者の間を説いて廻つたけれども、何しろ絲はめいゝが紡けば澤山だといふ時代に、株式會社を起さうといふところまで、誰も相談に乗る者はなかつた。しかし寺田老は決して、計畫を抛つてしまふやうな短氣は出さなかつた。



機會さへあれば根氣よく説いた結果、つひ其の熱心に動かされて、賛成する者も出来、明治二十五年漸く二十四人の發起人を得て、設立許可だけはどうか受けたが、さて株式募集といふ段取りになると、誰も應募するどころか、見向きもしなかつた。

折角五年六年の永い年月を費して、やうやく設立するまでに漕ぎつけ、愈々株式の募集に着手となると、この始末である。流石の甚與茂老もこの時の失望と落膽とは、どんなであつたか、後年九百五十萬圓の大資本に増資して、東洋屈指の會社になつた岸和田紡績も、創業に至るまでの歴史にはかうした涙ぐましい物語があるのである。

株式募集で一頓挫を來たしたが、必死の努力はやがてその目的を達する事が出来、株主三百五十名を得て、會社は開業の運びに至つた。

一萬三百六十八錘の紡績機が、一様に働き出したのは、明治二十七年一月二十七日で、前後七年の苦心の結果が現實に酬いられたのを見た時、寺田甚與茂老は、機械の前に立つて喜びの感が極まつて胸が一ぱいになり、嬉し涙に咽んだのである。

一心にさへなれば、何事でも必ず目的は達せられるといふ信念だけは、誰でも持つ、しかしその信念を實行する者が、果して何人あるだらう。大抵の者はちやんと心得てゐて、一心になつて働く者は少ない。

前後七ヶ年の苦心に成つた紡績會社である。どうしても事業の發展を計らねばならない。それは寺田甚與茂の責任である。だから經營振りは實に綿密なもので、どんな細かいことでも、決しておろそかにはしなかつた。本社の工場や分工場を自身で直接監督し、遠い道を苦にせず毎日一度は、巡視に出かける事を怠らなかつた。そして床の上、工場の隅に一ちぎれの綿でも落ちてゐるのを見つけたら、丁寧に拾ひ集める。

大會社の社長がこの心掛けだから、社員も職工もよくその意を體し、上下一致して業務に勵んだので、事業はメキ／＼と盛大になつて行つた。かうして寺田社長經營の紡績會社は年々に、収益を擧げて、財界不況の聲の漲る時にも、二割八分の配當をしてゐる盛況も頷かれるであらう。

### 損 を せ ぬ 男

寺田といふ老人は、決して損をした事がない、如何なあぶない場合に引つかつても、巧みに避けてしまふのは、幸運にはちがひないが、機を見るに敏なところのあるのは確かに勝れたものである。

新しい會社創立計畫の相談を持ち込まれると、それが確實なものと見込さへ立てば、説明を聞き終ると直ぐ、一萬株でも二萬株でも、無難作に引受けてしまふが、餘り呆氣なく承知をされるので冗談ではないかと思ふ場合もあるさうだが、しかし無論冗談なぞを言ふ人ではないから、一度引受け



るといつたら間違ひはない。そして如何に簡単に約束をした株でも、且つて損をした例がないさうである。

往年大阪株式取引所理事長の島徳藏氏が、上海取引所設立に際し、甚興茂老に話を持ち込み、自分の持株を譲つた。すると大恐慌襲來で、上海取引株の始末には誰も彼も、すつかり閉口したものだ。寺田老は恐慌來の前に、株を賣つてしまつたので、他の狼狽を傍觀してゐればよかつた。既にその時には二百萬圓を懐に入れてしまつてゐたといふ事だ。

銀行の破綻の續いた昭和二年時代にも、臺灣銀行や近江銀行とは、密接な取引關係があつて、かなり大きな預金をしてゐたのを、營業不振と感知したものが、休業を發表する間に、全部を引出して一文の損害を蒙らずに濟ませた如きは、全く何處までも運のいゝ事だらうと、驚嘆せしめたものだ。

兜町 太平記



## 株式取引所の最初

相場は賽を持たない賭博だといふ議論が多数を占めて、取引所の設置には容易に許可の指令がなかつた。

取引所の必要論を唱へて、政府にその許可を請願したのは、今の澁澤子爵であつたが、御維新になつて間もない、兎角に大小を禁ぜられて腰の軽さを、やゝともすれば物足りなく感ずる明治初年の官吏の頭には、賭博に等しい相場なんぞと最初から思ひ込んでゐるのだから、そんな請願の如きに反対意見を唱へるのは當然である。

株式取引所條例の制定されたのは、明治七年であつたが、其の頃は株式取引ではなく、米相場ばかりであつたので、議論の中心となるのはそこで、反対の理由はかうだ。

米相場といつても、實際米を買ふのではないのに、單に買ふといふ契約をしたり、一方は賣る米を所有してゐるぬのに賣り渡す約束をする事は、たとへそれが延取引ではあつても、空米相場は明らかであるから、それを許可するのは賭博を公認するのも同様であるといふのが論據であつた。そして極力



不許可を主張したものであつた。

一種の賭博と見れば見られぬ事のない米相場は、許可するしないで、賛否の兩論は互ひに自己の説を譲らなかつた爲、容易に決定しなかつたが、それでもどうにか賛成派が勝を占めたのは、政府の法律顧問として招聘した佛人ボアソナードが、賭博行爲ではないと説明したので、反対派の連中も、成程そんなものかと、不精不承ではあつたらうが、兜を抜いでしまつた。

かうしたわけで、八ヶ間敷い反對論も、段々に鳴りをひそめたので、濫澤子は福地櫻痴居士に依頼して、倫敦株式取引所の條例を調べて貰つた。そして調査を進めてゐた一方、政府もその必要を認め、明治十一年五月に、太政官布告第八號の株式取引所條例で、三ヶ月の限月制による定期取引を公許し、約定期限内の轉賣買戻しによる解約を認め、取引所の組織を合本會社とするといふのであつた。

條例が發布されると、それを待ち構へてゐたのは、取引所の必要を力説して、奔走した濫澤氏は、早速三井一族の三井守之助、同養之助、濫澤喜作、小松彰、小林猶右衛門、益田孝、三井の大番頭三野村利助の諸氏と計つて、資本金二十萬圓で取引所設置の免許を得て、その年五月十五日東京株式取引所を開設し、小松彰氏が頭取に、小室信夫、福地源一郎、濫澤喜作、小林猶右衛門の四氏が肝煎で出来たのが、株式取引所の最初であつた。頭取は今の理事長で、肝煎は理事である。

かうした経緯で開業した取引所も、米相場に模したゞけに、仲買人(現在の取引員)も米關係の者が多く、立會方法の如きも、今から思へば至つて幼稚を極め、今から見れば賣買も極めて微々たるものであつた。

賣買單位が一株單位で、一日の商ひ高がやつと四五千株といふ工合だから、時に一萬株も取引が出来た日には、所員一同に對して、祝儀袋が出たといふ景氣だつた。

随つて取引されるものも、公債類や數種類株に過ぎなかつた。最もその時代にはそれが當然だつたので不思議はないが、今の株式取引所の景氣から見ると、全く信ぜられない話である。

一ト月遅れて六月には、大阪取引所も開業される段取りとなつた。五代友厚、廣瀬宰平の二氏が、奔走し、住友吉左衛門、鴻池善右衛門、山口吉郎兵衛その他大阪名代の富豪十人が發起人となつて、北濱二丁目を設置し、頭取には元兵庫縣令中山信彬、肝煎に住友家代表の廣瀬宰平、三井家代表の永見米吉郎、中井由兵衛、山口家代表の西田永助といふ顔觸れで、資本金は東京と同額の二十萬圓であつた。

### ドル相場全盛時代

初めて東京取引所が出来た明治十一年の賣買出來高は、今日と比べて甚だしい差額のあるのは無理



もないが、その年六月から十一月までに取扱つた公債が額面二千六百萬圓といふから、これは開業匆としてはかなりの額に上つて、頗る成績のいゝものだつたが、それに引かへて株式の方はたつた二百五十三株といふ、餘りにしみつたれた數であつた。

それが五十年後の今日はどうだ、昭和元年の株式の賣買高は百二億圓を超えてゐるのだから、今から思へば夢のやうな話である。

それに順じて、取引所員は十四名だつたのが現在では五百二十五名、仲買人（現取引員）の十五名が百三十二名となり、その身元保證金の百圓が今では十五萬圓になつてゐるから、増額は實に千五百倍といふ素晴らしい景氣になつてゐる。

大阪の如きは東京に比べて、一層貧弱な有様で公債がたつた二百萬圓、株式は一枚もないといふ情ない状態だつた。

こんな事ではと、發起人連もすつかり氣を落して、何んとかしななければと、浮かぬ顔を集めて協議を凝らした程、取引所の成績は振はなかつた。

その翌十二年九月に、東京大阪の兩取引所に金銀貨幣の取引が許可となつたので、不換紙幣時代の日本は、當時銀相場の動きによつて、その差を異にするのであつた。

それを狙つて横濱では、盛んにドル相場が行はれた。ドル相場といふのは、貨幣投機で恰度現在の

支那と同様に、貨幣制度が確立してゐなかつた頃だから、このドル相場は頗る人氣を煽つたもので、公許される前から、しきりに行はれてゐたものが、公然と天下晴れて許されたのだから、われもわれもと忽ち人氣が立つわけである。

儲けることにかけては、抜け目のない故安田善次郎を初めとして、天下の糸平で名を馳せた田中平八、兩宮敬次郎、栗生武右衛門といふやうな、後年の富豪紳商が、運賦天賦の大勝負を盛んに争つたので、取引高は途方もない程の額に達した。

その結果取引所は福々の有様で、十三年の下半年から十四年の上半期には、配當が四割五割といふ上景氣になつたが、その代りに公債や株式はすつかりさびれて、手を出す者もない有様であつた。

一方が盛れば一方が衰へるのは當然で、少しも不思議な事ではないが、株式取引所がドル相場の爲に、こんな有様となつては、監督官廳も黙つてゐるわけにはいかなかつた。

『庇を貸して母家を取られたやうなものだ、何とか今のうちに取締らんと困るやうになるだらう』といふやうな意見が、ポツ／＼と出はじめた頃は、ドル相場は役人達の目に餘る程、賭博氣分が濃厚に露骨になつてゐた。

『どうも少し圖に乗り過ぎてゐる。一層禁止をしてはどうか』としきりに問題になつてゐる矢先、大藏卿の佐野常民は俄然、ドル相場を投機的空賣買として賭博



類似に等しいものとして、金銀貨幣取引禁止の嚴命を下したのである。夢中になつてゐた相場師には青天の霹靂といふやうなこの突然の禁止命令に、驚愕狼狽し乍らも、しきりに大藏卿に嘆願したけれど、頑として解除するどころか、

『賭博類似である以上、取引所に許可は出来ぬ』

と膠もなく斷乎として嘆願を退けて寄せつけなかつた。

如何に運動をしても、嘆願をしても全く効果がなないと知ると、落膽して諦めるより外はなかつた。

佐野大藏卿によつて、禁止されてしまつたドル相場は、それ以來遂に復活しなかつたので、取引所

は俄かに活氣が無くなり、金の唸りも聞えなくなつて、一時は四割五割といふ配當をしてゐたのが、

十四年下半期が二割に減じ、十五年の下半期になると、一割四分までに減配を餘儀なくされる状態であつた。

ドル相場の禁止と共に、不換紙幣の整理で通貨は縮小する。自然一般經濟界は不振になるといふ始

末で、取引所の恐慌と一緒に、世間の景氣は著しく沈滞して來た。

このまゝに手を懐に入れて、音無しく時機を待つてゐるやうなぞと、ノンキな料簡でゐたら、株式取

引所も創業以來、連綿として五十餘年繼續したかどうか解らない。

### 吉田農商務次官の主張

そこで起つたのは、株式取引所の制度改正論である。

主唱者は農商務次官の吉田清成といふ人で、當時のハイカラをもつて、自他共に許した程の人物だ

つた。明治維新前に既に英國に留學し、しかも七年間滞在した程の新知識の持主であつた。明治三年

に一度歸朝し、更に翌々年の五年には明治政府の命を受けて、わが國最初の外債募集のため再び英國

に渡り、二百五十萬ポンドを成立させた手腕から、すつかり政府の信任を得て、滯英中に英國駐劄公

使に任ぜられ、十五年まで九年間任を帯びて滞在してゐた當時にあつては唯一の英國通であつた。

その人が農商務大臣谷干城の女房役たる次官に懇望されて就任したので。

そして取引所の制度改正を唱へたのだから、非常に新らしい制度に相違なかつた。

つまり株式相場の公定機關を、株式組織の營利會社に任せて置くべきではなく、これは先進諸外國

の例にならつて、會員組織に改めねばならぬといふ主張で、勿論これは反對が八ヶ間敷かつたが、反

對を押し切つて明治二十年五月に勅令をもつて、佛國の制度を學んでブールス條約を公布したのであ

る。

この條約の發布は、非常に新らし過ぎる程のものであつたが、恰度東京大阪の取引所も、各地の米



商會所（現今の米穀取引所）も、免許期限が、二十一年五月までなので、それを機会として従來の組織を廢して、會員組織に改めようとしたのであつた。

だからこの極端な改正も、反對のしようがなく、うっかり故障でも申立てようものなら、株式も米も共に取潰されてしまふかも知れない。吉田次官の勢ひに、たゞ眼を瞠つてゐたのである。

しかし新法によつて取引所設置の申請をする土地が續出し、許可されたところだけでも、東京大阪は勿論、神戸、新潟、名古屋、大津、佐賀、金澤、高岡、桑名の十ヶ所に達したので、既設の取引所の役員連は俄かに狼狽をし出し、東株の頭取河野敏謙は大株の頭取磯野小右衛門と共に、東西聯合して新法の反對運動を起し、頻りに撤回を迫つたのであつた。

さうしたドサクサ騒ぎに紛れて、大阪の藤田傳三郎氏等の有力者が急速に計畫を立て、堂島三丁目に早くも假市場を設けてしまつた。

かうなつては如何に撤回の猛運動を續けて見たところで、一步を先んじられては、どうにもならなかつた。しかし其の頃の農商務省は大臣の更迭が頻々と行はれ、谷干城から黒田清隆となり更に榎本武揚が就任し、その後を井上馨が襲ふといふやうな状態であつた上、ブルス條例の發案者の吉田次官も、谷農相と進退を共にし、元老院議官に榮轉してしまつたので、反對派にはこんな好都合はなかつた。

飽迄素志の貫徹を期し、表裏から猛運動を續続した甲斐があつて、結局既設の取引所には舊法による營業期限を延長する事になつて、一段落を告げたのである。

### 最初の株成金二人

十年の西郷戦争で濫發された不換紙幣の整理が一段落を告げて、經濟界の景氣がすっかり立ち直つた頃から、東株は暴騰する一方で、百圓株が百六十圓だつたのが半年ばかりの間に四百九十圓といふ著しい程の奔騰を示した。

その亂調子に乗つて、盛んに儲け込んだのは、大隈重信に姻戚關係のある三枝守富、相良剛造の二人で、これが株成金の元祖と言ひ得る連中なのだが、幸運は決して永いものではなかつた。

例のブルス條例の發布と共に四百九十圓臺までに上つた東株は、一氣に慘落して二百十圓となりこれが爲に仲買人の中にも、倒産するものが續出するといふ、實にみじめを極めた光景を現出するに至つたのである。

だがこの株式界の動搖が、却つて世間一般の投機思想を煽つたことは、豫想外であつたのも、面白い現象であつた。

金を儲けるにしても平凡に樂に儲けるよりは、波瀾の多い苦しみの伴つた方が、金に有難味が多い。



相場は平時に於ける戦争のやうなもので、これ程心持ちの眞剣なものはないのである。だから立會眞つ最中の株式市場を覗いて見れば、直ぐ解ることだ。買ふ人賣る人の顔は緊張しきつて、殊に鋭い眼付きは、全く物凄じばかりになつてゐる事は、常人達は心づくまいが、傍觀者は誰だつて否定はしない筈だ。

少し調子に乗れば僅かの間に、何十萬何百萬といふ大金を掴む連中は、珍らしくはないが、その得意の笑顔は忽ち失意の濫面に變ずることも、暴騰慘落の時には必らず起るのが例である程、盛衰の甚しいのが、この道の常である。

それから廿七八年の日清戦争までは、さしたる特別の波瀾はなかつたが、戦争氣分の影響は常に敏感に響いて、一喜一憂ことごとく相場の亂高下を來すことは免れなかつた。

戦局は終りを告げ、政府の積極政策は世間一般の景氣を煽つて、株式市場の如きは素敵もない好景氣が持續し、東株は人氣の焦點となつて、七百十圓といふ未曾有の値段にせり上げ、株屋町はわれ返るやうな騒ぎを演出したのである。

### 油屋熊八と石卯

東京がこんな調子だつたから、大阪とても景氣のいゝのは當然で、今こそ別府温泉の旅館を經營し

して、専心土地の發展に努め、天下の別府を宣傳することを使命としてゐる油屋熊八君も、日清戦争頃は壯年の働き盛り、殊には投機にかけて、入一倍の興味？ を持つてゐたから、好機到れりとばかり、二十八年の大株が三百圓の聲を聞くと、眞先に買ひにかゝり、翌二十九年にかけて呆氣に取られてゐる連中を尻目に、全株數一萬二千株の三分の一を熊八君が一手に買占めた豪勢振りを示し、とうとう中限千一圓といふ古今未曾有の高値を呼んだので、株式市場は鼎の沸くやうな騒ぎ、寄るとさばると『どうもえらいこつちや、一體どうなりますのやろ』

と驚異と不安の聲を聞くに至り、油屋熊八は得意の頂上に會心の笑を漏らして、腮を撫でながら、『俺のする事は、まづこんなものだよ』

と言はぬばかりに納まつてゐたが、こんな常軌を外れたことが何時まで保つてゐるわけはなかつた。

無論市場には、熊八君の度胸に氣を飲まれて、指を銜へてゐる者ばかりでないのは明瞭である。

『よし俺が、油屋の向ふへ廻つて相手になつてやる』

反抗心に煽られて、得意の絶頂に調子づいて奮闘をしてゐる油屋の眞正面に立ち、賣つてくゝ賣り抜いたのは小島要助君であつた。

實に目ざましい市場の活氣に、まるで嵐の如き凄じい光景を演出し、買ひ方も賣り方も、こゝを先



途と鎬を削つた。

市場の險悪は日に日に加はつたので、時の理事長磯野小右衛門氏は危険を防止すべく臨時増證を盛んに徴收したのである。

この臨時増證は、賣方は現金を用意してゐるからその都度に間違ひなく納入したが、買方の熊八君には一方ならぬ痛手であつた。そして納入が不能となるや、忽ち買方悲觀の風説がバツと廣がると、人氣は恐ろしいもので、千一圓といふ破格な高値を呼んでゐた大株が、見る／＼急轉値下、釣瓶落しに暴落してしまひ、遂には百六十圓までガタ落ちに落ちたのである。

かうなつては、いかな油屋熊八君も策の施しやうがなく、持株全部を投げ出さねばならなかつた。これが大阪株式取引所開始後、最初の買占めの失敗として記録に残つてゐる。その頃も一つ買占め騒ぎがあつた。

それは伊勢の油屋の主が、參宮鐵道株を買ひ占めて、七十三圓臺から九十五圓まで高値を示し、すつかり氣をよくしてゐるが、天井を打たれて身動きが出来ず、慘落の六十九圓で持ちこたへられずに投出した。

それを引き受けたのは、堂島米市場の相場師で、石卯で通つた石田卯兵衛であつた。

石卯は米相場の方でこそ、彼れ一流の手腕を認められ、金力といひ度胸といひ斷引といひ、相場師

には極めて大切な三拍子を備へてゐる男だつたから、この石卯が參宮株を買つたといふだけで、人氣は不思議なもの、六十九圓に暴落したのが、忽ち百三十圓臺に一氣に跳上つたのである。

元來相場は金利などの關係から、當限より中限、中限より先限りの高いのが通則となつてゐるに拘らず、この買占めで賣方は納會間際には、當限を買つて先限を賣るといふ手段に出るの餘儀ないものがあつた。ゆゑ、當限が先限より高いといふ變態現象を示すに至つた。

そこで取引所でもこのまゝ捨置くわけには行かず、證據金を引上げたが、仲買連中は追證が出来ず、それがために帳簿整理となり、數日間臨時休業を餘儀なくされた。それは明治二十九年六月のことであつたが、整理後の市場は却つて天一坊と呼ばれた松谷元三郎が石卯と協力し、いよく買ひ振つたのである。

かうなつては鬼に金棒をあてがつたやうなもので、誰もこの鐵棒の前に出る程の勇氣はなかつた。遂に參宮鐵道株は、百八十八圓まで暴騰した。これがために取引所は、續げざまに五度も證據金を引上げた。しかし買方はこんな事ぐらゐで、痛痒を感じる筈はない。却つて困るのは賣方であつた。

何しろ石卯と天一坊とが協力して買ひ占めた株は、實に十萬株と稱された程である。もうこれ以上は市場に出る株がないとまで言はれた時、吉田新三郎が市場を潰す悲壯な覺悟と決心とから、百圓賣の亂手を振つて立會中止となり、最後が例の解合ひで、石卯は三百萬圓をせしめたが、しかし其の儲

松谷元三郎



けは永久のものではなかつた。

石卯その人も株式市場を思ふがまゝに活動した思ひ出を残し、堂島の米相場で元の子もハタいてしまひ、淋しい晩年を暮し八十三歳で生涯を終つたが、石卯老人の活躍振りの目ざましかつたことは今でも話題となつて傳はつてゐるくらゐである。

成功が成功にならず、失敗しても必らずしもそれきり浮び上れぬものでない幾多の實例を示して、七轉び八起きが相場の常といふ事を世間一般の人が知ると、各地共に投機熱は盛んになる一方で、甲地も乙地も株式取引所の設置を計畫し、明治三十年には全國の取引所は百六十餘を數へるに至つた。

雨後の筍のやうに、矢鱈に取引所の數が殖えると、東京ではまづ品位向上を高唱し、理事長には名望手腕共に備はつた、大臣級の人物を推して權威あらしめようと、農商務大臣をつい近頃辭した金子堅太郎氏に就任の懇請をしたものである。

『折角のお頼みだが、どうも私には……』と頗る氣乗りがしなかつた。兎に角農商務大臣の顯職を先頃まで務めてゐたのが、野に下つて間もなく、株式取引所理事長といふのだから、これは一寸受諾は出来ない。よしんば引き受けるしたところで、さう安つほく承諾したのでは有難味が薄い。

といつて金子さんは、そんな駆引きではなく、全く理事長に就任する氣はなかつたのである。それをしきりに懇請して、無理強ひに頼み込んだ。

『そんなには言はれるなら、任期を定めてよろしければ、お引受けしよう。一ケ年といふ條件で、それがいけなければ、絶對にお断りをする』

見込まれた金子さんは、條件をつけた。

『仰しやる通りで結構でございます』

かういふ工合で、とう／＼口説き落して、金子さんに理事長の椅子に腰を下ろさせた。それは明治三十二年一月だつたが、就任する、早々、披露を兼ねた新年宴會を、帝國ホテルで催し、時の總理大臣山縣有朋公を引張り出して、一場の演説までさせたのは、流石に金子理事長は大したものだ、株式關係者をしてすつかり感激せしめた。

この時の農商務大臣は曾禰荒助氏で、首相が演説をした位であるから、無論黙つてゐる筈はなく、大演説を試みたものであつた。

曾禰荒助氏は後に伊藤博文公が韓國統監となつた時副統監になり子爵をまで授けられたのであつたが、その歿後はこれ程の名門も遂に悲しむべき末路を見なければならなかつた。荒助氏一代の勳功によつて、明治大帝の恩寵を蒙り顯臣として重きをなしたのが、嗣子の安輔氏が家督を継ぎ、襲爵をすと共に遂に破綻を生ずるに至つたのは、餘儀なき次第とはいひ乍ら、それが自身で財を傾けたので



はないだけ、同情されるのである。  
餘談に涉ることではあるが、曾禰子爵家に悲しむべき差押へ事件が起つたのは、最近の事實として現はれた事だから、簡単にこゝに記述する。

曾禰荒助子爵の二男寛治氏は、故伯爵芳川顯正氏の養嗣子として家督を継ぎ、現在では伯爵の當主であるが、今から十二年前某事業を起すため、實兄に當る曾禰安輔子を説き、その財産を擔保として安田銀行から三萬圓を借り出した。

それが子爵家をして二進も三進も行かぬ今日の如き運命に陥入る發端であつた。

芳川寛治伯はその後兄の安輔子、弟の曾禰又男氏を連帶保證人として二十萬圓を新規に借り受けたのである。この金が積り積つて、昭和三年五月には、元利合せて二十八萬八千三百圓となつたので、銀行側では幾度となく返済を促したが、更に履行をしないため、芳川曾禰兩家の宅地四千坪と建物一切を競賣に附し、安田銀行が十三萬五百圓で落札をし、銀行代理者として土屋辯護士が、立退きを迫つてゐるけれど、一向に要求に應ずる氣色がないので、斷然たる處置に出たといふのであるが、その差押への日、荒助氏の未亡人で七十二歳のてる子刀自は、目のあたり榮枯盛衰を情なくもわが家の上に見つゝ、數年の病床に餘命を味氣なく過してゐた。

しかも老病を養つてゐる中野町字原の邸宅は、手入れもせぬ荒るゝがまゝに委したものであつた。

其の有様の餘りな甚しさに荒助子生前の友人知己或は恩顧を蒙る事の厚かつた人々が、未亡人の生活を保證すべく、後援會を組織してやる程だつた。

殊に當主の安輔子が、昭和三年の春世を去つてから後は、長子が未成年者であるため、てる子刀自は末子又男氏の世話を受けてゐたが、同氏も恰度病で臥床してゐるところへ、辯護士と執達吏とが人夫を伴つて来て、差押へを執行したのであつた。

話は本筋に戻る。

金子堅太郎子の取引所理事長在職中の一ケ年間には、随分いろ／＼と改善に努めたものであつた。まづ建物の改造に着手し、取引所員の角帯に前垂れ姿を禁じて、洋服着用を勵行させたりした。かうして頻りに改良を企て、約束の期限が來ると、後任を中野武營氏に譲つて鮮かに辭職をしてしまつた。

### 鐵道株全盛時代

その頃は鐵道株が、非常に人氣を呼んでゐたので、誰も彼れも鐵道株ばかりを狙つて手を出してゐた。

帶谷傳三郎なる者が、富豪の鷲尾某、岩下清周、磯野小右衛門、阿部彦太郎等の後援で西成鐵道株



の買占めを初めて、盛んに活動したのは國有を見越しての思惑からであつたが、それが失敗に終つたため、金融の後援が手を引いたので、忽ち馬脚を現はしたり、また香野倉次が阪鶴鐵道株で失敗したのを、北濱の仲買人榎山喜一が、富豪辰馬吉左衛門を説いて肩代りをして貰つた策略が當り、辰馬が引受ければ大丈夫だと、人氣が俄かに復活して、阪鶴鐵道の株は額面に挽回した。

辰馬は懇請されて據なく引き受けたやうな阪鶴株が、自分が手をつけたために、値が上つて行つたのだから流石に悪い心持ちはしなかつた。といふよりはむしろそれが爲に、運輸事業にすつかり興味を覺えたのであらう、その頃、阪神電鐵が創業當時で、經營が甚だ振はず、買ひ込んだレールを積み上げて、持て餘してゐるのを聞いて、

『何んとか物にしてやらう、將來の見込みは充分にあるものだ』

といふ確信があつたのだから、三十六圓といふみじめな値に落ちてゐるのを、平氣でドシ〜と買つたものであつた。

辰馬が富有であるのは、關西では一般に周知してゐるのだから、阪鶴鐵道の例もあり間違ひないと思つて取ると、値は忽ち上つて行き、額面以上にまで引き上げられ、それが爲にあれ程の大工事は計畫通りの完成を見るに至つたのである。

豊川鐵道の株の買注文が、東株市場に盛んに出たのは、やはりその頃で、注文主は誰とも知れなかつたものであつた。

つたけれど、買ひ方が大きかつた爲に、大阪市場にも直ぐに響いて、先限六十七圓までの値が、當限に廻ると六十圓に下落したので、市場も面喰つた形で、買主を詮索すると、兩宮敬次郎、松谷天一坊、横山源太郎といふ一流の連中達の協同策戦であつた。

これに對する賣方に廻つたのが、獨眼龍の名を取つた半田庸太郎、小池國三といふ一騎當千を初め、今井文吉、宮崎敬介といふ人々が、實株を持つて賣り立てたから、當限に廻つて下落したのであつた。賣り方も買ひ方も、共に當代の猛者であつたから、かなり物凄い商戦に鎗を削つてゐたので、市場は一高一低の波瀾に景氣を沸かしめてゐた。これを見た大株では、岡山熊吉、潮見久吉、福原久米一、木村幸七が共同で安い當限りを買つて、高い先限を賣るといふ、繋ぎ商ひを機に乗じて行つてゐるのは、流石に抜け目のないやり方であつた。

買ひ手も賣り手も、その道にかけては百戦練磨の腕達者が、互ひに踏ん張り合つて豊川鐵道株を争つてゐるのだから、市場は時ならぬ波瀾を起して、勝敗の結果は頗る興味のあることゝされてゐたが、買ひ方の或る一人の違反行爲がバレて賣買契約無効の訴訟が起り、遂に買ひ方が敗訴となつた。

この波瀾の餘波を巧みに利用した、繋ぎ賣りで思はぬ儲けに、ほくそ笑みを漏し乍ら、

『かういふ事があるから、株はやめられない』

と腮を撫でてゐる連中が、大阪市場にゐるのであつた。



大八車に紙幣の山

株屋町の不況時代、餘り目ざましい事のなかつたのは、日清戦争後の好況が去つて明治三十六年から日露戦争勃發の三十七年までの數年間であつた。

日露戦争と共に舉國一致の緊張した氣分が高まるにつれて、株式市場の景氣も著しく立直つて來たのは言ふまでもない。

そこへ突如として飛出して、東株市場を掻き廻したのが鈴木久五郎であつた。鈴木の事は別項に記してあるから、こゝでは繰り返さぬ。

明治四十四年やまと新聞社長の松下軍治が三つ輪商店といふ株式仲買を経営して、新東株の買占めを初めた。買ひの最中七十圓臺であつた新東株が、一躍百四十圓臺までに値が引上げられたので、松下の策士であることは、誰も知つてゐるが、しかしいかに策士とはいへ、いつまで高値を買ひ續けられる筈がないと、高を括られてしまつたので、さうなつて手を引いたのでは、折角今まで賣つた松下軍治の名が廢ると、元來が負け嫌ひで叩き上げて來た男だけに、盛んに防戦買ひに出たのであつたが、しかし形勢は日に日に非に陥り、相場は下落する一方となつた。

流石の松下もこれでは、投げ出して降參でもするだらうと、思つてゐた者も多かつたが、當の松下

は少しも困つたやうな様子は見せにせず、却つて、

「どんなに下つても俺は差金勘定はしない。その代り、正株を揃へてくれ、まだくいくらでも買ふぜ。こんな事で驚いてゐるやうなら、株へ手は初めつから、出さないよ」

おそろしい啖阿を切つて、人々を煙に巻いてゐた。

「相變らず大きな法螺を言つてゐるぜ、拳固でいくら大きな言をいつたつて、そいつは通用するものか。今に見る降參するから」

誰も松下の大言壯語を、信用するものが無かつたが、しかし松下は決して負け惜しみの法螺ではなかつたのである。

元來、定期取引の外に、デキ取引制度を許可したのは、取引と共に直ぐ現株が欲しいとか、或は現株を賣つて渡したいもの、爲に設けた條令で、これを正式に解釋すれば賣り手は現株をチャンと用意し、買方は現金を握つてゐるべきだが、それは表面だけで、そんな規帳面な者は取引所が開始してこの方殆ど無いといつてもよい。まづ全部が日歩勘定で受渡を延ばしてゐるその間に轉賣買戻しをして差金で一切を決済する。これが今までの例になつてゐるのに、

「差金なんかしない、金を引換に渡すから、正株を揃へて出してくれ」とおつにからんだ言ひ草に出て、



「正株が買った数だけ揃はなければ十株に三十圓の逆日歩を貰ふんだね」と皮肉な笑ひを浮べて、悪落着きに落着き拂つてゐた。

松下の買ったのは、新東株三萬八千株であつた。勿論これだけの正株か、何う奔走したつて容易に集められる筈のないのを見越した一種の難題であつたから、賣方もこれにはすつかり手古摺つたのである。

といつて正株を揃へる事が出来ないであつたのでは、この上どんな態度に出られるか解らぬので、二十八日には是が非でもと賣方は、八方奔走して漸く一萬四千株を掻き集めた。それ以上は如何にしても、集め得る才覚はつかなかつた。

取引所理事と、デキ仲買人幹事とは、取引所で額を鳩めて祕密協議をした揚句、

「解け合の分は正株提供の責任はなく二十七日後場から二十八日の前場までに三ッ輪が買った六千五百七十株を正株で渡せばよい」

かういふ解釋に協議が決したのである。

つまりこの六千五百七十株といふのは、三ッ輪が買った三萬八千二百七十株の中には十の字を初め其の他の買玉が含んでゐる上、解け合ひになつてゐる二萬三千七十株も混つてゐるので、賣方としては差引き六千五百七十株だけを、取引所に提供すればよいといふのであつた。

その株が提供されたとすれば、買ひ方の松下にそれだけの現金が、果して出来得るかで、興味はこの問題に注視されてゐた。

しかしその通告を受けると、

「六千五百七十株だと、俺の方やそんな半頗な數ぢやない、三萬八千株だ。そいつが一株足りなくつても、受けるわけにや行かない」

せゝら笑つて應じなかつたので、二十九日のデキ立會は休止となつてしまつた。

場はこれが爲に混亂した、そして誰がいふともなく、

「いよく」となると現金が出来ないからそんな事を言つてゐるんだ、受渡しをしない三ッ輪を違約處分にしてしまへ」

と沸き立つて、大言壯語をした松下が、尻を割つたものと一途に思ひ込んでしまつたのであつた。

その騒ぎの眞最中、三ッ輪が大八車に百萬圓の現金を積み込んで、取引所に持つて來たといふ説がバツと傳はつた。

「それは嘘だらう、それだけの現金が出来るとは思はれない。大方三ッ輪一流の宣傳に違ひない。何しろ金の額が大き過ぎるから」

尻を割つたと信じられた矢先、百萬圓の大金が運び込まれたと言ふのだから、誰一人として疑はぬ



者はなかつた。

しかしそれは嘘報でも宣傳でもなかつた事は、やがて取引所の帳簿に、三ッ輪商店が六千五百七十株の新東購入代金として、七十萬七千二百五十一圓の現金を、納入したことが記入されたのである。賣方は色を失つた。大分は現金の納入が不可能になるだらうと見てゐたのが、如何にもアツサリと片付けられたのだから、狼狽はその極に達し、たゞ驚愕して呆然とするばかりである。

「この調子で、解け合ひになつてゐる二萬四千株を渡せと言はれたら、それこそ一大事になる。何んとかそれを言はせぬ方法はないだらうか」

賣方は眼の色を變へて、頻りに善後策を講究した。そして僅か二日の間に何處から七十萬圓といふ大金を融通したか、全くその金穴は解らなかつた。

しかしその金の調達先は、大阪の北濱銀行の岩下清周から四十萬圓と、帝國商業銀行から三十萬圓だともいふし、神戸の鈴木商店からだとも傳へられ、小林孝子を媒酌した縁故から伯爵田中光顯を説いて日銀から引出したなぞといふ説もあつた。要するにその何れが事實であるか解らぬけれど、六千五百七十株の受渡しを、立派に済ました上で、残りの二萬三千株を渡せと頑張るのだから、これには如何とも方法がなく、取引所ではデキの立會を停止し、賣方は正株の掻き集めに八方奔走し、やうやく纏めた八千株で解け合はうと持ち出したが、三ッ輪は百十圓出せと主張し、賣方は最後の引値百七

圓五十錢を楯に飽迄譲らず、紛糾は紛糾を重ねて、到底解決の見込はないのであつた。

その紛糾を持ち越して五月に入つたが、やつぱり東新デキの取引は停止のまゝだつたから、兜町は全くひつそりとして、どう成行くのだから見當がつかない有様であつた。

といつてこまの、立會停止を續けてゐるわけには行かず、何とかして解決をしなければならぬ、場の關係有力者が數名調停したが、話は纏まらなかつた。

三ッ輪は飽迄も残りの二萬三千株引渡しの主張を譲らないので、遂にデキ仲買幹事會も、妥協の意志を捨て、奮起した。そして

一、三萬一千四百六十株の買玉を否認す。

二、清算所に提供しある一萬一千九百六十株を速かに引取りしむること。

三、もし不可能ならば百七圓五十錢を以て全部解合ふこと。

といふ申合せをし、更にデキ仲買人總會を開き、左の如き決議をしたのであつた。

三ッ輪商店をデキ仲買人組合より除名し、自今一切賣買上の關係を絶つ。

といふ總會の決議を直ちに三ッ輪商店に通告したのであるが、これに従へば松下は一株について二

圓六十錢の植合差金を賣方に支拂はねばならぬのだが、無論そんな申合に耳を貸すべき男ではなく、結局松下は一文も出さず、百十圓十錢で全部が解合ふ事になつたものゝ、この紛擾が禍となり、デキ



取引は弊害を惹起するものとして、農商務省大臣から禁止命令が發せられたのである。だから其の當時、松下軍治といへば株式市場では、薄氣味の悪い男として怖毛を振つて敬遠されたものであつた。

非業の最後を遂げた二人

話は一寸前後するが、例の鈴木久五郎が日の出の勢で遮二無二に東株を買占めて、瞬く間に巨利を擱んだ餘勢をもつて、鐘紡株を買ひ初めた時、それに對抗して賣りに廻り、悲惨な最後を遂げた人に、東京商品取引所理事長で京濱電鐵の重役を兼ねてゐた片野重久氏がある。

片野氏は多年の老練家、一方の鈴木久氏は殆ど素人で、たまく運に乗つて調子よく、トン／＼拍子に當りつゞけた幸運兒に過ぎなかつたのだが、誰もその勢に當りかねて、對抗する者がなかつた。さういふ時に、雌雄を決する事は一面に於いて、非常な危険であるのは、片野氏は知つてゐるに違ひないが、冒險であるだけに日の出の鈴木久、傍若無人の鈴木久の得意の鼻を挫くことは、たしかに痛快な事だ。しかし鈴木久は運が強かつた。賣りに廻つた片野氏は、形勢すこぶる非に陥つた。「君にも似合はんことをする。今この株を賣つてどうする氣だ。賣るのは思ひ切れ、見す／＼損をするのぢやないか」

としきりに諫止した友人の言葉を耳にせず、飽迄も賣りを頑張つたが、明治三十九年十二月には、全く進退谷まり、講すべき策に盡き果てた身に見限りをつけ、ピストル自殺を遂げてしまつた。

やはり同じ頃、鈴木久を向ふに廻した男に、支那人の麥少彭といふ者があつた。この麥といふ男は、神戸在留の大商人で、獨力で同文學校を設立して學生を養つてゐて、非常な豊富な財を貯へてゐると觸れ込み、實際にその本國には無限の産を有し、毎月上海の銀行からの送金だけでも、莫大な金であつた。

その支那の富豪が、殆ど無限の資金をもつて、鈴木久の買ひに對抗して賣りに出たのだから、この勝負は一般取引所關係者の興味と注目を惹起したことは非常だつた。

鈴木久も麥少彭の財力には、やゝ不安もあつたらしいが、流石に血氣の年齢である上、度胸一つで數千萬圓を儲けた程の男である。

彼自身が興味をもつて飽迄も買ひ煽つて行つた。運の悪い時には、如何に無限の財寶を擁する麥少彭といへども、到底鈴木久に對しては勝目はなかつた。

そして遂に五六百萬圓の損失を蒙つて、日本に在留する事さへ出来なくなり、シンガポールに落ちて、莫大な失敗を挽回すべく、しきりに畫策をしてゐたが、やがて再び渡來した時は、當の相手であつた鈴木久は没落して、昔日の姿は市場に見ることが出来なかつたのであつた。



鈴久のゐない上に、鐘紡は非常に安値に暴落してゐたので、今度は、前とは反對に買ひに廻つた。しかし矢張り思ふ芽も出ず、再度の損害に全く窮乏して、香港に去つてしまつたのが、そこでかりそめの病を得て果敢なく世を終へた。

この麥少彭は、實際支那一流の大法螺吹きで、相當の資産は事實あつたのだが、本國に無限の財のあるのは出鱈目の駈引で、取引銀行の三菱から借出した金を、まづ上海の銀行に送つて、そこから改めて麥の手許に送つて來たといふのだから、随分手数のかゝつた念入りな嘘もあつたものである。この話はいまだに市場の一つ話として時折聞くことがある。

悲壯な死を遂げた人に、横濱の長者平沼延次郎氏がゐる。

平沼專藏、原富太郎、茂木惣兵衛といへば横濱屈指の富豪として、金港財界の重鎮であつた。その三家が揃つて不思議な事に養子だつた。何れも先代の眼鏡に叶つて迎へられたのだから、それぐ手腕のあることは言ふまでもないが、就中平沼專藏といへば、裸一貫で埠頭で働き全く汗と力とで一代に千萬圓の富を築き上げたえらい者だ。

その平沼家に迎へられた延次郎氏は、名古屋の巨商瀧兵右衛門氏の息で、高商を卒業して間もなく、養子となつたが、三養子の中でも頭腦も手腕も群を抜いてゐた。本業は石炭屋で、店の一切は大番頭馬場金助に委せてあつたところへ、延次郎氏が乗り込み、若き

當主として實地の商賈を番頭に就いて學んだわけであつた。

馬場金助は相場師であつた關係上、延次郎氏もいつしか實際に手を染めるやうになつた。そして日露戦争當時から戦後にかけて、一千万圓も握つた幸運兒で、

『流石に俺の養子だ。えらい働き者だ』

養父の専藏は、自分の見込みには違はなかつたことを喜びもし、得意になつて納まつてゐた。何しろ一千万圓の資産といはれた石炭屋を、僅かに數年の間に、倍にしたのだから、これ程の働きものは滅多にないのは當然だ。

養父に評判がいゝばかりではなく、横濱財界でも恐るべき手腕を敬服した人々に推されて四品取引所の理事長に就任し、順風に帆を揚げた工合で極めて都合のよい幸福に恵まれてゐたのである。

しかしその幸福は、決して永遠のものではなかつた。榮枯盛衰は世の常とはいひ乍ら、夢にも知らぬ悲惨な運命が、その行手に招いでるようとは全盛にある平沼延次郎自身は素より、人も共に思つても見なかつた事である。

手を延ばせるだけ延ばして買玉を殖やしたところへ、大暴落を食つたのだから、その打撃は基礎までをグラつかせた。そこへ持つて來て理事長をしてゐたやけに、場の波瀾を少しでも狭くしたい爲、他の店に追敷まで融通してやつた義侠的の觀念が、彼れを苦しめ災して、儲けた一千万圓の金は殆ど